
矢車特殊短編集

谷津矢車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

矢車特殊短編集

【Nコード】

N4234G

【作者名】

谷津矢車

【あらすじ】

イマイチうだつの上がない「なろう」作者・谷津矢車による、少し不思議な短編集。バンド・スピッツへのひねくれたオマージュが詰まった短編集です。

ストーリーテラーの独り言【1】

ようこそ、「矢車特殊短編集」の世界へ。

私、作者の矢車……ではございません！ ハイ残念でしたー！
ベロベロバァー！

……え？ 「じゃあ、お前は誰だ？」ですって？ 決まってるじゃない。あたしはあたし。……え？ 「振り込め詐欺じゃあるまいし」ですって？ もう、どうしてそちらの世界の人って、名前とか立場とか、そういうバツカバカしいことばかり気にするのかしら。そんなもの、あってないようなもののなに。

実はね、あたしに名前はないの。

あたしは、今このテキストを読んでくださっている読者様の住む世界とは隔絶されたところ、はつきりと言っちゃえば「矢車特殊短編集」っていうテキスト世界にいる、登場人物の一人ってわけ。一般的には、ストーリーテラーって類型されるキャラクター。まあ、現状に即して言えば、あたしは「矢車特殊短編集」の、ストーリーテラーってわけよね。

……え？ 「ストーリーテラーって、作者とイコールなんじゃないのか？」って？

ノンノン。ぜんぜん違うのよ。だってそうでしょ？ 「世にも奇妙な物語」のストーリーテラーであるタ。リさんが、あのお話の作者ってわけじゃないでしょ？ あくまでタ。リさんは、「世にも奇妙な物語」っていうドラマの登場人物なわけ。

でもね。ストーリーテラーっていうのは、作者に一番近いキャラクターではあるの。

登場人物でありながら、作品世界を俯瞰して見ることが出来るし、その結末も見通すことが出来る。そして作者の意図もすべて知っている。そして、作品世界とは少し離れたところから、ものをいう存在なわけで。かなり特殊な役割を負ったキャラクターなわけよ。端

的に言っちゃえば、ストーリーテラーって、作者の代弁者なのよね。こんなことをつらつら言い募って何が言いたいのかっていうとね、ここで、作者の矢車のエゴを皆さんに披露したくてしょうがないからなのよ。

今回矢車が発表するつもりの「矢車特殊短編集」って奴、本人的にはかなり“特殊”なものらしいの。どう特殊なのかというと……。「バンド・スピッツの曲をモチーフに書いた短編／中編集」ってことなんだけど。でも、そんなこと、読者の皆様にはカンケーないことじゃない？ スピッツの曲をモチーフに話を書こうが、君が代をモチーフに話を書こうが、「みっちゃんみちみち」をモチーフに話を書こうが、読者様からすればそんなのカンケーないでしょ？ 文章として面白ければそれでいいじゃない？ でも、どうしたわけか、矢車が納得しないのよ。「作者がテクストより前面に立って、種明かしをするのは野暮だ！ ……でも、スピッツの曲のオマージュだ！ って宣言したい！」ってよく分からないことを言ってる聞かないのよ。

そこで、あたしの出番。

矢車、無い脳みそをフル回転させて、なんとか自分の意図を直球に語れないかと考えたのよ。そこで、“ストーリーテラー”のあたしが登場、ってことになったわけ。矢車のヒネた腐れ脳内で、「ストーリーテラーに己の意図を語らせれば、オツケー……かな？」って浅はかなゴーサインが出たみたい。なんていうか、小人閑居してナントカ、よね。

そんな腐れ作者のことはさておいて、あたしはあたしの仕事をしなくっちゃね。

さっき話したように、この短編集、特殊です。スピッツの曲をモチーフに書いてる、っていうことをとりあえず

念頭に置いてほしいの。でね。「空も飛べるはず」とか「チェリー」とか、あるいは「若葉」とかをモチーフにしてくれればいいのに、あの腐れ作者、根っからのスピヲタなもんだから、あんまり知られてない曲をモチーフにしているのよね。これだからヲタは……。

でも、安心して！

とりあえず、原曲を知らなくても、お話として成立している（はずだ）から！……って、今の一言は矢車に言わされたんだけどもあと、こちらは原曲をご存じの方向けの注意事項なんですけど……。

この短編集、あくまで矢車のモーソーですからね！「どうしてあの曲がこんな話になるんだYO！」って怒るだけ野暮なんじゃないかしら。それに、矢車みたいな腐れ作者に対して怒るのは、「無限増殖する栗まんじゅうで宇宙は滅びるか」を真剣に考えるよりも時間の無駄よ？

あと。

本来、この短編集、ファンフィクション（二次創作）に含めなくちゃいけないのかも知れない（っていうか含めるべきな）んだけど、ごめんなさい、ファンフィクション（二次創作）に含めません。でも、ここで（作者の代わりに）言っておきます。スピッツさん、本当に大好きです。大好きすぎて、オマージュしてしまいました。

さらに勢い余ってカテゴリーを「文学」にしてるけど、それも気にしないでね　気にするだけ時間の無駄無駄。

注意事項終わり。

さて、「矢車特殊短編集」第一のお話は、絵描きさんのお話です。絵描きになりたくて上京したはいいけれど、いつの間にか学校も卒業してしまつて、バイトで糊口をしのぎながらのんびんだらりと日常を過ごす「僕」。その「僕」の元に、専門学校時代の恩師「春部さん」から呼び出しの手紙が届く。その手紙に従って春部さんの元に向かうと、春部さんから「肖像画を描かないか」と誘いを受け

る……。ってお話。

モチーフになっているのは、1stアルバム『スピッツ』収録「月に帰る」。

幻想的なメロディラインと、おとぎ話の「かぐや姫」を思わせる歌詞が融合した、どこか厭世的な気配のある曲、だってさ（あたし、あんまりスピッツ詳しくないの！　ここらへんは矢車に無理矢理言わされてるのよ！）。

はい、では、どうぞ。

ストーリーテラーの独り言【1】（後書き）

言い忘れたけど、

短編：30000字

中編：30000字～120000字

……ってことでよろしくね！。Byストーリーテラー

第一夜「月はいつでもあなたの元に」【1】

五千光年かなたにある星々の古い光を浴びながら、僕はビールをすすった。ビールの苦みが喉いつぱいに広がった瞬間、風が吹いたけれど、ヒートアイランドに吹きすさぶ生暖かい風は僕のことを冷やしてくれないようだった。むしろ、この場に熱々のクリームシチューのようにどろりとした熱気と、泥水のようににつちゃりとした湿気を残すばかりだった。

数m上には赤と白の提灯が下がっていて、祭りのような雰囲気醸し出そうと努力しているようだった。でも、東京の真ん中にあるこのビアガーデンに“祭り”のような熱気を求める人なんていない。結局、刹那の涼やかさを求めて人はビアガーデンに足を運ぶのだから。

隣の席には、既に顔を真っ赤にしながらジョッキを傾け、「課長が悪い」「部長が悪い」「専務が悪い」「常務が悪い」「社長が悪い」と言い合うサラリーマンたちが座っていた。課長や部長、専務や常務や社長の何が悪いのかは分からないけれど、まあ碌でもない人たちなのだろう。聞き耳を立てるほど興味のある話ではなさそうだった。

少なくとも、都会の空に浮かぶ満月の方が、はるかに面白い話を披露してくれそうだった。

僕は又、ビールをすすった。いい加減ぬるくなってきたビール。苦みばかりが自己主張していた。

店員さんたちだけが、このどこか白けた空気を盛り上げようと、ことさらに威勢のいい声を上げていた。

店員さんの威勢に圧されるように、僕は卓の上にある枝豆を口の前で開いた。ちょっと塩気が強い枝豆を咀嚼しつつ、僕はため息をついた。

酔いは見事に回ってきている。目の前の割箸がいやに気になつてしょうがない。酔っぱらうと箸を弄ぶのは僕の癖だ。よくシャーペン回しの要領で箸をぐるぐる回すものの、その時点でかなり酔っぱらつてしまつていたので結局箸をとり落とすのが僕のパターンだ。でも、粗相をするのも何だしな、と思いとどまるくらいの理性はしつかりと残つていた僕は、箸の放つ魅惑を振りはらいつつ、胡乱な眼で辺りを見渡した。

ぐるぐる回る視界。ぐるぐる回る景色。

酔いが、僕にインスピレーションを与える。

ふと思つところがあつて、僕は立ち上がったビヤガーデンの端に立つた。針金格子の外に広がる“東京”は、まるでいつか田舎で見た夜空のように無数の明かりが光っていた。でも、その明りの一つ一つが目に毒々しくて、どうにも好きになれなかった。

ふと、僕は思った。

東京には綺麗な物も多いけど、でも目を背けなくなるようなものも多いんだな、と。そして、自分自身もまた、僕の言う“目の背けなくなるもの”なんだろうと思ひ至つた僕は毒々しい色をした宝石をまき散らしたかのような下界から目を背けた。

なんだか嫌気がさした僕は自分の席に戻り、卓の隅に伏せられていたビール5杯分と枝豆しか頼んでいない注文書を手に取つてレジのほうに向かつた。

電車で揺られること数十分、途中のターミナル駅で乗り換えて、自分の住む町に帰ってきた頃にはすでにその日が終わろうとしていた。僕と一緒に駅に降り立つたのは、疲れ顔のサラリーマンが2、3人と、いやに独立心が強そうな30歳くらいの女の人が一人だけだった。サラリーマン氏にせよアラウンドサーティの女性にせよ、あまり係わり合いにならなかつた僕はそそくさと改札を抜けた。一つしかない改札を抜けた僕は左に曲がつた。右に曲がるとこの町の割には華やかな歓楽街が広がっている。きつと、僕が18まで

住んだ田舎にその歓楽街を移設すれば、おそらくそこら一帯の町における一番の歓楽街として大盛況を誇るだろう。とはいっても、東京の空気に慣れてしまつてしまうとどうしても場末な印象はぬぐえない。往々にして、東京のベッドタウンというのは何やらさびしい。それはきつと、光源が近すぎるにも関わらず、ある程度の輝きを求められてしまふからなのかもしれない。

右に広がる歓楽街から逃げるようにして左を曲がり、しばらく歩いた僕の目の前に広がったのは大きな川だった。川幅が50mはある。僕の故郷にはなかったような大きな川だ。

河川敷にある道を一步一步歩いた。地面の砂利が足を踏み出すたびにサラサラと鳴る。

この道はよく僕が歩く道だ。

本当は改札を出たら右に出て歓楽街を抜けた方がはるかに家までは近いのだけれど、歓楽街を抜けるのが嫌で結局河川敷を歩いている。でも、そんな後ろ向きな目的でなしに、僕は結構この河川敷を気に入っている。

川の水音が、すべての音をせき止めているような感じ。

普段耳を背けたいのに届いてしまう雑音。

聞く気もないのに聞こえてくる嫌な音。

それらをすべて川の音が吸い取ってくれるような感じがする。

きつと、そんな場を求めているのは、きつと僕自身がひどく疲れしているからだだろう、と僕は真っ暗な水面に視線を向けながら思った。

僕は絵描きだ。

絵描き、といっても、画廊に絵を買い取ってもらえるほどアーティスティックな絵を描くわけでもないし、かといってどこかの企業のPRポスターに使うには少々難解な絵を描いている。つまるところ、僕の絵はいかなるお金にもなっていない。確か数年前、ある知り合いのつてで、あるモノ好きの家に置かれるという風景画の依頼があった。精一杯こなししてみたのだけれど、先方の意に沿うような

（甘つちよろい）風景画をどうしても描くことができず、その仕事をふいにしてしまった。その仕事がパアになったただけではなく、仕事を紹介してくれた知り合いとも縁が切れてしまった。

それ以来、絵の仕事は来なくなってしまった。

それはそうだ。画家なんて商売は信用商売なのだ。どんなに下手な物であろうとも、クライアントの要求通りのものを作って手渡すのが絵描きという仕事なのだ。それが気に入らないのなら、筆を折ってしまった方がいいのだ。

でも、そこまで分かっていたいつも、僕は“絵描き”という看板を捨てられない。

河川敷を歩きながら、僕はため息をついた。

そして、足を前に押し出しつつも、さらに続ける。

でも、絵描きという看板を捨てることは、僕には出来ない。

もう何年も前に、僕は故郷を捨ててしまっている。

高校を出た僕は、地方の夢見がちな青年の例にもれず、「東京に出て有名になってやる！」と息巻いていた。東京という言葉には、未だに“成功”という言葉が潜んでいる。バブルを経て失われた十年を乗り越えた東京であっても、東京という街の本質は全く変わっていない。地方の夢ある少年にとって、東京というのは未だに夢であり続けるのだ。ただし、“東京にはお金が集まっているから当然パトロンなども多いし、画廊の数だって日本で一番多いのだからチャンスが転がっているはず”という、アメリカンドリームのような気楽さとは若干異なる裏付けもあるのだけだ。

高校出たての僕は、結局そんな東京の魔力に引き寄せられていたのだろう。

家業の農業を継いでくれとせがむ親を蹴とばして単身東京に出た僕を待っていたのは、きわめて普通の専門学校生活だった。絵を教えてくれる学校の中でも学費がとんでもなく安い上、入学に資格なんてほとんどなかった。僕の絵で専門学校のセンサーの度肝を抜いてやろうと息巻いていたのに、結局絵の試験さえなかった。願書を

出したらはい合格、みたいな専門学校だったのだ。

その専門学校での生活は碌でもない毎日だった。絵の具をかき混ぜるよりは麻雀をしている時間の方が長かったし、デッサンの線を引くよりは彼女の部屋のカーテンを引く回数の方が多かった。もちろんそれは僕も悪い。でも、学校側も悪いと思う。だって、僕らのことを金ズル程度にしか思っていないようだった。

家を飛び出してしまった僕は親の脛をかじるわけにはいかず、バイトで学費を稼ぐしかなかった。困ったことに、もともと筆が手から遠ざかっていた状況に、さらに艱難が乗った形だった。結局、僕の専門学校生としての3年間は一生のうちで一番絵筆を握らない時期だった。

そんな専門学校を卒業してみると、前には何も待っていないかった。もともと続けていたバイト先から、「これからも継続してアルバイトをしてくれないか。もし就職しないなら」と言ってきたから、そのまま大学時代からお世話になっている引越屋でバイトをしている。そのバイト先が東京にあるから、行きたくもない東京に足を運び、その鬱憤を家にまで持ち帰りたくなくてビアガーデンでみそぎをし、そしてこうして一人河川敷を歩いている、という次第なのだ。

月明かりに照らされた河川敷を歩きながら、僕は思う。

これから、どうしよう。

そう、これでも少しは悩んでいる。今の状況、どう考えてもまずい。“絵のためだから”といってアルバイトをしながら食いつないだところで、僕に絵の仕事はない。かといって働こうにも僕には何の特殊技能もない。書けるものなら履歴書に“絵が描けます”と書きたいけれど、履歴書に書いていいような“絵が描ける”とは、どのくらいのレベルを指すのかが一向にわからない。

そんなこんなと悩みながら河川敷を歩くうち、家に続く曲がり角が現れた。ここを曲がれば住宅街に入って、その墓場のように静かな住宅街を抜ければ僕の住むアパートに着く。

でも、なんだかその曲がり角を曲がる気がしなかった。

悩みを家まで持ち帰りたくなかった。家に悩みを持ち帰ると家にそのイメージがついてしまう。疲れを取るための家なのに、そんなマイナスイメージがついてしまっただけはおちおち休めなくなってしまう。

河川敷の道から外れた僕は、芝で覆われた斜面に寝転んだ。そして、満月を眺めた。

その日の満月は赤く輝いていた。

その赤い満月の下で、無数の明かりが輝き、その毒々しい明かりを川の水面が反射する。

そして、それをずっと眺めている僕。僕と満月が、妙に明るい下界を挟んで向き合っている。

僕はこれから、どうなるんだろう？

心の中でそう呟くと、なぜかその僕の言葉に対して返答があった。

「あなたはこれから、月に会う」

第一夜「月はいつでもあなたの元に」【2】

驚いた。誰もいないものだと思っていたのに、こうして僕に話しかける人がいるなんて。いや、そもそも、僕、いつのまにか独り言を呟いてたのか、とちよつとバツが悪い気分に襲われた。だから、ちよつと首をすくめながら辺りを見渡したのだけれど、どこにも人の影は見つからなかった。

でも、その声は続けた。

「あなたは月に会って、それから選択に迫られる」

選択。その言葉についドキツとした。

その声は続けた。

「あなたは果たして、月に帰るのかしら。それとも、ここに居続けるのかしら」

それっきり、声は途切れた。

若い女の声だった。いや、“女”と表現すべきなのかも分からなかった。今さっきまで僕の鼓膜を揺らしていた音は、むしろ幼さを連想させるような未完成さを備えていた。

でも、僕の周りには人の影は一切見られなかった。あるのはただ、闇の中を流れる水面のようにひそやかな夏の気配だけだった。

疲れてるのかな。

頭を振った僕は、斜面から起き上がると河川敷の上にある道に戻り、僕の住むアパートに続く道に歩を進めた。足を踏み出しながら、もう一度河川敷の方を見た。でも、僕の期待に反して河川敷には何物の影もなかった。あるのはただ、赤い満月だけだった。

アパートに帰った僕を待っていたのは、すごくシンプルな手紙二枚だった。

一枚目は、汚いはがきだった。

差出人の欄には見慣れた母の名前が書いてあった。農家の嫁らし

く豪放で読みづらい字だった。きっと今故郷の方は稲の水量管理で神経を使っている頃だ。……と、カレンダーと突き合わせてそんなことをふと思う自分が腹立たしかった。

母には今住んでいる住所を教えていなかった。ただ、上京する時にある友人にだけこつそりと下宿先を教えただけだった。きっと、そいつが母にばらしてしまったのだらう。……思えば、その友人とも連絡を絶ってしばらく経つ。彼は元気だろうか。

でも、この手紙は僕のテンションを奈落の底に突き落とすには十分な内容だった。せつかく河川敷で暗い気分をそぎ落としてきたのに、家に帰って待っていたのがこの手紙じゃどうしようもない。テンションも落ちる。

つまるところ、僕に帰郷を促す内容だったからだ。

この頃の近況（ちなみに、変わりないらしい）とか、田舎の作柄とか（これも変わりがないらしい）とか、うんざりするくらいに変わり映えのしない日々が拙い筆で書かれていた。そして最後の一節は、まるで本来の目的をはたと思っていたかのように「帰ってきてくれないか」と締められていた。

母さんは気づいていないようだった。僕が都会に出たのは、絵が描きたかったこともそうだけど、むしろ田舎の変わり映えのしない生活にこそその理由があったのに。

溜息をついて、二枚目の手紙に目を向けた。

二枚目は、一枚目とは違って便せんに入っていた。几帳面な字で僕の名前が書かれていた。裏返して差出人の名前を見るとその欄に踊っていたのは懐かしい名前だった。懐かしいだけではなく、幸運を僕に運んでくれる名前だった。

はやる気持ちを抑えて、とりあえず深呼吸を何度か繰り返した。そして、便せんの頭を乱暴に破って、中の手紙を引きずり出した。便せんの中にあっただのは、三つ折りにされた、たった一枚のレポ―ト用紙だった。

その中には、こう書かれていた。

“ 8月29日午後、俺の研究室に來い 春部 ”

相変わらず唐突で上目線な物言いだな、と僕は首をかしげた。でも、春部さんの健在ぶりに、ちよつと僕は嬉しくなつた。

カレンダーに目をやると、今日は8月の28日だつた。つまり、明日の午後春部さんを訪ねればいい。明日は午前中にバイトが入っているけれど、“午後”としか指定がない以上、午後の1時だろうが午後の9時だろうが一向に構わないはずだ。

一枚目のせいで落ちたテンションが二枚目の手紙のおかげで持ち直し、結局その日はウジウジとせず済んだ。

そのせいで、河川敷で聞いた声について、悩むのを忘れてしまったのだけれど。

じりじりと背中を焼く日差し。じりじりとうるさい蝉の鳴き声。

その全てに損害賠償を求めたら幾らくらいもらえるのだろうか？ 50円くらいか。せめて、汗ばんだ制服の洗濯代くらいは出るというんだけどなあ、とどうでもいい妄想を浮かべる。それは、目の前の現実から逃避するためのだ。でも、目の前の現実が否応なしに目の前に飛び込んでくるので、結局僕は心の中でこつ呟くしかなかった。

筆筭つていうのは、どうしてこんなに重いんだろう。

僕はふと抱えている筆筭を眺めながらため息をついた。その溜息を、差向いに同じ筆筭を抱えている社長が咎めた。「おいおい、仕事中にため息つつうのはよくないな。特に重いものを持つているときはもつてのほかだ。臍^{せいかたんでん}下丹田から力が逃げちまうぞ」。社長はそう言つて、芝生のようなひげ面の相好を崩した。

その社長に愛想笑顔を振つてから、どうして筆筭はこんなに重いのかな、つて思つたんです、と正直に言つと、社長は笑顔を引つ込めて言つた。「それは、俺達引つ越し業者には関係ねえ話だ」。凄みの利いた声に、ちよつと僕はたじろいた。

この人は、僕の働いているバイト先、“よろず引越屋・白くま屋”の社長だ。昔は大手の運送屋で働いていたとも、あるいは某暴力

団の幹部をしていたとも噂されている。でも、詳しいところは僕にはよく分からない。もしかすると、社長自身、自分の経歴なんてよく覚えてないんじゃないかと僕はニラんでいる。ともかく、いろいろな仕事を転々としたあとに手に入れた元手で引越屋を始めたようだ。元が苦労人だから面倒見はいいし、気さくな人だから従業員たちからも好かれてる。僕が知りうる社長のパーソナリティは、大體こんな感じだ。

社長はまた笑顔に顔を戻して続ける。「俺達引越屋つつうのは、あくまでお客さまの荷物を運ぶのが仕事だ。たとえ箆笥の中にマウンテンゴリラが入っていようが、使用済みプルトニウムが入ってようが、そんなもんは俺達には関係ねえんだ。そして、それが重かるうか軽かるうが関係ねえ、そういうこった」。笑顔なのだけれど、妙に怖い。「社長が元ヤクザ」という話も、あながち間違いではないのかもしれない。

僕らは今、引越し作業をやっている。

今日は忙しい日らしく、普段は会社で短いたばこを吸っている社長がこうして出張っている。大きなトラック一個分、という大手の引越し屋ならば3人がつく現場にも関わらず、今日は僕と社長の二人でこの現場を捌いてしまうようだ。

この現場は、本当に大きな家だった。日本中の誰もが知っている有名駅から歩いて10分のところにある高級住宅街の一角に、そびえるように立つ家だった。小さな庭には茨の類が生い茂り、影が深く差していた。ところどころツタがまいていて、しかもくすんだ色をした壁だった。黒くて鋭角な屋根が、不気味にその建物にかぶさっている。一言で言うなら、「幽霊屋敷」のような外観をしていた。そんな幽霊屋敷に箆笥を搬入するということは、きつとこんな屋敷に引越す人がいるということなのだろう。

こんなところに人が住むんだろうか、と思っただけで、口にはしなかった。きつと、それを口にしたら社長に咎められる。

箆笥をとりあえず玄関まで運んだ僕らはまたトラックの方に戻っ

た。ようやく筆筭を運んだところで、まだまだトラックの中には運び入れるべきものがたくさんあった。思わずため息が出そうだ。でも、社長の手前、それもできない。うちの会社の決まりに“ため息禁止”という社長らしい一文があるからだ。生まれつきため息の多い僕としては、その決まりだけでため息ものだけれど、罰則はないのでまあいい。

社長も、荷物の多さに辟易しているようだった。うむむむ、と唸りながらどこから手を出したらいいものか、と悩んでいる。でも、かねがね“悩む前に手を出せ”と従業員に檄を飛ばす社長のこと、手早く小さな荷物を僕に手渡す。その荷物は巻物の束らしかった。「ほら、持ってけ」。受け取った僕は小走りでその巻物たちを玄関に運ぶ。その束を玄関先に置いたとき、束から巻物が一幅落ちて、巻物が開いてしまった。ああ、しまった。とりあえずその巻物を巻き直そうと拾い上げた。

その巻物には、妙な物が描かれていた。

菩薩やら仏様やらが、円形に並んでいる図。よそよそしい極彩色の中で、仏様たちが妙にだらりと微笑んでいる。一見して、不安を覚える類の絵だ。

突然、後ろから声がした。「おお、これあ曼荼羅まんだらじゃねえか」。

振り返ると、社長だった。社長は社長で大きな十字架を運んでいるところだった。きつと、いつの間にか怪訝な顔を浮かべていたのだろう、社長は続けた。「なんだ、美術系の専門生だったくせに知らねえのか。あのな……」。

社長の言うところはこうだった。

曼荼羅まんだらっていうのは、「弘法も筆の誤り」なんかの言葉で知られる空海さんが広めた密教でよく使われる図らしい。でも曼荼羅を何に使うのか、社長は教えてくれなかった。きつと、社長も詳しくは知らないのだろう。そんな尻切れトンボ感を穴埋めするように、社長は抱えている十字架に目をやった。「でもよお、この家のご主人何でもござれだな。密教にキリスト教とはな」。確かに、仏教の宗

教画といってもいいだろう曼荼羅と、キリスト教の象徴である十字架が対面している図は確かに異様だった。統一感がないというか、脈絡がないというか。

十字架を適当に立てかけて、まるで踏ん切りをつけるように社長は手を叩いた。「おいおい、余計な詮索はそれくらいにしろ。そもそも、お前、どうして巻物を開いてるんだ」。言われてみればそうだった。お客さんの荷物を無断で覗き見るのはまずい。それが仮に事故であつたとしても。社長は外に出て行ってしまった。僕も追わないわけにいかず、曼荼羅を元に戻してから、社長の後ろに続いた。

第一夜「月はいつでもあなたの元に」【3】

でも、その後も手が止まる機会が多い現場だった。

運ぶもの運ぶもの、どれも宗教がらみのものなのだ。某宗教団体の教祖様が書いているという自伝と、他の巨大新興宗教の神憑り本が同じ段ボールに入っていた。どこかの国で信仰されているのだろう木彫りの神様や、妙に卑猥な形をした石などもあった。いったい何に使うのかよく分からない金色のレースなどもあったけれど、きつとそれらは神様の周りを飾る装飾の類なのだろう。古今東西の宗教・あるいは宗教的な物が集まって、不思議なちくはぐさを醸し出していた。仏教にキリスト教・イスラム教からユダヤ教・ブドゥや拝火教、と知りうる限りの宗教を並べても足りないくらい、トラックの中にはいろんな宗教のかけらが詰まっていた。そして、その一つ一つを運ぶたび、社長が手を合わせるものだからやりにくい。「なに、神様を移動させるときにはそれなりの仁義を尽くすのは当たり前だろう」とは社長の弁だけど、いちいちそんなことをしていたのではきりが無い。

そういえば、この荷物をトラックに詰め込んだのはうちの社員のはずだ。その社員たちに、どういう感想を持ったのかふと聞いてみたいと思った。

そんなこんなでようやくトラックから荷物をすべて下ろした頃にはお昼頃になっていた。普段、これ程度の荷物だったら午前の10時には搬出し終えるのだけれど、嫌に時間がかかってしまった。社長は顎の髭をじょりつと触りながら、「まあまあ、まずまずだな」と言っていたけれど、その手で髭を抜いているところを見るに、きつと予定通りではないのだろう。イライラするときに髭を抜くのは社長の癖だ。

でも、かといってこのとき僕らは動きようがなかった。

引越し屋の仕事というのは“荷物の搬入”と“その荷物の位置決

め”に分けることができる。搬入までは客がいなくてもできるのだけれど、搬入した家具をどこに置くのかは客がないことにはどうしようもない。何せ、家具をどこに置くのかはあくまで客の自由なのだから。

でも、その客が姿を現さない。

さつきから社長が電話しているのだけれど、一向につながないらしい。「ただ今電源を切っているか、電波の届かない所におります」だよ」と社長が苦々しげに言っていた。

僕は待つしかなかった。

結局、1時間ほど待つて（その間、僕が買いに走ったコンビニ弁当を二人でかつ食らった）、ようやくその客が姿を現した。

白っぽいセダン。確かトヨタの古いモデルの車だ。言うなれば“中産階級による、中産階級のための”車だ。そんな今にも止まりそうな音を立てる車が、僕らの乗っていたトラックの後ろで止まった。その車の運転席のドアを開いて出てきたのは、年のころ60歳くらいのでっぷりしたおっさんだった。薄い髪をしているが、その薄毛を隠そうなんてつもりはさらさらなさそうだった。銀縁で大きな眼鏡をしていて、顔の印象のほとんどをメガネで占められていた。個性のない紺色のスーツに、これまた個性のない茶色っぽいネクタイを締めていた。ホワイトカラーが務める会社をじかに見たことがないからわからないけれど、会社にいたら課長とか呼ばれていそうな風体だ。

そのおっさんは、トラックの前で待つていた僕らに頭を下げ、自分がこの引越しの依頼主であること、急な都合により遅れてしまった旨、そして連絡もできなかった旨をどこまでも丁寧に延べ、謝罪の言葉をぶつけてきた。あまりに完璧な謝罪に、さつきまでっぷりぷりしていた（ついでに言えば、イライラして抜きすぎて、顎髭の一部が禿げかかってしまった）社長もたじたじになってしまったようだった。ひたすらに両手を振って、「あ、いえいえ、ほんの少ししかお待ちしておりませんから」と頭を下げるばかりだった。その

おっさんは名刺を出した。僕も受け取ったのだけれど、名前に一切の印象がこもらないような名前だった。かといって流麗でもない。なんというか、魚一匹住まない、妙に澄み切った川のようにとっかかきの無さを感じる名前だった。むしろ、僕が気になったのは、そのおっさんの名前の横に書かれた肩書だった。

“ 真世界研究会 企画業務部 部長 ”
真世界研究会？

（株）も（有）もつかない研究会。その企画業務部。しかも部長。なんというか、肩書が肩書の用をなしていない。結局、このおっさんが何者なのか、という大事な一点が一切分らないのだ。

きつと、社長も僕も怪訝な顔を浮かべていたのだろう。おっさんは苦笑いを浮かべつつも、何の負い目もなく言った。「ああ、真世界研究会っていうのは、無認可の宗教団体です」。宗教団体という言葉は何の臆面もなく言える人はかなり珍しいと思うけど、そのおっさんはその“ 珍しい人 ” だった。

社長は話すことに困ったらしかった。「はあ、宗教団体……」と相槌を打ちながら、右の耳に挟んでいたシャーペンの尻で頭を掻いていた。でも、そこは即断即決の社長のこと、いきなり商談に入った。さつそくなんです、家具類はどこにお置きしたらよろしいのでしょうか、と。その言葉にさしたる落胆も見せず、おっさんは答えた。あの筆筭は一階リビングに。あの戸棚は和室に。あの本棚は二階の八畳間に。といった具合に。

商談が済んでしまえば、僕らには行動しか残されてない。

おっさんの言うとおりに重い筆筭を一階リビングに運び、戸棚を和室に突っ込み、本棚を二階に上げた。

でも、玄関にはそれら家具よりも面倒なものがたくさん残っている。

“ 宗教的な ” 荷物類だ。

もちろん、こういうものについても運ぶのが仕事だから、客にどこに置くべきかおうかがいを立てる。なので、社長は部屋の隅に立

っているおっさんに声をかけた。「玄関にある……ものはどうしたらいいんでしょうかね」。“宗教的な”ものだけに、社長もちよつと神経質に言葉を選んでゐる。しかし、おっさんはまるでそんな社長の態度を面白がるかのように微笑みながら質問をしてきた。「は？ 玄関のもの？ 具体的に言ってください」。社長は頭を掻きつつ言つた。「いや、玄関にまだ置いてある本とか……」。その社長の言葉に、おっさんは「それはどういう本ですか」とたたみかけてくる。仕方なく社長は「。〇。先生の本とか、××先生の本ですよ」と、某宗教団体の教祖様の名前を苦々しげに言つた。するとようやく思いが至つたのか、あるいはこれ以上社長をいじめてもつまらないと思つたのか、おっさんは笑顔で言つた。「ああ、あの資料は二階の本棚を運んだ八畳間にお願ひします」。

一事が万事。こんな感じだつた。どうしたわけか、おっさんは社長に宗教ネタで突つかかり、困っている社長を見て楽しんでゐるようだつた。どうしてかはよく分からないけれど、社長も僕も、あるいは日本に住む人の7割くらいは、“宗教”に身構える習慣があるらしい。なんというか、“宗教は怖い”とか、“宗教とはかわらないほうがいい”みたいな空気があるような気がする。おっさんはその習慣のことを笑っているようだつた。

さて、そんなこんなで荷物がすべて収まるところに収まつた。社長はものすごく疲れた顔を浮かべていた。普段は筆笥をひとりで運んで飄々としているし、そもそも元気な人なのに。気疲れなのは言つまでもないけれど。

玄関先で、「では、これにて」と挨拶をしたとき、何を思ったのかおっさんは靴を履いて社長の脇をすり抜けて表に出た。社長と僕が二人で視線を送っていると、おっさんはセダンの横に立つた。荷物でもあるのだろうか、と顔を見合せていると、そのセダンの後部座席のドアから、女の子が出てきた。

遠目だからよく風体は分からなかったけれど、とにかく真つ黒いストリートヘアと空色の半袖ワンピースが目に入った。おっさんに

先導されてこちらに向かってくる女の子。次第にその女の子の風体が夏の日差しに照らされて明らかになってゆく。

前髪まで同じ長さに伸ばしたロングヘア。それを真ん中で分けて両側でピン止めしている。そうして覗かせている顔はどこか端正さを欠いていた。でも、かわいらしかった。世の中には、端正を欠く美しさというものがある。危ういバランスの上に成り立つ積み木遊びのような魅惑を潜めた、そんな顔のことだ。でも、年齢を読み取れるような顔立ちではなかった。見ようによっては25歳くらいにも見えるし、見ようによっては15歳にも見える。でも、風船のように膨らんだ胸ときゅつとくびれた腰の印象もあって、大体20歳くらいかな、と適当に当たりをつけた。

おっさんに先導された女の子は、わき目も振れずに僕らをすり抜け、玄関に入っていった。

そして女の子が完璧に奥に引っ込んでから、おっさんは顔を出した。「どうも、ありがとうございました」と、丁寧に頭を下げた。こちらにもつられて頭を下げた。

挨拶を終えた社長と僕は何か急に急かされるようにトラックに乗った。社長の運転する車はゆっくりと走り出し始めた。

小さな通りを抜け、大通りに出たころ、社長はたばこに火をつけながら言った。「今日は変な現場だったな」と。僕が横で頷くと、社長は続ける。「特にあのオヤジ、あれはやばいな」。どういう意味です？ と話を先に促してみると苦々しげに社長は言った。「あれは、“過激”を楽しんでやるよ」。時折、社長という人間は己の感覚のままに言葉を使う。よく言えば難解だし、悪く言えば意味不明なのだけれど、質問さえすればその言葉の真意をかみ砕いて説明してくれるだけの優しさのある人だ。

どういことですか？ と水を向けてみると、社長は案の定話してくれた。「なんつつかよ、自分が過激な人間だ、つてことに気づいてて、でもその過激さを大層お気に召してる、そんな感じかね。いや、それだけじゃあねえな。きつと自分の過激さを、表に出して

楽しむような人間なのさ」。まだ、意味が分からなかった。きつと空気で察したのか、たばこをもみ消してから社長は続ける。「この譬えが適当かはわからねえけど、よく“自分は悪^{ワル}だ”って触れ回る高校生っているだろ？ あれは、過激であろうとするガキの自己主張なわけだ。それは、高校生くらいの頃は、“普通はカツコ悪い”もんだっていう感覚があるからだ。でも、大人になると違う。“普通が全て”ってなる。でも、時折いるんだわ、大人になってもなお、ああいう風に自分の奇妙さを売り出す奴がよ」。

その言葉は、僕の胸にちよつとした閉塞感を与えた。だって、その言葉、専門学校を出たというのにアルバイトで日々をつないで絵描きを夢見る人間に対しても向けられた言葉だからだ。絵を描く、という作業は、結局のところ自分の奇矯さを世間に問う作業に他ならない。あのおっさんが『“過激”を楽しむ』人間かどうかはわからないけれど、少なくとも僕はそういう人間なのだ。

社長はぐるぐるとハンドルを回しながら言った。「……おめえは、ああいう人間になっちゃ駄目だぞ。それでも俺はおめえに期待してるんだ。普通に何か仕出かすんじゃないか、ってな」。“普通に何かを仕出かす”。その言葉を心の奥で噛み締めた。

一瞬、沈黙が僕の周りに立ちこめた。

また煙草を取り出して、火をつけた社長は何かを思い出したように言った。「そーいや、あの女の子、可愛かったな」。僕にたばこの箱を差し出してきた。一本頂戴して吸ってみた。ものすごく苦かった。煙に蒸せる僕に、社長は困った野郎だ、と言わんばかりに微笑みかけてきた。

時計は午後の三時を指していた。

第一夜「月はいつでもあなたの元に」【4】

結局、専門学校に着いた頃にはとつぷりと日が暮れていた。ふと時計を見た。午後の七時を指していた。

あたりは暗いのに、煌々と輝く大通り。その大通に面した学校。田舎だと、夏の夜は割と涼しかった。きっと、田んぼの水のおかげで吹く風もどこか涼しかったのだろう。でも、東京はそうはいかない。まるでガスファンヒーターのような風が僕の体に吹き付ける。アスファルトから立ち上る都会の体温が、僕の体力を少しずつ薙いでゆく。

その専門学校は、都心の一等地にある。ビル一つがすべてその専門学校用に借り上げられていて、そこで授業が繰り広げられる。都心の一等地ということとで、『文化の街・上野へアクセスがいい』というのを売りにしていた。でも、ここに通う学生のほとんどは新宿とか鶯谷とかへのアクセスがいいことに立地の優位性を感じていたようだった。きっと僕もそうだったのだから、後輩たちもそうに違いない。

ともかく、卒業して数年経つというのにまるで変化のない外観を見上げてから、僕はそのビルに入った。ほとんど人のいないビルの廊下に、僕の足音だけが反射する。一回だけ守衛さんとすれ違ったけれど、あまり僕に興味を持ってくれなかった。きっと、学生だと早合点したのだろう。でも、青い作業着姿でうろろしている男に声も掛けない守衛というのは役に立つのだろうか、とふと思った。やがて、廊下の奥に、光が漏れているドアが見えてきた。

夜の七時にまで明かりをつけているのは、春部さんしかない。それは、昔から続く伝統のようなものだ。思いつき、ドアを開いた。

果たして、部屋の中には椅子に座りながら外の景色を眺めている

男の姿があつた。黒いYシャツ、それに逆立てた髪。とても専門学校の先生とも思えないけど、でもその格好も昔と変わらない。その後ろ姿に僕は声をかけた。「春部さん」。

春部さんは、まるでシントゲートのボスのように椅子を回転させて僕の方に向き直った。そして、片手をさつと上げた。「久しぶりだな。来ないかと心配したぞ」。このぶっきらぼうな言葉選びも相変わらずだった。

春部さんの後ろには、東京の明かりが広がっていた。とはいっても、このビルはせいぜい10階程度の高さしかないので、明かりが無数に見えるわけでもない。道をはさんだ向こう側にあるビルの明かりが見える、といった程度の明かりだ。

僕はその夜景に向かって謝った。すいません、今日バイトが入ってまして、そのバイトに時間がかかったんです、と。

それは事実だった。午前中の宗教おじさんの件で手間取ってしまった関係で仕事が押してしまい、本来だったら午後の3時前には終わるはずだった勤務時間が延びに延びてしまった。結果、結局七時過ぎにここに顔を出す羽目になっている。

うんうん、と頷いて、春部さんは「なるほどな。……その制服、似合ってるぞ」と僕の制服姿を褒めてくれた。なんというか、相変わらず不思議な話の展開をさせる人だ。

春部さんは、専門学校でお世話になった先生だ。

この専門学校にはいくつかの科がある。絵画科、彫刻科、コンピュータグラフィックス科。大きく分けるとその三つだ。春部さんは明らかにコンピュータグラフィックス系にも関わらず、絵画科で教鞭を取っていた。その異例の人事について僕が在学中、“専門学校の学長の息子らしい”とか“理事長の弱みを握っている”とかいう噂が、まるで薪に灯る炎のようにくすぶり続けていた。きつと、今でもくすぶり続けているのだろう。学校の噂というのはそういうものだ。ともかく、絵画科に進んでいた僕はたまたま卒業制作の際に春部さんのお世話になった。本当に偶然だった。偶然、“まだ卒

業制作の枠に空きのある先生”というそれだけの理由で春部さんを選んだ。

でも、それは正解だった。

春部さんは、卒業制作の第一回目の授業で言った。「写真とかコンピュータグラフィックがある時代、絵っていうジャンルは絶対的なものではなくなっている」。いきなりこれだ。曲がりなりにも“絵を描きたい”と志望している学生を前にこんなことを言う先生、そうはいまい。あっけに取られる学生の前で、春部さんはこう続けた。「なら、絵はどんな付加価値をつけて行かなくちゃいけない。写真にもコンピュータグラフィックにも追いつけないような利点を伸ばせばいい。……そこで、俺の受け持つ卒業制作には、ある観点で以て評価を加える」。理知的な言葉の選び方だ。とても、絵画の先生とは思えない。学生たちがあんど口を開けるのを横目に、春部さんは黒板にこう書いた。

“特異点”

春部さんは僕らの方に振りかえって続けた。「お前たちなりの“特異点”を見つけれ。これだけは世界中の何にも負けないと胸が張って言えるような作品を作ること」。その言葉に、質問が飛んだ。“特異点”っていうのは、つまるところ個性ってことでいいんですか？ と。すると春部さんはいいい質問だ、とその質問を飛ばした学生を褒めてから首を横に振った。「個性じゃない。そもそも個性なんていうのは人間の能力バロメーターのばらつきにしか過ぎない。俺が言っているのは、そのバロメーターの何か一個でも秀でてみろ、ということだ」と、きっぱりと言った。

そのおかげで、その年、春部さんが受け持った学生の卒業制作は散々たるものだったらしい。聞くところだと、学長以下ほとんどの先生方が“再提出”の烙印を押したらしい。でも、春部さんだけは「どれもなかなか粒ぞろいですよ」とうそぶいたという。結局、再提出もないまま卒業出来たのだからよしとしよう。

僕は春部さんの前に、届いた手紙を置いた。「あの、これはどう

いうことですか」と。

すると、春部さんは一瞬悩んだような表情を浮かべた。けれど、子どもっぽく笑った。「俺が連絡をよこすときがどういうときか、分かっているだろう」。でも、僕は納得出来なかった。納得できない旨を話すと、春部さんは仰々しく笑った。「納得なんかしなくてもいい。ただ、こちらとしてはどうしても頼みたい仕事がある、それだけの話だ」。と、うそぶいて。

春部さんという人は、どういうルートからか、絵の仕事を学生にあっせんしていた。専門学校の先生ともなるとそういう話が多く来るのかもしれないけれど、他の先生からそんなバイトの話を聞いたことがないので、やっぱり春部さん独特のルートのような気がする。実を言えば、僕も時々春部さんから仕事をもらっていたことがある。でも、数年前に受けた風景画の仕事を投げてしまってから、絵のバイトの紹介がすっかり途絶えてしまっていた。

だから、不思議だった。一度仕事を投げたような奴に、また絵の仕事を頼もうなんて人の気が知れなかった。

でも、春部さんにそんな危惧はなさそうだった。彼は嫌味っぽく続けた。「金をもらうプロとして、約束はきちんと果たさなくちゃならん。それはお前自身、身に染みて分かっていることだろう。もしそうでなければ、こうやって俺のところに顔も出せないはずだな」。僕はただ頭を下げた。でも、春部さんは表情を変えずに、声色だけ優しく変えて続ける。「……まあ、実を言えば、この仕事を頼めるような人間がほとんど居なくなってるんだ」。春部さんによれば、僕と同年代かもう少し上の世代の卒業生のほとんどは、ある程度進路が決まってしまうているらしかった。ある者は絵の道に進み、ある者は筆を折って社会に参加する。そうやって一人また一人と進路が決まる内で、僕だけが宙ぶらりんな状態なのだという。じゃあ、学生にお願いすれば良かったんじゃないですか？ という僕の疑問に春部さんは頭を振った。「いや、この仕事は学生には荷が重すぎる」。

つまるところ、春部さんが僕に頼もうとしている仕事は、“本物のプロに依頼するほどではないが、かといって学生には任せられない”という“常に短しタスキに長し”の仕事のようだった。

と、自分でまとめた結論を春部さんに話すと、春部さんは両手でバツを作った。「その理解は正しくないな。この仕事は、セミプロから上の奴にしか任せられない。学生みたいな甘っちょろい奴には少々キツイ仕事だ。……プロになったやつに頼まないのは、単に俺の好みの問題だ」。好みの問題？ と鸚鵡返しにすると、春部さんはにやっと笑って、「プロは自分で仕事を探すもんだ」、と言った。そして一拍置いてから、春部さんは続けた。「とにかく、お前に頼みたい仕事がある」。

どういう仕事ですか、と聞くまでもなく、春部さんは数枚の紙を僕に寄こした。そこには相手の住所と名前、あとは何を描くのか、明確に描かれていた。名前の欄に踊る名前、何度読んでも脳にひっかからない。不思議な名前だな、と首をひねりつつ、こんな感覚、いつだったか味わったことがあったな、とデジャヴに襲われた。

その紙の上の、【どういった絵を御所望ですか】という欄には、異様に綺麗な字でこう書かれていた。

“ 娘の肖像画を1枚お願い致します ”

肖像画。昔は写真などないから、上流階級の間では肖像画を描かせるのが一種ステータスだったという。でも、写真などが当たり前存在する現在、肖像画の依頼なんてそうはあるまい。

その部分に目を奪われている僕に、春部さんは言った。「確か昔、何かの講義で話したと思うが、肖像画というのはものすごく難しい。肖像画というのは、似てればいいという性質のものでもないからな」。その言葉を、僕は笑った。「はは、春部さん、耳タコですよ。なんでしたっけ、“肖像画というのは家族の持っているその人へのイメージを写し取るもの”でしたっけ？」。その言葉に、春部さんは苦笑いを浮かべた。

肖像画というのは難しい。目を似せて、耳を似せて、輪郭を似せ

て。そういう風にキャンパス上に似せた輪郭線を描き込んでも、どうしたわけかモデルと絵が似ても似つかないことがある。それだけではなくて、傍から見れば割と似ているのに、家族が首をかしげてしまうようなこともある。有名な例だと、西郷隆盛の肖像の例がある。いわゆるモニタージュ的な作り方で描かれた肖像画なのだけけれど、西郷の奥さんだけは「これは夫じゃない」と言い張ったという。肖像画というのはただ似てるだけでは駄目で、そのモデルの“雰囲気”とか“周りのイメージ”といったあいまいなモノも写し取らなくてはならない。

春部さんは大仰に頷いた。「そこまで分かっているなら問題あるまい」と言いながら。そして、僕に一言聞いてきた。「で、受けてくれるのか?」。僕は頷いた。すると春部さんは大仰に胸をなで下ろした。どこか芝居がかっているけれど、それはそれで春部さんらしい動作だった。「よかった、受けてくれて。……実は、肖像画である以上に面倒くさい問題は多いんだがな、その点はクライアントと会ってみて、確認してくれ」。“面倒くさい問題”? 首を傾げてはみたけれど、それが何なのか、分かるはずもなかった。

一瞬、春部さんが僕を睨みつけた。

そのあまりの視線の厳しさに、僕は思わず声を失った。

第一夜「月はいつでもあなたの元に」【5】

夜の街に視線を一瞬泳がせてから、春部さんはため息をついた。そして、まるで踏ん切りをつけるかのように、言葉を継いだ。「確かに今回の仕事は面倒な仕事だが、今度は投げるなよ。投げた時は絵筆を折れ。そのくらいの覚悟でやれ」。

元々ぼちぼち絵筆を折ろうかとも考えていた僕にとって、その春部さんの言葉はあまり絶望感を誘わなかった。むしろ、僕が連想したのは袋小路とその奥に控える扉というイメージだった。開けば新しい世界に飛び出せる。でもその勇気がなくて結局袋小路の中でうじうじと悩む。そんな僕の姿。むしろ、これを機に扉が開いてくれの方が自分にとってはいいのかもしれない、となんとなく思った。

僕のそんな思考を読むはずもなく、春部さんは言った。「お前には昔から期待してるんだ。せいぜい頑張るんだな」。何に期待されているのかもよく分からなかった。春部さんに領けずになだ立っていると、「明日、クライアントのところに行ってくれ。時間は問わないそうだ。そこでクライアントといろいろ相談するんだな。絵を描くか描かないか、という点も含めてな」と、春部さんから補足が入った。

こうして、僕の絵筆は、キャンパスの上で踊り始めた。

次の日、バイトを終えてから、僕は指定された駅を降りた。

この日のバイトは楽だった。一人暮らしの引越越えだった関係もあって、荷物が少なくてサクサクと終わってしまった。しかも、社長の機嫌も上々だった。珍しく、「おう、なんかおごってやるよ」と、お昼まで御馳走になってしまった。なんというか、「ついてくる一日」だった。

だから、駅を降り立った瞬間、何か予感めいたものがあつた。いいことが起きそうだと。でも、実を言ってしまうえば、この瞬間僕

は絵を描くべきか描かざるべきか悩んでもいた。春部さんの口ぶりからして面倒そうな仕事だし、そもそも僕みたいな者がやっていいような仕事かどうか分りかねた。とりあえず、クライアントと直に会ってみてから決めてもいいな、ととりあえず考え直し、改札をくぐった。

指定された駅は、若者でごった返していた。待ち合わせスポットの犬の銅像前をすり抜け、日本一のスクランブル交差点を待ちながらビルに掛かっている大画面を眺める。パクリ疑惑が度々浮上している某シンガーソングライターが愛を歌っていた。けれど、そのシンガーソングライターは自分の歌っている言葉がどういう意味なのか分かっていない風だった。信号が青に変わる。堰を切ったように人の波がスクランブル交差点に入り、やがてその波が交錯した。その交錯の中を無表情にすり抜ける。その交差点を歩くとき、いつも知り合いの顔を見たような気がして振り返ってしまふけれど、振り返った先には自分と関わりあいのない人が自分とは反対方向に歩いて行く姿があるばかりだった。そのスクランブル交差点を抜け、さらに進む。以前大きな本屋があった通りを歩いてゆく。そして、小洒落た複合文化施設を横目に住宅街に入った。

このとき、僕はふと変な気分になった。

ここ、昨日来たよな、と。

そう、春部さんからもらった紙には、昨日のバイトで荷物を搬入した家のある地名がしっかり書かれていた。あの、“宗教おじさん”の家だ。でも、と考え直す。今僕が歩いている辺り——つまりは“宗教おじさん”の家の周囲——は、昔から高級住宅街なのだ。肖像画なんていう時代錯誤なものを依頼するほどの人なのだから、ある程度の名士かあるいは成金か。とりあえず金持ちの類だろうことは容易に想像がつく。そして、そういう金持ちは高級住宅街に住んでいるものだ。……と、無理矢理納得しようとした。

けれど、僕の手にある紙は僕のことを昨日見た場所へとどんどん導いていく。角を右に曲がり、あの角を左に曲がるとあの家のはず、

と僕が先回りした思考の通りに、その紙は僕に“右に曲がり左に曲がる”と指示を与えていた。

そして、紙に導かれるまま終着点に着いてみると、そこには昨日荷物を搬入した幽霊屋敷が佇んでいた。まるで、僕のことを待ちわびるかのよう。

やっぱり、ここだったか。

僕はため息をついた。なんだか、予感めいたものはあった。この高級住宅街に足を踏み入れた瞬間から、僕の頭にはこの家のイメージが浮かんでいた。昨日の今日だから、と心の隅で言い訳していたのだけれど、事実こうやって目の前に件の屋敷が現れてみるとやっぱり何かの思し召しを連想したくなる。

でも、何もしないのもあれなので、とりあえずドアの前に立った。そして、これまた時代錯誤なライオン型の取っ手をつかんで、何度か前に振ってみた。コンコンコン、とノックの音が響いた。そして、そのノックの音から一瞬遅れて、足早な足音が聞こえた。

ギギイ、と扉がきしみ、ドアが開いた。

出てきたのは、宗教おじさんだった。相変わらずどこかの企業の課長のような卑屈な笑顔を浮かべ、僕のことを窺っていた。しかし、僕の顔をまじまじと見た宗教おじさんは突然相好を崩した。「ああ！ 昨日の引越越し屋さんじゃないですか！」。おじさんの記憶力に、ちよつと戸惑った。普通、引越し屋さんの顔なんて誰も覚えていない。皆制服を着ているし、それに一日しか付き合いない人なんてそもそも顔を覚えようとも思わないだろう。

それに、僕はかなり人から覚えられにくい顔をしているようだ。可もなく不可もなく。どうやら僕の顔はそういう性質の顔らしかった。だから、あまり顔を覚えてもらえない。あの社長が僕の顔を完全に覚えたのは一ヶ月経ってからだという。

そんな僕の疑問を察したのか、宗教おじさんは笑顔を浮かべた。「いえいえ、以前やっていた商売柄、人の顔を忘れないほうが有利なんですよ」。“商売”？ 正業があつたのかこの人も、と心の中

で呟いた僕に対し、相好を崩さずに宗教おじさんは続ける。「はは、真世界研究会の話ですよ」。確か、「真世界研究会」というのは、この宗教おじさんが所属している無認可の宗教団体のはずだ。自分の属する宗教団体を“商売”と表現する宗教おじさんの笑顔に、ちよつと不可解を覚えた。それに、宗教おじさんは“真世界研究会”を“以前やっていた商売”と、過去形で語っている。それも不思議だった。でも、ここまではまるで心の中を見透かすかのように僕の知りたいことを語ってきたのに、肝心な段で宗教おじさんは何も語らなくなってしまった。

宗教おじさんは話題を変えてきた。「で、本日はいかがしましたか？ 何か、お忘れ物ですか？」。そうだった。僕は別に宗教おじさんの素行調査に来たわけではない。宗教おじさんの向けた水のおかげで本来の目的を思い出した僕は、春部さんと自分が知り合いであること、春部さんの紹介でここまで来たこと、そして肖像画の件は自分が承ること、その三点を手短に言った。

しばらく、宗教おじさんは僕の目を覗き込んだ。まるで、僕の眼の底に何かが潜んでいるかのように。

そして、しばらくしてから彼は頭を下げた。「よろしくお願い致します」。こちらもつられて頭を下げると、彼は続けた。「詳しいことは中で相談いたしましょう」。

屋敷にあがらせてもらった。昨日までのような引つ越しに特有のあわただしさはなりをひそめ、まるで砂が沈殿する水面の底のように静かな空気が漂っていた。口では「ご存じでしょうが、最近引つ越したばかりで汚れていますか……」と宗教おじさんは言っただけで、それは明らかに謙遜だった。

でも、廊下を歩いていたりとき、二階から変な音が響いてきた。何かの呪文を何人かが復唱しているのか、ノイズのように鼓膜を揺るがすような音。そして、そのノイズに合わせるように鳴る太鼓の音。階段のほうを眺めながら宗教おじさんは「すいません、今日は儀式の日なんですよ」、と、まるで“親戚の子を預かっているんです”

と言つかのような気楽そうな声音で言った。

通されたのは客間だった。昨日戸棚を搬入した部屋だった。でも、そこには僕たちが搬入した覚えのないソファが入っていた。新しく買ったにしてはちよつとくすんだ赤をしていたけれど、中古品というよりはアンティークと呼んだ方が正確そうだった。宗教おじさんは僕にイスを勧めてきたので、ありがたくそのソファに腰掛けた。

客間に僕を残して一旦どこかに消えた宗教おじさんは、ポットと茶器を持って戻ってきた。ティーポットにお湯を入れると、辺りに紅茶の香りが広がった。その香りが部屋いっぱい広がる前に、宗教おじさんはティーポットのふたをして、カップに注いだ。宗教おじさんはカップの受け皿に角砂糖とミルクを慣れた手つきで置いてから、僕の前に差し出した。「どうぞ」と、人を安心させる類の低音を響かせながら。

砂糖を入れずに淹れてもらった紅茶をお愛想程度にすすつてから、僕は切り出した。「で、本題をお伺いしたいのですが」と。どうやら、本題に入りたかったのは僕だけではなかったらしかった。宗教おじさんは僕の向けた水に乗った。

彼の言うところはこうだ。娘の肖像画を描いてほしい。

そう。彼の依頼はこれだけだった。何かご希望はないのですかと聞くと、彼は首を横に振った。「娘のイメージをキャンパスに叩きつけていただければそれで足るのです。絵描きであられるあなたの前でこんなことを言うのは何ですが、別に娘と似ていなくても一向に構いません。結局、油絵であることが大事なんですよ」、いま一つ理解できないことを言った。ふと、昨日見たあの可愛らしい女の子の顔を思い出した。

僕はさらに訊いた。で、モデルの娘さまはどちらに？ すると、彼は天井を仰いだ。「ああ、今、儀式に出ているところですよ。あと30分もすれば降りてきます」と、彼はのんびりした口調で答えた。ということは、あと30分、このおじさんと顔を突き合わせて

いなければならぬのか。このおじさん、人はいいいけれど何か大事な物がずれている。何がずれているのかは分からない。でも、確かに大事な何かがずれている。屋台骨はしっかりしているのに基礎がめちゃくちゃな家のような不安を感じさせる人だ。あんまり一緒にいたくない。

とりあえず、紅茶をすすりながら、宗教に勧誘されたらどうかわそうかと思案を繰り返していたころ、不意に客間のドアが開いた。思わずそちらを向くと、ドアの向こうに、昨日見た女の子が立っていた。

相変わらず、絶妙なバランスでかわいらしさを誇る顔だった。真っ白な木綿のワンピースのようなものをまとって、頭には白い鉢巻を巻いている。手首や足首に鈴のついたバンドをつけている。彼女が少し動いたたび、小ぶりの鈴がリンと鳴った。

その女の子は、口を開いた。

「ほらね」

透き通る声だった。まるで、闇世の中輝く満月のように、澄み渡っていた。

何が“ほらね”なのか、分からなかった。あるいはそれは宗教おじさんに向けられた言葉なのかもしれない。けれど、その女の子は僕に視線を向けた。

「あなたはやっぱり、月に会った」

第一夜「月はいつでもあなたの元に」【6】

その言葉を聞いた瞬間、数日前に河川敷で聞いた声をふと思い出した。でも、いつぞやに聞いた声が今僕の鼓膜を揺らしている声なのかはよく分からなかった。

ぼーっとしている僕を尻目に、宗教おじさんは立ち上がった。そして「どうしたのだ、月夜。古月の儀式はどうした」と女の子の行動を咎めているらしかった。けれど、その女の子は宗教おじさんの顔も見ずに言った。

「私にお客様でしょう、父上。ならば、私がこうして出てくるのは当たり前ではないのかしら」

そしてその女の子は、僕の方に笑顔を向けた。その笑顔には、一切の感情がこもっていなかった。いうなれば、仏像の笑顔だった。仏様は、顔の造形を崩すようには笑わない。眼尻にしわを刻んだりしない。口角をいやらしくない程度に上げるアルカイクスマイルを浮かべて衆生を見下ろしている。その笑みは慈愛と呼んでもいいのだろうけれど、僕にとってその笑顔は無関心を隠すための笑顔にしか見えなかった。

けれど、その笑顔はたまらなく綺麗だった。

彼女の顔に見とれている僕を見かねたのか、宗教おじさんは彼女のことを紹介しようと手を伸ばした。けれど、女の子はそれを手で制した。

「はじめまして」

その女の子は歌うかのような口調で言った。

「月夜と言います。よろしくお願いします」

ぺこりと頭を下げた。その瞬間、彼女の髪がファサツと宙を舞った。そして、リンリンと鈴が鳴った。そして、僕の鼓動もうるさく鳴った。

「それじゃあ、もう行きます。古月の儀があるもので」

彼女はそう言うと、ドアを閉めてしまった。

わずかの間だった。でも、そのわずかの間、彼女は場の空気を支配してしまっていた。僕も宗教おじさんも、ただ息を飲んでいるしかなかった。仮に言葉を出そうとしたとしても、きっと彼女の言葉を彩るような言葉しか紡ぎだせないのだろう。生まれて初めて、“カリスマ性”という座りの悪い言葉が、僕の目の前で形になったような気がした。それと同時に、僕の中で疑問がわく。果たして僕は彼女の要素の何パーセントをキャンパスに乗っけることができるのだろうか、と。

不意に、宗教おじさんが溜息をついた。そして「すみませんね」と何に対する謝罪なのか分からない謝罪の言葉を口にした。僕が戸惑っているのを察したのだろう、彼は続ける。「あの子が私の娘・月夜です。あの子を描いてほしいのです」。

とりあえず、描くべき相手は分かった。でも、分からないことがある。宗教おじさんが肖像画を所望する理由だ。固い言葉を使えば、「肖像画は現代的な意義を既に失っている」のだ。人の似姿を残したいのなら今は写真という技術がある。それにビデオだって有効な保存ツールだ。だというのに、目の前の男は肖像画を描いてほしいと言う。なんで？

そんな僕の疑問に答えるように、宗教おじさんは言った。「実は、娘はあと数カ月しか下界に居られないのです」。耳を疑った。疑ったのは耳だけではなくて、むしろ宗教おじさんの頭の構造だった。困惑気味の僕を尻目に、宗教おじさんは続ける。「うちの娘・月夜は月の住人なのです。そして、18の誕生日になると、月に帰ってしまうのです」。冗談かとも思っただけで宗教おじさんの顔を覗き込んでみたけれど、その顔には真面目の色しか見いだせなかった。つまり、大マジでこんな馬鹿げたことを言っている。宗教おじさんが何を信じているのかは知らないけれど、“娘が月に帰る”云々というのはきつと宗教おじさんが信じている宗教の“設定”のようなもののだろうな、と無理矢理に納得したふりをした。

おじさんは目に涙を貯め始めた。「18年も育てた娘なのに、むざむざ月に返したくはありません。でも、それが我ら親子に定められた運命なのだから仕方ありません。だから、今のうちに残しておきたいのです。娘の似姿を。そして、娘のいない空白の足しになれば……、と思いまして、こうしてお頼みしたという次第です」と、まるで芝居の長台詞のように言った。

彼の双眸から、涙がこぼれおちた。それは、満月のようにきれいだった。

まさか、男の涙にほだされることになるとは思わなかったけれど、とりあえず、絵を描く話を承諾した。面倒なことになりそうだな、という予感を胸に秘めつつも。

ふふん、と春部さんは笑った。ピアスがしてある耳たぶをいじくりながら。「なかなか面倒そうな話だな。俺が思っていた以上の面倒さだ」と、つまらなそうに春部さんは視線を天井に泳がせた。そんな春部さんに、そんな他人事な、と噛みついてみたけれど、春部さんにさらに笑われた。「だって、他人事なのだから仕方あるまい」

昼休みの時間帯の学校は、昔から静かだ。この専門学校には“食”なる、高校生なら一度は夢見る設備を備えていなかった。そのせいで学生のほとんどは外に食べに出てしまう。中にはお弁当を持ってきたりコンビニのおにぎりを持ってきて校内で食べるという学生もいるのだけれど、ここらは都内有数のオフィス街で、近くに安く食べることのできる定食屋さんが多いこともあってそういう手合いは少ない。結果、昼の学校は水を打ったように静かになってしまふ。だから、普段はあまり大声とは思えない春部さんの声も、やけに通りがいい。

春部さんの態度が気になった僕は、相談を受ける気ありますか？と聞いてみた。すると、春部さんはいつものように二ヒルに口角を上げ、「受ける気なんて、あるわけないだろう」と言い放った。

あの幽霊屋敷のような家を辞したあと、この肖像画の件を受ける

旨を春部さんに報告しに行った。やっぱりいつものように春部さんは研究室と名が付いている自分の私室に籠っていた。そして、報告がてら、これからどうしたらいいのか相談をしにきたのだ。

でも、春部さんはこんな調子で真面目に取り合ってくれない。そんな春部さんに歯噛みしていると、春部さんは突然鋭い視線を僕に向けて、「というか、俺にはもう言うことはない。だってそうだろう？ お前はクライアントと面会して、絵を描くと約束したんだろう？ それは既にクライアントとお前のビジネスなんだから、俺がとやかく言う筋合いの話じゃない」と、ため息交じりに言った。でも、と僕は言った。「でも、この件はいくらなんでもハードルが高すぎですよ。変な宗教団体に入ってる父親に、変な儀式をしてる娘さんですよ？ で、“娘が月に帰っちゃうから、今のうちに似姿を残しておきたい”なんて尋常じゃないですよ」と。

すると、春部さんは立ち上がった。窓の方に歩を進め窓の前に立つと、僕の横に立つように言った。春部さんの言葉に従った。僕の目の前には、夏のガラガラした太陽に照らされた東京が広がっていた。

突然、春部さんは言った。「夏っていうのは、暑いな」。

僕は答えた。「そりゃそうです」。

まるでそこに答えが書いてあるかのように、春部さんは陽光で白む都会の輪郭を目で追いながら続ける。「そして、この暑い都会の下に、無数の人間がいるわけだ。そして、その無数の中には、お前の理解できないものたちがいる。そして、お前のことを理解してくれない人間もいる。お前の言う、“尋常”ならざる人間なんて、きつと佃煮にするほどいるんだろう」。そう呟く春部さんの顔には、何の色とも表現しづらい影が差していた。こんな複雑な表情を見せる春部さんは初めて見た。「だが、絵を描くっていう作業はな、お前の知りうる世界だけに閉じこもってはならないものなんだ。絵というのは、お前が“尋常ならざる”と感じたものさえ、描き入れなくてはならないんだ。それが絵の面白さであり、つまらなさなんだ

よ」

はあ、と適当に相槌を打つしかなかった。どうやら春部さんは僕に理解を望んでいないようだった。春部さんという先生は、講義の際に加える説明が分かりやすいので有名な人だった。学生に合わせ、難しい話を簡単に再構成し直すくらいの頭は持っていたし、それだけのサービス精神のある人だった。でも、今日に限ってはそういうサービス精神はなりを潜めていた。

しばらくの沈黙ののち、「ま、なんだな」と春部さんは言った。

この口癖は、小難しい話をしたあとに春部さんが付け加える、言い訳のような語句だ。「つまりは、相手が新興宗教にハマってようが、娘さんが月に帰るんだろうが、そんなことは絵描きには関係ないんだ。絵のモデルの前歴が詐欺師だろうが国会議員だろうが、あるいはその両方を兼ね備えているような太い奴だろうが、その絵が素晴らしい絵ならば絵描きとして関係がない。……たとえば、お前がシユーキョーに勧誘されて拉致られた、っていうなら話は別だがな。でも、こうやって姿を表しているってことは、そんなことはないんだろう?」。

僕は頷くしかなかった。

ともかく、今のところ別に危ないことはないだろう。これから絵描きを続けるなら、シユーキョー相手の商売も色々手がけることになるだろうから、いい経験だ、と春部さんは話を締めた。いま一つ納得できないものもあつたけれど、とりあえず頷くしかなかった。

けれど、思い出したように、春部さんは言った。「ところで、あのクライアントのおっさんなんだが」。ああ、あの宗教おじさんかと当たりをつけてから話を先に促すと、春部さんはこんなことを言った。「あれには注意しとけ。俺も一度会ったが、あれはかなり危険な人種だな」。社長に続いて春部さんまでも、宗教おじさんのことを「危険」と評した。でも、僕には宗教おじさんの何が危険なのか、未だによく分かっていなかった。ちょっと粘着質で変な人だとは思っていなかったから、僕より年嵩の二人が宗教おじさんの何

に対して危険な香りを覚えたのか気になった。

と、ここで予鈴が鳴り響いた。「おっと、もうこんな時間か」と呟いたかと思うと、春部さんは机の上に置かれていたプリント類を手早くまとめ始めた。「午後一番で講義なんだよ。こんな時間帯、教わる側も教える側も眠いだろっに」。僕は言った。「そういえば、午後一番の講義ではよく眠った気がします」。その言葉に対して春部さんは、「はは、そっぴやお前、一番前の席で爆睡してたよなあ」と皮肉たっぷりに言った。

そうして手早く荷物をまとめた春部さんは、さっさと部屋から出て行ってしまった。

どうやら、もうここに用はないらしい。

そう思い至った僕は先生の部屋から辞した。そして、階段を降り、玄関の受付さんに軽く会釈して外に出た。外には、ヒートアイランドの熱気にやられている都会と、同じく熱気にやられている通行人たちと、そしてさっきまで涼しい部屋にいた僕が等価値に存在していた。

第一夜「月はいつでもあなたの元に」【7】

午後、バイト先に顔を出してみた。

僕のバイト先である“引越屋・白くま屋”は従業員が少ない。社長を入れても、わずから5人の正規社員で回している企業だ。だから、慢性的に人手不足なのだ。だから、非番の日であっても暇だったらこうして顔だけは出してみる。そして手が足りないようであれば手伝う。そんな風な不文律が出来上がっている。

東京の端っこに埋もれるようにして立っている白くま屋の、プレハブ社屋の戸を開いた。戸を開ける前に駐車場を見たのだけれど、軽の社用車一台以外はみんな出払っていた。でも、社用車が一台あるということは、少なくとも誰かはいるとい証拠だ。

戸を開くと、部屋の中にはパソコンを叩く小林さんの姿があつた。小林さんは僕の姿を認めるなりキーボードを打つ手を止めて僕に笑顔を振り向けた。「やあ、今日非番だね、わざわざ御用窺いに来てくれたんだね、ありがとう」と、いつも通りの優しい言葉をかけてくる。

僕もつられて手をひょいと上げた。「小林さん、今日は忙しいっすか？」

小林さんは首を横に振った。「いや、今日は恐ろしく暇だよ。須々木君と猪上君で一現場、田中君で一現場。その二件しかないから……で、社長はこれ、ね」と、小林さんは苦笑いを浮かべながら、パチンコを打つしぐさを見せた。

小林さんは、“白くま屋”の正社員だ。

確か、今年45歳になるという。つまり、40歳位の社長よりも年上だ。だから、社外的な交渉事には社長の代わりに出向いたりもする。この会社には役職はほとんどない（“社長”という肩書だけだ）けれど、もし肩書をつけるならば小林さんは副社長兼常務兼総務部長兼営業部長とでもなるだろう。実際、会社で一番の古株だし、

会社で唯一簿記が出来るのもこの人だし、勤怠管理もきっちりこなしている。よく会社で残業もしている。たぶん、この会社で一番働いているのはこの人だろう。

でも、小林さんという人は不思議な人だった。そういう風になんでも出来てしまう人というのは変な自負が生まれて面倒な人間になるか、あるいは周りから敬遠されてしまうかどちらかだろう。でも、小林さんと言う人に限ってそういうことは一切なかった。えらぶるところもなかったし、かといって卑屈さも感じさせなかった。従業員たちは皆「小林さん、小林さん」と子犬のようにじやれる。社長さえも、「小林ちゃん、頼むよ」とあからさまに頼りにしている模様だった。小林さんはそんな従業員たちに人の良さそうな笑顔を振り分ける。とにかく、小林さんは皆から好かれている。

そつえば、と小林さんは言った。「社長から、まだ聞いてないかい？」

え、何をですか、と言うと、小林さんは困惑顔を浮かべた。「あれ、まだ社長、言っていないのかな？　じゃあいいや」。気になる。なにを言おうとしたんだろうか、と思ったけれど、小林さんは一度「喋らない」と決めたことは絶対に喋らない。それを知っている僕はあえて言葉の真意を聞かなかった。

小林さんは僕の姿を見た。立っているのを咎めたのだろう、椅子を勧めてきてくれた。差し出された丸い回転イスにどっかりと座った。

ちよつと考えるようなポーズを取ってから、不意に小林さんは僕に聞いてきた。「最近、絵の調子はどうだい？　描いてるのかな？」。その言葉に僕は手短に答えた。「ええ、学生時代の先生から、仕事のあつせんがありまして、おかげさまで一件絵の仕事をもらいました」。その僕の言葉に嬉しそうな顔を浮かべて手を叩いた後、「うんうん、いいことだ」と微笑んだ。

小林さんに、僕の絵を見せたことがある。僕の絵は少々変なものらしくて、絵画関係以外の友達に見せると「何これ？」とか、「意

味あるの、これ？」と言われてしまうような代物だから、絵を見せる相手は選ぶようにしている。小林さんに絵を見せたのは特段の理由があつたわけではなかつた。ただ、「絵を描くんだってね」という小林さんの一言を受けて絵を見せたことがあつたのだ。でも、小林さんは絵を一目見るなり言つた。「いいなあ」と。でも、その「いいなあ」は果たして、絵に対する「いいなあ」なのか、それとも他の何かに対する「いいなあ」なのかは分からなかつたし、聞くこともできなかつた。

さて、今日はあまり仕事が無さそうだ。かといって長居すると逆に小林さんの仕事の迷惑になる。そう思つた僕は椅子から立ち上がった。「何かお手伝いできること、ありますか？」と小林さんに聞くと、「いや、簿記関係の仕事だから、お気持ちだけ頂いておくよ」と小林さんは申し訳なさそうに言つた。

ふと視線を小林さんの机の上に向けると、いかにも小林さんが選びそうな、無骨な写真立が置いてあつた。その中には小林さんと奥さん、あとお子さんが並んで映っている写真だつた。どこかの遊園地なのだろうか、メリーゴーランドが背景に写つていた。その視線に気づいたのか、小林さんは写真立の方に視線をやつた。「ああ、45歳がこんなものを飾つてるのは少々恥ずかしいね。でもね、簿記とか勤怠管理とか、ともかく数字相手の仕事をしているとね、時折変な気分になるんだ。“自分は働いてるのかな”ってね。だから、時折家族の写真を眺めて、“ああ、俺はこいつらを養わなくちゃならないんだ”って思いながら仕事をしないと、時折空しくなるんだ」。

その言葉にどう答えたものか分からなかつた僕は、適当に相槌を打って白くま屋を後にした。

次の日、僕は絵の仕事に向かつた。宗教おじさんとの約束で、“絵は必ずこの家で描くように”とのことだったので、こうして足を運んでいる。

もはや三度目になる、扉のライオンとの再会。ライオンは「よお」とばかりに僕に会釈を垂れているのだけれど、どうしてもライオンに会釈を返す気にはならなかった。

わずか一日前に訪ねたはずの宗教おじさんの家だったのだけれど、外から見ても明らかに様変わりしていた。

二階のテラスから、妙な垂れ幕がいくつも下がっている。“反地球からやってくる似非月人及び我らの法を捻じ曲げんとする悪魔・真世界研究所を駆逐せよ”とか、“月を貶めた極悪人・ガリレオ・ガリレイは、月人たちの手によって地獄の業火に送り込まれるであろう”とか、“次なる月の時代に克目せよ”とか、“NASAは月に行っていない。あるいは月人に関する情報をすべて伏せている！一刻も早い情報開示を！”などといった、意味が分かりそうですっぱり分らない語句が踊っていた。でも、とりあえずこの宗教団体は月がお好きなんですね、という一点だけは呑み込めた。とりあえず、この屋敷内で月の悪口を言うのはやめよう、と心に決めた。……でもまあ、月の悪口なんてそもそも思いつかないけれど。

そんな、色々な意味で現実から乖離し始めた屋敷のドアをノックした。

すると、しばらくしてドアが開いた。

ドアを開いたのは、おばさんだった。白髪の髪の毛を紫色に染めている。ドアの取っ手を持つ手はしわがれていた。けれど、そんなことはどうでも良かった。むしろ、そのおばさんの格好に面喰ってしまった。白い木綿のワンピースのようなものをまとい、そして頭には鉢巻をして黄色くて丸い厚紙を固定していた。よく見ると、彼女が着ているのはワンピースではなかった。どうやら、一枚の布の真中に頭を通す穴を開いて、その穴に頭を通し、腰のあたりを帯で締めるような形式の服らしかった。確か、高校の頃、日本史の先生が邪馬台国だか大和政権だかの話のときに説明してくれたような簡素な服だ。

おでこの前に大きな黄色い丸を固定した、邪馬台国ばりの時代錯

誤な服を着たおばさん。もはや下手なホラーよりも恐ろしかった。なんというか、“現実的でない”とただそれだけのことがここまで理屈なしに怖いものなのか、と初めて思い至った。

そのおばさんは僕の姿を上から下まで、まさに舐めるように見回した。警戒しているのが見え見えだった。やがて、そのおばさんは「ひよつとして、入信希望？ それとも、真世界研究所からの回し者？」と怪訝な顔で僕に聞いてきた。

まず面喰ったけれど、どちらでもないです、肖像画の依頼を賜りました者です、と簡単に自己紹介すると、そのおばさんはさっきまでの警戒心はどこへやら、あからさまに好意的な視線を僕に寄せた。そのおばさんは「あ、これは失礼したね。……“御子”様の肖像画を描いてくださる、カルマの深いお方ですな。どうぞ、お願い致します」と、ドアを開け放った。とりあえず、歓迎はされているようだ。でも、“御子”様とか“カルマ”とか、そういう内向きの言葉を織り交ぜて会話してほしくない。いちいち意味が分からない。やっぱり、今日も客間に通された。でも、昨日から客間も随分様変わりしていた。

昨日までは高級住宅街の客間を絵に描いたような、優雅ささえ醸していた部屋だったのに、一日にしてその雰囲気丸つぶれになっていた。昨日までは赤いカーペットが敷き詰められていたのに、今日来たときにはそれがはがされていて、裸のフローリングに赤いペシキで「月」という文字がびっしりと書いてあった。それは床だけではない。天井も「月」の嵐。壁には月の文字はなかったけれど、その代わりなのか、三日月のマークをした厚紙が等間隔に張られていた。そして、天井からはバレーボール大の黄色い球体が吊り下げられていた。月のつもりなのだろうけど、僕の目には新発売の猫用遊具にしか見えなかった。

でも、とにかく怖かった。

世の中、意味が分からないということがこんなに恐ろしいことなのか、と、とにかく戦慄した。それとともに、世の中は意味の連続

で成り立っていることも再確認した。どんな存在も、普通なにがしかの意味を持って存在している。なのに、この部屋にあるものに意味は一切ない。少なくとも、僕にとっては意味が分からない。

理解不能とは恐怖。それを肌で味わいつくした頃、ようやく客間のドアが開いた。

入ってきたのは、宗教おじさんだった。僕を最初に出迎えた老婆のような格好ではなく、普通のスーツ姿だったのが救いだった。彼は入ってくるなり言った。「ああ！　なんてことを！　すいません、手違いで！！」。そう言うなり、僕を手招きした。もちろん、こんな気味の悪い部屋に居られるはずがない。僕は速やかに立ち上がって廊下に出た。

宗教おじさんはメガネをくいつと上げて頭を下げた。「すみません！」。事情が呑み込めずただ立ちつくす僕に、宗教おじさんはあの部屋について説明をしてくれた。

彼が言うには、あの部屋は敵の類を撃滅する部屋なのだという。曰く、宗教というのは案外敵が多い。宗教を食い物にするビジネスや敵対する宗教団体、マスコミなど、“悪しき者”が宗教を既に狙っている。そこで登場するのがかの部屋。かの部屋に来訪者を入れておく。そして、5分ほど置いてみる。すると、“悪しき者”ならば卒倒してしまうのだという。「まあ、十日くらい鍵をかけて置いておけば、あの部屋に張り巡らされたルナティック光線によって悪を撃滅できます」とのことだった。もうこの時点では、“ルナティック光線”なるヒーローの必殺技のような固有名詞が何なのかなんて些細な問題、既に聞く気が失せていた。

でも、あんな部屋、悪しき者でなくても5分もいたら卒倒してしまっただろうに。

第一夜「月はいつでもあなたの元に」【8】

宗教おじさんはとにかく平身低頭謝り続けた。「すいません、すいません、本当にすいません！……でも、善人ならばいくらあの部屋に閉じ込められようとモルナティック光線の加護がありますから死なないのですけどね」と、後半の方には自己弁護めいたことを言いだしたのはいつそご愛敬だったけれども。

続いて通されたのはリビングに当たる部屋だった。

ありがたかったことに、さっきまでの部屋のように宗教じみたものが一切なかった。

前に僕らが苦勞して運んだ食器棚に、これまた僕が必死に運んだ食器類が収まっていた。リビングの真中に8人くらいが座れそうな食卓がボンと置かれていた。その食卓の先には大きな窓があつて、庭が一望できる……はずなのだろうけど、二階から垂れさがっている垂れ幕のせいで何も見えなかった。

窓の方を向いている僕に、不意に声がかかった。振り返ると宗教おじさんが後ろに立っていた。「いい庭でしょう？　昨日信徒たちと丁寧に庭をいじり直しました」。まるで当たり前のことのように宗教おじさんは“信徒”と口にした。その言葉に、垂れ幕で見えないんですけど……と言うと、宗教おじさんは「おやおやいけませんね、それは」と言った。もしかして、垂れ幕を外すのだろうか、と少し期待したのだけれど、宗教おじさんは変なことを言つてのけた。「それはいけません。先生、あなた、チャクラが開いていませんね？」。ちゃ、ちゃくら？　目を白黒させる僕ににじり寄りながら宗教おじさんは続ける。「“第三の目”のことですよ。すなわち、心眼のことです。先生のような芸術家の方とあるう者がチャクラを開眼しておられないとは、これは一大事！　今すぐにもチャクラを開かねば！」

一歩一歩にじり寄ってくる宗教おじさん、目がマジだった。

もちろん、身の危険を感じた僕は一步步後ずさりする。けれど、やがて壁に背中がついてしまった。宗教おじさんは「怖がらなくていいんですよ」と真顔で言ってくる。怖い、怖すぎる。

でも、そんな絶体絶命の場面に、一陣の声が響いた。

「父上！ おやめになつて！」

透き通るような声が、部屋中に響き渡った。僕も宗教おじさんも声の方に振り返る。二人の視線の先には、あの女の子・月夜が立っていた。

このときも、彼女は邪馬台国っぽい服を着ていた。そして、手足につけた鈴を鳴らして、僕らに近づいてくる。短くて黒い髪が、その一步一步の律動に合わせて揺れる。

月夜は言った。

「父上。“チャクラは信徒にしか開かない”という月人とのお約束をお忘れなの？」

その言葉に、宗教おじさんは苦笑いを浮かべて反論する。「しかし、月夜。お前の姿を写し取るという重大な任務を彼は背負っておるのだよ？　そもそも月夜の姿を見てもいいのは信徒だけのはず。ならば、彼に信徒並みの待遇を与えるべきなのではないか？」傍から聞いていて、さっぱり理屈のありかが分からなかった。そもそも、分からない言葉も多いのだ。

けれど、彼女は反論を反論で返した。

「そもそも、“御子の姿を見ていいのは信徒だけ”というのは、教団での取り決めに過ぎません。そこに月人の御心は一切介入していません。それに、“御子の姿を写し取る作業が重大な任務”と父上は捉えておられるようですが、それも違います。月人たちは常にこう言います。“肉体は魂の入れ物にすぎない”と。魂の入れ物である御子の似姿を写すだけの作業が重要なこととは思えません」

その彼女の言葉に、宗教おじさんは口をつぐんだ。どうやら、この論戦は月夜のほうに軍配があがったらしかった。でも、見ている僕には何が何だか分からなかった。何度も言うが、分からない単語

が多いのだ。でも、とにかく宗教おじさんは僕の“チャクラ”を開く作業を諦めてくれたようだった。

月夜は満足げに微笑んで、食卓の前に置かれた椅子に座った。

「父上。この方とお話したいのですが」

構わんよ、と答えた宗教おじさんの顔を月夜が冷たく見据えた。

「分かりませんか？ 二人差向いで話したいのですが」

明確に人払いを宣言する月夜。でも、その言葉に宗教おじさんは困惑を隠せない模様だった。御子に何かことがあつては大変だ。頼むからここに居させてくれ、と哀願する宗教おじさんに、月夜は短く言った。

「御子の意思に逆らうと？」

その言葉にはとんでもない決定力があるようだった。しばらく苦虫を噛み潰すような表情を浮かべていた宗教おじさんだったけれど、やがて自分に理がないことを察したのか、リビングからすぐすこと出て行ってしまった。

部屋に残された僕は、月夜の姿を見ながらただ硬直するしかなかった。宗教団体で“御子”とか呼ばれている人なのだ。普通に考えればガチガチの宗教家だろう。いきなり肩を掴まれて、「あなたの前世は桶狭間の戦いの現場に居合わせたモグラです」とか言うに違いない。そんな緊張もあつて、ただ立ちつくすばかりだった。

けれど、彼女は僕の想像とはるかにかけ離れた言動を見せた。

「ごめんなさい」

そう、いきなり彼女は頭を下げた。彼女は僕の返答を待たずに続ける。

「あなたを巻き込んでしまった」

巻き込む？ その言葉には僕に対する気遣いのようなものが感じて取れた。彼女は続けた。

「あたしの絵を描いてくれるんでしょ？ でも、厄介よね。まさか、宗教団体の“ご神体”を描かなくちゃならないなんて」

彼女の声音が少しずつ変化していった。さっきまでの格調高い口

調から、少しずつ年頃の女の子の口調へと変化している。その口調こそが、彼女の本来の喋り口なのだろう。年齢が読み取れない顔だったけれど、その喋り方のおかげでようやく彼女は僕の前で年齢相応の雰囲気醸すようになった。

彼女の声にしばし聞き惚れたあと、ご神体？　僕が描くように言われたのは君の姿なんだけど、と彼女の言葉に答えると彼女は笑った。

「あたしの姿を写すってことは、ご神体を描くも同然のことなの」
彼女の言うところによれば、彼女はこの宗教団体の“神”かそれに類するものなのだという。

詳しい話はあまり教えてくれなかったけれど（彼女は「そのうち肌で感じるようになるから説明なんてしなくて大丈夫」と言った）、どうやら彼女は預言者としてこの世界に現れた神の子、という厄介な肩書がついているとのことだった。神の似姿を写すということは、すなわちそれはご神体を作るのと同じ意味は一緒だろう、というのが彼女の謂いだった。

彼女は言った。

「つまるところ、あたしはこの狭い世界の中では神も同然なわけ。
で、あたしの似姿を写すってことは、神様の姿を写すのと同じなのよ」

と、ざつくばらんに神様を語る女の子に、僕は少し安心めいた気分を持った。なんというか、宗教おじさんとか信徒さんたちに覚えた違和感を、彼女には一切覚えなかった。違和感がない空間に、どうしてこうも違和感ないものが存在できるのか、それが不思議で仕方なかったけれど。

僕は訊いた。「ねえ、どうして君は神様なの？」

彼女は答えた。

「さあ？　なぜ神様か、と聞かれると困るけど。でも、“なぜ神様と崇められているか”を説明することは出来るわよ」

彼女はふいに手を食卓の上にある花瓶に手のひらを向けた。花瓶

の中には、一輪ひまわりが咲いていた。昨日今日にでも摘んできたのか、まだまだ太陽に向かって微笑むだけの活力を有していそうな瑞々しさだった。

少し彼女は嘆息した。そして、まるで憐れむような視線を僕とひまわりに向けた。その一瞬後、彼女は大きく息を吸って、言葉と一緒に吐きだした。

「流る！」

何かの呪文のようだった。その低く唸るような音が部屋中に響き渡ったかと思うと、花瓶の中のひまわりにあきらかな変化があった。どんどん、ひまわりがしわがれていく。茎はどんどん渴き切つてゆく。大きな葉は次第に闇色に染まってゆく。大きな頭がどんどん下を向いてゆく。崩壊に向かってゆくひまわり。そして最後には、さつきまでひまわりだった物体が食卓に滑り落ちた。食卓に落ちた瞬間、カサ、と乾いた紙のような音がした。

まるで、テレビ番組の早回し映像のような目の前の光景に声を失う僕。彼女はこともなげに言った。

「はい、これこそが、あたしが神と崇められる理由。あたしは“奇跡”を起こすことができるの。今、ひまわり近くの時間の流れを極端に早くしたの」

僕は何も言えなかった。

彼女は言った。

「だからどうした、って感じでしょ？ でも、これ、かなり有効な客寄せパンダらしいわよ。“奇跡”っていうのは、古今東西、神様の代弁者にしか与えられない権限らしいから。でも」

少し、彼女はうつむいた。

「バツカじゃない、って思う。だって、ひまわりの命をむげに奪うだけの力しかないのに、みんなはそれに救いを求めるのよ。ひまわりを栽培している農家の人のほうが、あたしなんかよりはるかに人に救いを与えるはずなのにね」

このときの彼女の真意は分からなかったけれど、分かったことが

ある。彼女はこの家の中では“神様”として崇拜されていること。そして彼女には超能力めいた力があるということ。そして僕はそんな彼女のことを、全身全霊を込めて描かねばならないということ。絵を描くこと自体はあまり大変ではなさそうだった。でも、むしろ絵の周りを取りまく環境が、やたらに入り組んでいる。

まるで僕の心を見透かしたように、彼女は僕に悪戯っぽく言った。「今からなら、お頼みしているお仕事、なかったことに出来るけど？ あたしから父上に話せば、きっと父上も他の人を探すと思うけど」

思わず頷きそうになったけれど、必死で抑えた。きっと、それは春部さんに焚きつけられた絵描きとしての矜持のようなものがうずいたからなのだろう。そして、それ以上に彼女に惹かれるものを感じていた。それがどういう感情に類するものなのか分からなかった僕は、その正体にも迫ってみたくなったのだ。

第一夜「月はいつでもあなたの元に」【9】

そんな僕を笑うかのように、彼女は言った。

「絵の件、お願いします」

頭をちょこんと下げた彼女は、まるでお人形のようなだった。

この日、いきなり社長から連絡があった。

非番のところ悪いんだが早く来てくれ、と社長にしては珍しく焦っているような口ぶりだったから嫌とも言えず、結局“白くま屋”に顔を出してみた。

戸を開くと、社員達が一斉に僕の方に視線をよこした。でも、期待はずれだったのか、視線をぶいっと外して皆下を向いている。

普段、“白くま屋”は和気あいあいとしている。それは当然で、こここの従業員は皆社長が連れてきているのだから、気があう人たちののだ。だから、こうして集まっているときには軽口が飛び交うような環境なのだけれど、この時ばかりはそんな軽口は一切聞こえなかった。まるで灰色の象が肩に皆の肩に乗っかっているかのような重々しさだ。目を合わすことさえ憚られるのか、皆下を向いている。やってきた僕に、ようやく社長が声をかけてくれた。でも、「……おう、休みだったつうのに、悪いな」と、普段の社長からは想像もつかないくらいにしょぼくれた声を出している。この雰囲気にならぬものを感じた僕はどうしたんですか、と聞いた。すると、社長が話してくれた。

小林さんが来社してこない。

ただ、それだけのことだった。そういえば、従業員たちの中に、小林さんの姿がなかった。きっと、こういう風に職場が沈んだ空気の時に周りを和ませてくれる小林さんの姿がなかった。気付いてみると、大きな穴がぼっかりと空いているような不安を覚えた。

社長はさらに冒頓と続けた。

今日、定時になって来社してこなかった。“めずらしいな、小林、寝坊か？”と従業員連中と冗談を言いながらも電話してみたけれど繋がらない。小林は決して無断欠勤するような奴じゃないから、事故に遭ったんじゃないかと心配なんだよ……。とのことだった。

でも、こう言うては何だけれど、たかが無断欠勤じゃないか。小林さんだって人の子なのだから、無断欠勤してしまうこともあるだろう、と思ったけれど、従業員たちの真剣な顔を見て、言うのを憚られた。僕はせいぜい数年しか“白くま屋”にいないから分からないけれど、きつと小林さんと従業員たちの間に培われていたものは深く根を張っているのだ。きつと、その根が従業員の中で叫んでいるのだ。「小林さんは無断欠勤をするような人じゃない。何かあったんだ」と警鐘を鳴らし続けているのだ。

でも、その気持ちを共有できない僕は、ただ従業員たちの悲しそうな、悲痛そうな顔を見比べるばかりで、何も言えなかった。

なんだかここにいるのも場違いな感じがして、「何かやることがあれば手伝いますよ」と言った。いつも通り、従業員が「いや、ない」と答えた。それを合図に、僕は“白くま屋”を後にした。

そういえば、小林さんの机の上から、昨日まではあった写真立てが消えていたことをふと思い出した。でも、だからといってなんだというのか、僕には分からなかった。

キャンパスを前に、僕は唸った。鉛筆の先でモデルの構図やバランスを見て、ため息をついた。もしかすると、この仕事は自分の手に負える仕事ではなかったのかもしれない、と頭の隅で思った。

けれど、そんな僕をモデルの月夜は笑った。
「そう自分を卑下するものでもないわ。あなた、絵が好きなんですよ？」

まるで、僕の心を読んでいるかのようだ。
彼女は言った。

「そうよ？ あたし、人の心が読めるの。ある程度だけど。正確に

は、“垂れ流している”心は読める」

どういうこと？ と訊くと、彼女は答えた。

「人間の“心の言葉”っていうのは、二つに分けることができるの。一つ目はまるでお喋りのように“垂れ流される”感情。たとえば“お腹が減った”ってふと思ったり、“ピクニックに行きたいな”とふと思ったり。二つ目は、心の中心にあるような感情。あなたが隠したいと心から願っているようなこととか、あるいはあなたの信条みたいなものは一切読めないの。でも、あなたが“お腹減った”と思えば、感じるができる」

めんどろだね、と言うと、彼女は首を横に振った。

「そうでもないわ。だって、あたしの読心能力では人の本音は覗けないもの。たとえば、あなたがあたしを暗殺するつもりでここに来ているのだとしても、あたしはそれを感知できないはずよ。だって、“暗殺”なんてこと、その人の心にきわめて近いところに置かれる感情で以てなされることだろうし」

暗殺。彼女の言葉からそんな物騒な言葉が出るなんて。怪訝に思った。

その僕の心の中での問いに、彼女は答えた。

「ええ、きつとあたしのことを暗殺したい人、たくさんいるはずよ」それは彼女流の冗談なのだろうか、と心の中で呟くと、彼女は首を横に振った。

「いいえ、これは本当よ。きつとあたしを暗殺したい人はたくさんいる。宗教っていうのは、ある意味で縄張り争いなの。宗教にハマる人間っていうのは日本では一定数しかいなくて、その小さな底辺を、小ささまざま清濁さまさまの宗教団体が囲い込んでるわけ。そんな環境だと、競合する宗教団体を潰したり併合したりしたいと願う不届き者もいるわけなのよ。で、ほとんどの宗教団体は一人の力リスマを中心に成立しているような零細団体だから、頭を取れば簡単に奪えるって構造なわけ」

どうやら、僕の知らない間に、日本のアンダーグラウンドには深

い闇が広がっていたらしい。

「なんだか、ハゲタカファンドみたいな話だね、と言うと、彼女はふふふ、と笑った。

「まあ、神様がいるかいはいかはともかくとして、宗教団体を作るのはあくまで人だから、どうしても俗っぽくなっちゃうのよ、きつと」

その彼女の発言からは、あまり宗教に帰依している風は感じなかった。端的に言えば、宗教にハマっていない。自分は宗教に担ぎ上げられた存在のはずなのに、その“宗教”という枠を馬鹿にしているようにさえ見えた。つくづく、不思議な子だ。

月夜は続けた。

「あのね、ここに入出入りしている以上、あなたにも注意して置いてほしいの。“真世界研究会”っていう宗教団体にはね」

真世界研究会。確か、月夜の父親の“宗教おじさん”の名刺に書いてあった団体名だ。そういえば、信徒のおばさんに“真世界研究会の回し者か”と誰何されたこともあったな、と頭の隅でふと思いついていた。

彼女は続けた。

「あの“真世界研究会”っていうのは、あたしたちの団体の母体になった団体なの」

彼女の言うところによれば、数年前、宗教おじさんと彼女は二人で“真世界研究会”に入信したのだという。それまで、日本最大の巨大宗教団体とかUFOを信奉する団体、怪しげなカルト宗教などを渡り歩いていたという。彼女曰く、「どの宗教団体にも二年くらいしかないの。父、あれで飽きつばいのよ」とのこと。中には宗教を掛け持ちしていた時期もあったらしい。でも、結局数年前、真世界研究会に入信した。

ところが、二年ほど前、宗教おじさんが彼女に突然言ったのだという。“隠していたのだが、お前は実のところ神の子なのだ”と。その時の心情について、彼女はこう言う。“別に、何の感慨も湧き

ませんでした”。子供のころから超能力を発現していて、一方では妙な尊崇を受け、もう一方では気味悪がられていたという彼女にとって、自分が何者かなんてあまり興味がなかったのだろう。神の子だろうがなんだろうが、それは人間ならざるものでしかなかったのだ。

結局、宗教おじさんは真世界研究会を抜けた。もちろん、月夜も一緒だった。月夜のことを尊崇する、他の真世界研究会の信徒を引き連れて。そして宗教おじさんや熱狂的な信徒たちの手によって、月夜を神の子とする新たな宗教団体が発足した。

そして、少しずつながら教勢を拡大して現在に至るのだという。「これは、二重の意味で裏切りなの」と、月夜は言った。「父は、真世界研究会で幹部職にあったのよ。きっと父の名刺をお持ちだと思っけど、あれに“総務部長”って書いてあったでしょう？　つまりは、教団の総務を一手に握っていたわけよね。ところが、そんな父が脱会した上、新しく宗教を旗揚げしたんですもの。真世界研究会側からすれば裏切りに写るわよ。……でも、脱会する前に教団内で引き抜きを行ったっていうのが真世界研究会側からすれば一番腹立たしいのかもね」

で、事あるごとに真世界研究会から嫌がらせや恫喝めいた手紙類が届くという。

警察に相談すればいいだろうに、と思う僕に、彼女は言った。

「真世界研究会のやり方はすごくいやらしいの。真世界研究会にいたことのある人間にしか分からない隠喩を使ってるから、警察に相談したところで駄目。それに、どうしたわけか父が警察を嫌っているから」

ともかく、と彼女は言った。

「真世界研究会、これだけは気をつけて。今の奴らは危険よ。……あゝあ、“ドクトル”はあんなにいい人だったのに、どうしてこうなっちゃうのかな」

ドクトル？

「ああ、真世界研究会の教祖様。ま、あんまり教祖様っぽくないんだけどね。むしろ、学者さんみたいな人。皆からいい意味で“おじいちゃん”みたいに懐かれてる人だった」

ふうん、小林さんみたいな人だな。ふと小林さんの困ったような笑顔を思い出した。

「ときに」

彼女は僕の目の前にあるキャンパスを指した。

「進んでるの？」

第一夜「月はいつでもあなたの元に」【10】

彼女はいたずらっぽく笑った。きっと、彼女にだって分かって
いるのだ。もちろん、さつきから月夜の話を聞いていて手が止まっ
ているのだから、僕の目の前にあるキャンパスには何の描線も描かれ
ていなかった。僕は頭を振って、また鉛筆で遠近感を図る。でも、
なんだかうまく行かない。というのも、気付いてしまったからだ。
彼女の格好がすごい刺激的なことに。

ミニスカート程度の長さしかない服から、ほっそりとしつつも程
よく肉つきのいい太ももが覗いている。で、大きめな胸が自己主張
している。なんだか、全身にうつすらと柔らかいものがついていそ
うな輪郭。今年18歳とのことだけれど、完璧に大人のボディだ。

と、そんな煩惱に襲われている僕に、彼女は言った。

「H」

あれ、心を読まれたか、と頭を掻いていると、彼女は言った。

「あんなあからさまに下心丸見えの目をされたら、心なんて読むま
でもないでしょ。……貫頭衣を団体の服にするからこうなるのよ」
カントウイ。聞いたことのない言葉に首をかしげていると、彼女
は教えてくれた。

「貫くに頭に衣類で貫頭衣。弥生時代頃の服らしいけど」

貫頭衣万歳！　僕が心の中で叫ぶと、彼女は言った。

「バカ」

その日も僕は彼女の輪郭を決めていた。もう、デッサン作業だけ
で一週間にもなる。普通デッサンというのはガーッと手がけてしま
うのがセオリーだ。その日に感じたイメージを描きつけたほうが、
勢いや統一感があつて良作が生まれることが多いからだ。

でも、僕はとにかく悩んだ。輪郭をひとつ描き入れる場面でも、
僕はうんうんと悩んだ。この描線は、彼女を語るのに必要な描線だ

ろうか。そう思い悩んでしまつて進まない。普段だったら描線なんて使い捨ての大安売りのたたき売り状態だ。気に入らなければ消せばいい。でも、なぜか月夜を紙の上に写し出そうとすると無駄な描線というものが気になってしまふ。その無駄が、彼女の輪郭を汚してしまふのではないか、と思えてならなかった。

スランプ？ その可能性も疑つてみた。でも、家に帰つて何でもない絵を描いてみれば描けてしまふ。スランプではなさそうだ。

んじゃあ、この閉塞感は何だ？ 僕はキャンパスを前に悩む。

と、そんな僕を見かねたのか、キャンパスの向こうにおいてある椅子に腰かけている月夜が声をかけてきた。

「ねえ、あなたってどこの生まれなの？」

つまらないところさ、と僕は答えた。

ちよつと困惑の色をはさみながらも彼女はさらに訊いてきた。

「どういう家族なの？」

つまらない家族だよ、と僕は答えた。

明らかにイライラをはさみつつ、彼女はさらに訊いてきた。

「どういう風に育つたの？」

この通り、つまらない大人になるべく育つたんだ、と僕は言つた。ついに、彼女の中にある風船が割れた。

「ねえ！ そういう言い方ってないと思うんだけど！ あなたが“つまらない”って言つたことの中にだって、面白いことはあるんじゃないの？ 少なくとも聞く側にとっては」

まあ、確かに。

そう思い至つた僕は、自分の生い立ちを話した。

僕が生まれたのは東京から遠く離れた山がちな村。本当に週刊誌が何日か遅れてやってくるようなところだった。僕の生まれたところにはかなり過疎化が進んでいて、僕と同年代の子供なんてほとんど居なかった。確か、1年生から6年生までの8人が机を同じくして勉強していた。そんな小さな学校で、僕は絵筆というおもちゃを見つけた。その色を塗りつけるおもちゃに魅せられた僕は、毎日のよ

うに絵を描き続けた。あるときは田園風景を。あるときは深い森を。あるときは畑で働く大人たちを。でも、どんどん長じるにしたがつてそんな画題たちに飽きていった。そして、田舎の生活に飽きていった。もともと、若者が住むには田舎は刺激が少なすぎるのだ。だから、高校を卒業してから都会に出て、絵の勉強をした。……で、今に至る。そんなつまらない話を、彼女はずっと目を輝かせながら聞いた。

僕の話が終わったところ、彼女は言った。

「あるんだね、そんな小説みたいな話」

よっぽど彼女の身の上の方が小説っぽい話だと思ったけれど（何せ彼女、新興宗教団体の神様なのだ）、とりあえず口をつぐんでおいた。

彼女は続けた。

「一人で都会に出て、さびしくないの？」

そんなさびしいもんでもないさ、と僕は答えた。それは本心だ。

でも……。

「でも、何？」

そうだった、彼女は人の心を読めるんだった。やりにくいなアと思いつつも僕は答えた。「空しいのは事実だね。東京には、色んな画題があると思ってた。日本中の富と栄光と人が集まる街だから、画題になりうるモチーフも多いんだとばかり思ってた。でも、東京って街はびっくりするくらい絵にならないんだ」。

東京に出た僕が絵から遠ざかったのは、何も専門学校のやる気のなさが原因というばかりではなかった。東京という街には、なぜかモチーフが何もなかった。確かに、この街には日本中の富と栄光と人が集まっていた。そして、一千万人の人達の物語があるはずだった。でも、その物語は僕の胸を掻き鳴らしてくれなかった。田舎にいたころにあつた、“描かなくちゃならない”とこちらに勝手な使命感を抱かせてしまうような何かがなかった。

彼女は言った。

「でも、やっぱり“つまんない”って言ってた割に、楽しそうな人生じゃない。やりたいことやってるし」

まあ、そうかもね、と僕はあいまいに返事をした。

「だってあたしなんてさ」と月夜は唇を伸ばした。「元一流商社マンの父と月人の母の間に生まれた神の子で、昔から人類を目覚めさせるべく奇跡を起こしていて、救えぬ衆生を救っていた。でも、18歳になると月人である母のところに帰る取り決めになっている”なんて人生だよ?”」

それは、彼女の“御子”としてのプロフィールだった。

彼らと接触するうちに学んだことを総合すれば、彼らが信じている神は、月に住む人間“月人”なのだという。人間よりはるかに高い知能とモラルを持つていて、未だに無明の中を生きている地球人に歯噛みしているのだという。そのため、時折人類に警告を寄こしている（聞くところだと、最近起きた地震も月人の警告らしい）のだけれど、無明なる人類はそれに気づかない。そこで、月人たちは20年前にスポークスマンを地球に寄こした。それが月人である月夜の母親だった。そして、その母親はあの宗教おじさんと出会い、恋におち、そして出来た子供こそが月夜なのだという。つまり、この話を無理矢理に信じるとするなら、月夜は“神”である月人の子供ということになる。けれど、月人である母親は結局月に帰ることになってしまった。で、宗教おじさんとの間で子供の取り合いのようなことになるらしい。そこで決められたのが、“18歳までは父方で、それ以降は月の母方で”生活する、という折衷案だった。

……という。

ハッキリ言って、こんな与太話、信じる方がどうかしている。…

…と僕は思う。でも、少なくとも月夜を神の子と崇めている人達がいる、その人たちは確かに月人と人類の間にあったというロマンスを本気で信じている。その事実には僕には如何ともし難い。

だから、少し気になった。果たして彼女は、自分が18歳になったら月に帰るものと信じているのか、と。

思い切って、聞いてみた。「君は、“18歳になったら月に帰る”って話、信じてるの？」と。

最初、彼女はあいまいに微笑んだ。困っているようにも見えたり泣いているようにさえ見えた。玉虫色な笑顔を浮かべていた彼女だったけれど、何か思うところがあつたのか、口を開いた。

「まあ、“どうでもいい”っていうのが本音かな」

話を先に促すまでもなく、彼女は続けて口を開いた。

「だって、あたし、母親がどういう人か知らないんだ。物心ついたときから、母さんはいなかった。写真さえ残ってないの。あたしにとって母親はそういうあいまいな人だから、その素性が月人だろうが地球人だろうが、別にカバだったとしてもそんなに驚かないよ」
何でカバ？ と疑問に思う僕に、彼女は補足をしてくれた。

「だってあたしの顔、カバっぽくない？」

た、確かに。なんとなくだけど、カバっぽい。でも、そのカバっぽさがむしろこの子のかわいらしさにつながっているように思えた。……と、ここまで心の中で呟いて、“今の思考、読まれてるんじゃない”とふと心配になって彼女の顔を見る。でも、彼女は特に表情を変えなかった。僕は胸をなで下ろした。

そんな僕を尻目に、彼女は続ける。今までの朗らかな話し口とは、明らかに異質な声で。

「それに、どうせ未来のことは帳尻が合わされちゃうんだから」

どうということ？ と聞くと、彼女はあいまいに微笑んだ。

「まあ、こつちの話」

にししし、と彼女は笑った。でも、彼女の目には少し翳が差していた。その陰の正体は何なのか、僕には分からなかった。

“未来のことは帳尻が合わされてしまう”。まったく言葉の意味が分からなかった。

でも、やがてその言葉の意味を理解できるようになる。

第一夜「月はいつでもあなたの元に」【11】

結局その日もうまくデッサンできず、落胆を引きずったまま家に帰ろうとしたのだけれど、でもこのまま帰ったら家でウジウジしてしまうと思い、春部さんの元に向かった。こういう煩悶は、腹にためずに口から出してしまった方がすっきりするし、原因も分かったりする。汚い譬えだけど、気持ち悪い時は食べた物を吐き出してしまったほうがすっきりするものだ。

春部さんの部屋には、さも当然のように春部さんがいた。

僕の顔を見るなり、「やあ、愚痴を言いに来たのか」、とつまらなさそうに言った春部さんは、どうしたわけか笑顔だった。何かあったんですか、と僕が訊くと、彼はぶっきらぼうに答えた。「いや、別に何も」。

僕は春部さんに勧められるがままにイスに座った。そして、最近スランプっぱいんです、と正直に言った。デッサンの描線がうまく決まらないこと、見かねたモデルの子に声をかけられて、結局手が止まってしまうこと。気付くと真っ白なキャンパスを前に慄然としてしまうこと。

それらの言葉を、始終楽しそうに春部さんは聞いていた。まるで子どもの駄々を楽しむお爺さんのような眼をしていた。けれど、僕の言葉が途切れたのを機に、口を開いた。「それはいい傾向だ」と。春部さんが言うには、スランプというのは次なる高みへのステップなのだという。ただ、そのスランプを壁とみるかステップとみるかによってもお前の行くべき道も違う、と彼は言った。

そんな意見はただの一般論だった。そして、その一般論から導き出されるのは“がんばれ”という、きわめて当たり前で穏当な励ましだけだ。

でも、僕が聞きたいのはそんな励ましではない。

何でもいい。どうしたらこのスランプを脱せるのか、それが聞き

たかった。

そして、その旨を春部さんに言うと、馬鹿言っな、と彼は言った。「スランプというのは自分で飛び越えるからこそのスランプなんだ。人に引き上げられてしまったら、それはスランプでなくなってしまう。それはお前のためにならないだろう」、と一般論を付け加えるのも忘れなかった。

普段の僕だったら、ここまで言われたら引き下がっているだろう。でも、このときの僕は引き下がれなかった。どうしても、うまい絵が描きたかった。いや、むしろ、モデルである月夜の姿をなんとしてもキャンパスの中にとどめたかった。そして、永遠とは行かなくても今過ぎてゆく一瞬よりは長い間、彼女の姿をとどめたかった。でも、今の僕にはそれができない。スランプなんていうバカバカしい理由で。

僕は言った。むしろ、「言った」というよりは、僕の中にいる誰かに「言わされた」という方が正しかった。

「僕の成長なんてどうでもいいんです。目の前の画題を、どうしても絵の中に留めたいんです」

その言葉に最初、春部さんは驚いたようだった。目をせわしなく動かして、僕と僕の足もととを何度も見比べていた。けれど、そのうち、は、と短く笑った。そして、「いやに情熱的だな。学生時代のお前にそれくらいの情熱があつたら、学校に残してやってもよかったんだがな」と皮肉たつぷりに言葉を継いだ。褒められるともぞ痒いですよ、とわざと皮肉を流した僕に苦笑をよこしつつ、彼は続けた。「いいだろう、教えてやる。……お前は、目の前のものを見過ぎなんだ」。

春部さんが言うには、デッサンとは“深く観察するようできて何も見ない”ことが肝要なのだという。禅問答のような言葉だが、と言い訳して、彼は続けた。「お前、考古学とか人類学なんかで描かれる、石器の図を知ってるか」。知りませんと答えると、彼は続けた。「あれは、石器についている凹凸を極めて精密に紙の上にトレ

ースしている。だが、そうやって描かれた石器の絵は、どう見ても石器には見えない。考古学者からすれば有意な情報を多く含むのだから、あまり芸術的ではない」。きつと、春部さんが言うのだから、“芸術的でない”という春部さんの言葉は正しいのだろう。

つまりは、と春部さんは言った。「お前のイメージそのままを、キャンパスに描きつけてみる。デッサンに行った時は、デッサンをするな。モデルの子と散々喋り倒せ。そして、その子の本質を持ち帰ってキャンパスに叩きつけるんだな」。

はあ、と僕は呟いた。あまりに突飛な意見だから、面喰ってしまったのだ。

あと、と春部さんは言った。「女の子と話すときは、肩の力を抜いたほうがいい。特に、思わずデッサンが止まってしまうほどの女の子の場合は、特にだ」。そう言っ、春部さんはにやつと笑った。凶星をつかれてちよつとバツの悪かった僕は、特に反論もせず春部さんの部屋から辞した。頬が少しほてっているような気もしたけれど、気のせいだと思うことにした。

バイトに出てみると、昨日の混乱は見事に終結していた。

昨日無断欠勤をした小林さんが、何の違和感もなく机に座っていたのだ。昨日はおろおろイライラしていた従業員たちにも笑顔が戻っていた。普段仁義を違えることを極端に嫌う社長すらも、安堵の笑顔を浮かべていた。社長に「小林さんを怒らなくていいんですか？」と冗談半分に小声で訊くと、「は、構わねえよ。あいつは有給を全然使ってねえしな。たまには休ませてやらねえといけねえよ」と真顔で僕の質問に答えた。

僕の言葉に気づいたのか、小林さんは申し訳なさそうに頭を下げる。「ごめんね。どうやら君にまで心配かけちゃったみたいで」と、人の良さそうな苦笑を浮かべながら僕に言った。横にいた従業員さんに、「余計なことを言うんじゃないやねえよ」とばかりに腰を小突かれた。

その日の仕事の持ち回りが発表された。いつも大抵僕は従業員の誰かのフロアーに回ることになっている。つまるところ、運ぶ荷物の多い人のフロアーに入る形になっているのだ。

その日、僕は小林さんのフロアーに入ることになった。彼は申し訳なさそうに「今日はよろしくね」と僕に言った。

でも、その日、小林さんに割り当てられた仕事量はさして多くなかった。いつもの小林さんなら一人で十分回せるくらいの現場だった。それでも僕が割り当てられたのは、前日に欠勤したから、という理由が大きいのだろう。ただ、そんな社長の気遣いは無用だったようだ。むしろ、僕がいるだけ邪魔なんじゃないか、と疑ってしまふほどに、小林さんはてきぱきと仕事をこなした。

いや、むしろ、普段よりも動きが速かった。小林さんはいくらでも仕事を速く出来るのだけれど、時折仲間のほうを振り返って「休む？」と微笑んでくれるような優しさがある人だ。でも、その日に限ってはものすごく黙々と仕事をこなしているようだった。

結局、僕らに割り当てられた仕事は昼ご飯を挟んで午後の三時ころには終わってしまった。

午後の三時に、最後の現場を終えると小林さんは小林さんらしくらぬことを僕に言った。「時間でも潰そうか」。うちの会社は基本的にその日の初めに仕事が割り振られて、その仕事を終えればその日のノルマは終了だ。運んでナンボの引っ越し業には珍しい態勢とも言えるけれど、社長はこう言っている。“余裕を十分すぎるほどやってるんだから、その分懇切丁寧な仕事をしやがれよ！ わかってんだろうな！”と。つまり、ノルマがそんなに厳しくないのは顧客満足を上げるために社長がひねり出したアイデアなのだ。でも、小林さんはそのことを理解しつつも、いつも目いっぱい仕事をするもともと、仕事が丁寧な人の上、仕事が速い。それに生来の生真面目が加わって、小林さんはいつも自分のノルマを終えると会社に帰り、“何かやることはないですか？”と社長に聞く。そしてほかの従業員よりも仕事をこなすのが小林さんなのだ。

でも、その日に限って小林さんは“サボろう”と僕に言った。あまりに意外過ぎて、それゆえに興味が沸いた。結局その小林さんの話に乗った。

けれど、“サボる”というほどのものでもなかった。

そこらへんの自販機から缶コーヒーを二本買って、僕に一本寄こした。そして、車を走らせて、適当に目についた公園の脇に止まってから、その公園のベンチに僕は座った。

その公園は、代々木公園のような大公園ではなかった。むしろ、住宅街に押し潰されていびつに歪んでいるような、ひとくちんまりとした公園だった。公園の中には、砂場とベンチ、あと屑籠しかなかった。砂場はとうの昔に子供たちに見捨てられてしまっているのか、まるで凧の海のように何の色もなかった。ベンチも何年前にペンキを塗ったのかも分からないくらいだったし、屑籠には燃えるゴミと燃えないゴミが無分別、山盛りに入っていた。

その公園の真中にあるベンチによっこいしょと腰を下ろした小林さんは、缶コーヒーのプルタブを引いて、一言言った。「昔はプルタブだったのに、随分と楽になったもんだね」。いや、缶コーヒーがこういうタイプになったのは最近じゃないですよ、と言うと、彼は笑った。「初めて東京で缶コーヒーを飲んだ時、プルタブだったんだ。その印象が抜けなくてね」。

夏の午後の日差しが、僕らのことをじりじりと焼きつける。日差しだけは、誰にでも平等に降り注ぐ。

僕もタブを引いて、缶コーヒーを一口口にした。甘ったるいコーヒーが、僕の塩気っぽい口を洗う。

小林さんかというと、タブを開いただけで、一向にそのコーヒーを飲むとはしなかった。座りながらコーヒーを両手で抱え、ただ前方をさびしそくに眺めているばかりだった。その視線の先に何かあるのだろうかと思って小林さんの視線を追ってみたけれど、その視線の先にはただアスファルトで固められた路面が広がっているばかりだった。

思わず、僕は訊いた。「どうしたんですか」

その問いに、最初小林さんは戸惑ったようだった。いや、戸惑ったというよりは驚いた、といった風だった。自分の世界に入っていて、僕の言葉で現実に揺り戻されたような感じだった。

まるでにかむかのように、小林さんは答えた。「ん？ 何がだ
い？」

僕は言った。「いや、なんだか、小林さん、様子が変わですよ」。

その言葉に、小林さんは少し瞳孔を開いた。でも、それは僕の気のせいかもしれないかった。目の前の陽炎の具合で見た幻だったのかもしれないかった。何せ、次の瞬間には、もう既に小林さんはいつもの小林さんの顔だったからだ。

小林さんは短く答えた。「はは、夏バテだよ」。

本当ですか、という僕の問いに、小林さんはハハハ、と笑った。

「僕ももう、君みたいに若くはないんだ。どうにも疲れちゃったんだ、ここところ。でも、もう大丈夫」。

まるで踏ん切りをつけるように両手の缶コーヒーを飲み下した小林さんは、その缶を屑籠に投げた。けれど、籠の縁に嫌われた缶は“カコーン”と間拔けた音を出して、地面に落ちた。おやおや、と小林さんは呟いた。「慣れないことはするもんじゃないね。……さ、戻ろうか」。

その缶を拾い上げて改めて屑籠にねじ込んだ小林さんは、先に車の方に歩きだした。僕も追わないわけにいかなくて、手にあった缶コーヒーを全部飲み下すとその缶を屑籠にねじ込み、小林さんの背中を追った。

このとき、僕は小林さんに聞けばよかったのだ。

第一夜「月はいつでもあなたの元に」【12】

ここはもしかしたら、運命の三叉路だったのだ。

もし僕がここで小林さんを止めることができたなら。あるいは、小林さんの心の闇に気づけたら。もしかしたら、運命は違ったのかもしれない。でも、結果として僕は何もできなかったし、小林さんは心の闇を抱えたまま、僕らの前から姿を消してしまった。

その次の日、小林さんは消えた。会社のお金を持ち逃げした上で。

その日の始まりは、小林さんがまた来社してこない、という騒ぎから始まった。その日は僕も出社日だったから、従業員たちと同じように困惑を浮かべていた。さすがに二回目、しかも一日置きという状況に、みんな不吉な予感を持っていた。

しかも、不吉な予感を感じさせるのはそれだけではなかった。

小林さんの机が、異様なほどきれいに片づけられていたのだ。小林さんは片づけの嫌いな人だった。緻密な仕事をする割に、あまり片づけは得意じゃないんだね、と他の社員にからかわれていたような人だ。いつもだったら伝票類や書類が山のように乗っかっているのに、その日に限って小林さんの机の上には何も乗っていないかった。伝票類はすべて片づけられていた。そして、会社から支給されたであろうものは丁寧に机の上に並んでいた。でも、小林さんの私物と思しきものは見事に姿を消していた。

誰からともなく、「まるで、暇乞いみたいじゃないか」と呟いた。始終、社長は唸っているばかりだった。小林さんの机の上を眺めながら、ギリッと歯噛みしていた。けれど、このままじゃいけないと思ったのか、社長は普段よりもドスの利いた声で怒鳴った。「おい！ お前たち！ 何ぼけつとしてやがる！ 今日運ぶ荷物が多い日なんだ！ さっさと行け！！」。その社長の声に追い払われるようにして、従業員や僕は営業所から飛び出た。ふと、部屋の中に

残された社長のほうを振り返った。ガラス越しの社長は、まるで面影を探すかのように小林さんの机を眺めていた。

結局、ほとんど仕事の手につかないまま一日の仕事を終え（どうやらそれは、今日組んだ従業員さんも同様だったらしい。普段は朗らかに仕事をこなすその人も、お客さんのちよつとした態度にピリピリしていた）、営業所に戻った僕らを待っていたのは、まるで鬼のような表情を浮かべる社長だった。

どうしたんですか、と訊くまでもなく、社長はその憤怒の理由を話した。その表情とは打って変わって朴訥とした喋り方だったけれど、むしろそっちの方が怖かった。「会社の金が、ない」。

は？ 従業員たちは首をかしげた。

社長は言った。「おめえ達に払う金はある。だが、会社として貯めてきた金が全部そっくりなくなってるんだ。さっき、銀行に用があつて行つたんだ。それで判った」。

社長の言葉はよく分からなかったけれど、つまるところ、人件費の類はしっかりと担保されているらしい。でも、会社の設備投資とか、あるいは会社の将来的な運営のために貯めていたお金がすべて消えてしまったらしいのだ。いつも給料は手渡しなことを考えると、きっと人件費は社長の後ろにある金庫に保存されていたのだろう。でも、会社の運営資金は銀行にすべて預けていた。それがすべて引き出されてしまった。そういうことのようにだった。

その言葉に、従業員さんたち（ついでに言えば僕も）の間に安堵感が広がると同時に、嫌な予感、嫌な想像が頭を廻った。会社の金がない。そして、従業員のうち、一人だけここに姿を表していない。しかもその従業員は皆に信頼されていて、会社の総務や経理を一手に引き受けていた……。

社長は言った。「小林だろう」。その言葉は、営業所の狭い空間にこだました。でも、その声は、他の社員達の言葉によってかき消された。そんなわけないでしょう！ 社長、言っていることと悪いことがありますよ！ 小林さんはそんな人じゃありません！ それ

らのすべては、小林さんという人間そのものを雄弁に語っていた。けれど、社長は首を横に振った。「いや、あいつだ」。なんで、という従業員の言葉に、社長は意外な答えを返した。「……昨日な、あいつ、“会社を辞めたい”って言うてきたんだ」。え！？従業員達の間には混乱が広がった。そんなバカな、と互いに互いの顔を見合せている。社長は続けた。「……一身上の都合により、だとよ。で、あいつはこう続けた。“それで、退職金も頂きたい”ってな。あいつにしては、いやに不躰で何かに焦っているようだった。だが、俺は断った。“そもそもお前を辞めさせたくない。それに、そんな金ない”ってな。それでアイツは納得したようだったんだがな」。

営業所に、深い沈黙が滑り込んだ。

でも、何が出来てもなく、結局従業員たちは、一人、また一人と無言で帰り支度を始めた。僕もまた、それらの従業員にまぎれて帰り支度を終え、いっさい振り返らずに営業所のドアを開いた。

「どうしたの？」

次の日、月夜に会いに行くと、出迎えに出た月夜は僕の顔を見るなりこう言った。その「どうしたの？」は“どうして来たの？”という謂いでないのは僕にも分かった。そもそも今日、僕がここに来るのは予定として決まっていたのだから。

その言葉の意味を聞くと、彼女は微笑んだ。

「まあ、立ち話も何だから」

と、僕をリビングに上げてくれた。

靴を脱いで廊下にあがった僕は、妙な違和感を覚えていた。いつも重低音のように二階から鳴り響いていた読経のような音が一切聞こえない。それに、衣擦れの音もほとんど聞こえない。どうしたのか。

そんな僕を尻目に、月夜は僕より先にリビングに入ってしまった。慌てて彼女の後ろを追った。

リビングの中で、彼女は微笑んでいた。光が眩しいかのように目

を細め、その顔の輪郭を窓から降り注ぐ陽光でおぼろげにしながら。まるで、女神さまのようだった。

「で？」彼女は僕に聞いた。「どうしたの？」

なにがさ、と聞くと、彼女は続けた。

「なんだか、あなたの心の中、泥みたいになってる」

泥みたい。僕の頭の中に、何者をも飲み込む沼のイメージが広がった。

彼女は続ける。

「そういう心するとき、人はたいてい悩んでるの。どうしたの？」

なんでもないよ、と僕は首を横に振った。きつと、彼女にある程度心を読まれているのだろうけれど、彼女の言葉からして僕の心の一番奥までは覗けていないようだった。

すると彼女は、話の方向を変えた。

「一つ、訊いていい？」

いいけど、と答えると、彼女は僕の右手を指した。

「今日もデッサンに来たんだよね？　なのに、どうして手ぶらなの？」

その質問には答えた。春部さん、っていう絵の先生に“デッサンは見るようで見ない”云々と言われてそれを実践してみようと思つて、と。彼女にも難しい話のようだった。「ふうん？」と適当な相槌を打っていたことから見て、彼女にもよく分かっていなさそうだった。

うーん、と彼女は腕を組んだ。

「わからないなあ、そういう禅問答みたいな話」

僕も分からないよ、と本音を返すと、でも、と彼女は言った。

「つまるところ”なら分かる”

つまるところ？　僕が話を先に促すと、彼女は続けた。

「つまるところ、あたしは前みたいに一日中座ってなくていいわけだ」

うーん、と彼女は伸びをした。まるで春の日差しに向かって伸び

る若葉のように伸びやかだった。伸びを終えた彼女はぼそぼそと言葉を放ち始めた。

「……あのさ……実は、今日、信徒の人達とか、お父さんとか、いないんだ。で、なんだけどさ」

普段の彼女にないたどたどしさに、僕はちよつと身構えた。いろいろな意味で。もちろん、桃色な意味が99.9%を占めていたのは言うまでもあるまい。僕も男なのだ。

でも、彼女の言葉は僕の想像の斜め下を行った。

「外に遊びに行かない？」

ああ、外に遊びに行くのね。ああ、まあそうだよな。つうか、変な期待した僕が馬鹿だった。ていうか、変な想像してた僕が馬鹿みたいだよ。こんちくしょう。……と心の中で呟く僕の顔を、月夜は怪訝な顔で睨んだ。

「“変な期待”ってなに？」

いいえなんでもありません、と笑顔で首を横に振ったのは言うまでもない。すると彼女はコロッと顔を笑顔に変え、

「じゃあ、着替えてくるからー!!」

と、どたどたと二階に上がって行ってしまった。

しばらく待っていると、ゆっくりとリビングのドアが開かれた。そこに立っていたのは、いつもと装いの違う月夜の姿だった。

いつもの白い貫頭衣とは違って、タイトなジーンズに黒いＴシャツというラフな姿だった。普段は下ろしたままの短い髪を、無理矢理ポニーテールにまとめている。そのおかげで彼女の可愛い顔の造形がさらに綺麗に見えた。そして、ジーンズにＴシャツというボディラインがもろに出してしまう格好のおかげで、ちよつと目のやり場に困った。まさか、ジーンズとＴシャツなんて組み合わせで目のやり場に困るとは、と僕は頭を掻いた。

そんな僕の心の中を読んでいないのか、それとも読まないふりをしてくれているのかは分からなかったけれど、彼女は言った。

「さ、行きましよう？」

どこに、と聞くと、彼女は不満げにピシヤリと言いつつ。
「そういうことを決めるのは、男の人の仕事でしょ」
「ごもっともです、と僕は喉の奥で呟いた。」

第一夜「月はいつでもあなたの元に」【13】

とは言つたものの、どこに行こうかなんて考えていなかった僕は、結局原宿に足を向けてしまった。そもそも、原宿が近いというものもあった。歩こうと思えば歩けるところに原宿があつた。それもさることながら、“女の子” ↓ ファッション好き ↓ ファッション発信地 ↓ 原宿”という極めて単純な思考回路が働いていたことをここに告白しなくてはならない。

さて、そんな風に原宿に降り立った僕たちを待っていたのは、竹下通りの喧騒だった。その日はウィークデーのはずなのに、竹下通りには人がごった返していた。セーラー服を着た高校生、ちよつとデザインが凝っているスーツを着こなした金髪の兄ちゃん。この街に不似合いな有閑マダム、外国人観光客たちが混雑を作り出していた。

「うわあ」

彼女は呟いた。でもこの嘆息は、うんざりの謂いのようなだった。事実、まるで力カオ99%のチョコを食べた子供のような顔をしている。そして、その苦い顔を僕に向けてきた。

「あのさ」

みなまで言わなくても分かっているよ、と僕が心の中で呟くと、彼女はにっこりと笑った。

竹下通りを諦めた僕らは、竹下通りから伸びる小道に入った。これらの小道にも古着屋とかこじんまりとしたブランド店が立っている。でも、竹下通りに出店しているような有名店でないので、小道の辺りはさほど人通りがない。

と、突然、彼女が足を止めた。

どうしたの、と聞くまでもなく、彼女は立ち止まって一点を凝視していた。

彼女の視線の先には、雑貨屋さんがあつた。まるで、北欧のお菓

子屋さんのようなポップさを醸す白い壁と四角い窓が印象的な建物だった。

彼女は言った。

「入ろう？」

別に反対する理由もなかった。

店に入っても、外から受けた印象にあまり変化がなかった。こんもりとした店内にはまた見たことのない北欧の空気が確かに詰まっていた。そして、その空気の下に、不思議なくらいにファンシーな小物類が置かれていた。雑然と並んでいるようで、そのどれもが絶妙の配置だった。でも、それは小物店としては欠陥のようだった。普段は売り物をまじまじと手に持って眺める癖のある僕だけれど、手を出す気になれなかった。きつと、僕以外のお客さんも商品に手を出しづらいただろう。そう、この空間は完成してしまっているのだ。一切の矛盾も余剰もない。だからこそ美しい。でも、それは既に“眺める美しさ”に変貌している。そして、触りがたいものへと変貌している。

でも、月夜はそんなこと一切お構いなしのようなうだった。

「ねえ、これ、可愛いね」

と、猫型の文珍を手にとってキヤイキヤイ言っている。普段のアルカイックな笑顔とは違う、自然な笑顔だった。

そんな月夜の声に気づいたのだらう、奥から店員さんが出てきた。赤いチエックのシャツにぴったりとした黒いパンツを着て、空色をしたエプロンをかけていた。まるで何かの主張のように、長い髪を三つ編みにしている。似合わないことはないのだけれど、もっと似合う髪形がありそうだと初見の僕に思わせるような三つ編みの具合だった。

その女性店員は、いらっしやいませ、と大きくもなく小さくもない声で挨拶すると、僕と月夜のことを見比べた。そして、くすりと笑った。でも、それは人を嗤う類の笑い方ではなかった。むしろ、微笑ましい、といった類の笑い方だった。

ちよつと待つててくださいね、と言つて奥に消えた店員は、しばらくしてから手に小さな箱を持つて、戻つてきた。

僕らの前に立つたその店員は、僕らの目の前でその箱を開いた。その箱の中にはイヤリングが入つていた。

右耳用のものは太陽の意匠。左耳用のものは月の意匠をしていた。
「へえ」

まるでトランプをガラス越しに眺める少年のような顔をして
いる月夜に、その店員は“これは、片耳用のイヤリングなんです”、
と説明しているようであるで説明になつていない言葉を發した。

当然、月夜は、

「え？ それつてどういふことですか？」

と店員に聞いていた。

最初、その質問に対して、店員さんはにこつと微笑むばかりだつた。まるで、昔話の続きをせがむ子供を焦らす老婆のような類笑みだつた。不思議と引き込まれる類の微笑み方だつた。

その店員がおもむろに口を開くところによると、“このイヤリングは、大事な人と折半して、一方は右耳に、もう一方の人は左耳につけるんです”とのことらしい。ほお、最近原宿ではそういう習慣が流行しているのか、と首をひねる僕に気づいたのか、店員さんはいたずらの見つかつた子供のような顔を浮かべ、種明かしをした。

「実は、これ、ブームにしたいんですよ」。なるほど、ブームとか流行を待つのではなくて、自分から作るうというわけなのだ。でも、そつやって腹の内をすぐ白状してしまふあたり、この店員さん、あまり商売がうまくないんだろつなあ、と余計な心配をしてしまった。けれど、店員さんのセールストークは月夜の心は捉えたようだ。
「なんだかそれ、いいですね！」

と、目をきらきらさせながら月夜はそのイヤリングを眺めていた。けれど、そのうちイヤリングに向けられていた熱視線が僕の方に向いた。なんだか嫌な予感がした僕は横を向いてかわそつとしたのだけれど、かわす前に、彼女に先手を打たれた。

「買って」

ほら来た。

「買って買って買って」

うわ、連呼。

「買ってくれなきゃ、呪うよ」

うわ、ついに恫喝。

でも、彼女は花を枯らすことができるような超能力者でもあるのだ。“呪う”という言葉に、妙な迫力がある。むげに断ればきつと本当に呪われる。そんな気もした。

だから、結局財布のひもを緩めてしまった。

「やったあ、ありがとう！」

そして、彼女はイヤリングを手に入れた。占めて一万円也。その一万円で彼女のブライスレスな笑顔が見れたのだからそれでよし、と達観できるほどには、僕は子供でないようだった。

でも、その一方で彼女の笑顔を見れたからそれでよし、と開き直っている僕も確かにいて、少し戸惑った。

しばらく結局そこら辺をぶらぶらしたのだけれど、歩き疲れたかと彼女が言い出したこともあって裏道にひそやかに立っていた喫茶店に入った。

その喫茶店は、昔ながらの喫茶店ではなくて、チェーン店の、つまりはデートに使うには少々気の利かない——喫茶店だった。けれど、月夜は入るのが初めてだったのだろう、辺りをきよきよと見渡していた。その頭の動きに合わせて、彼女の髪が揺れ、甘い香りが僕の鼻腔をくすぐった。

僕は自分のためにアメリカンコーヒーのMを頼み、彼女のためにカフェラテのMを頼んだ。そして、頼んだ飲み物が出てくると、先に席に座らせていた彼女の所に向かった。

月夜はひよいと手を上げた。

「ありがとう」

いいよ別に、と僕が答えると、彼女は僕の差し出したカフェラテ

を受け取った。最初は、まるでどこかの遊牧民の飲み物を見るような眼でカフェラテを眺めていた彼女だったけれど、意を決したのか蓋を開けて縁に口をつけた。あ、その蓋、開けなくても飲めるんだよ、と言おうと思ったけれど、まあ瑣末な問題なのであまり混ぜ返すことはしなかった。

「おいしいね」

彼女は無感動に言った。え？ 飲んだことないの？ と聞くと、

彼女は無感動に続けた。

「こういう飲み物は、霊的レベルを下げるんだってさ」

彼女と会話するときにはコツがある。それは、分からない単語について一切詮索しないことだ。“霊的レベル”という単語の言わんとするところが分からなくても、空気を読まなくてはならない。でないと、彼女とのコンセンサスに時間が取られ、本筋が進まなくなってしまう。

「まったく、嫌になっちゃうよね」と、月夜はカフェラテを眺めながら言った。「なんだか、“大貧民”みたい」

またもや宗教関係の用語だと思って、“大貧民”という言葉聞き流していたけれど、この後に続く彼女の言葉からして、その“大貧民”は僕がよく知る大貧民であることが分かった。つまり、トラップの大貧民のことだったのだ。

「大貧民ってさ、“縛り”ってルールがあるじゃない？ 例えば、5、6、って連番の数字が出たら、今度は7を出さなくちゃいけない、とか、スピードが続いたら、スピードしか出しちゃいけない、とか。なんだかあたしって、ずっとそうやって“7しか出しちゃいけない”“スピードしか出しちゃいけない”って言われ続けてる気がする。あたしの前に札を出す人がとてつもなく意地悪で、あたしのことを縛ってばかりなの」

彼女の言葉のニュアンスには、“バカバカしい”とでも言いたげな色が潜んでいた。まるで自分の言葉をすぐようにしてカフェラテを口に含んで呑み込んでから、彼女は続けた。

「バカバカしいよ。どうしてあたしだけこんななんだろう。親が宗教にハマる体質だから？ たまたまあたしに超能力めいたものがあったから？ そういう星のもとに生まれたから？ でもさ、そんなのほとんど運みたいなのじゃない。あの父親の娘っていうのも運。超能力があるのも運。不運な星の元に生まれたのも運。でも、その運みたいなのが、どうしてあたしこんなに縛るんだろう」

彼女は続けた。

第一夜「月はいつでもあなたの元に」【14】

「でも、不公平だよ。だってあたし、普通の人間だもん。普通じゃない人間がこうして不公平な目に遭うんだろ。あたし、月人と人間の間の子なんかじゃないもん。……あ、超能力は使えるけどね」

と、俯きながらも彼女は指をくると躍らせた。卓の上にあった灰皿が、まるでラジコンカーのように動き回っている。サイコキシネス。普通の子だったらペンで落書きでもするのだろうけれど、超能力者が手持ち無沙汰なときにはこうやって場をしのぐのだろう。彼女は続けた。

「月に帰る」なんて、嘘に決まってるじゃない」
え？ 嘘なの？ と聞くと、彼女はうつろに笑った。

「あたりまえじゃない。NASAの報告だと、月には地球のウン千万分の一くらいしか大気がないんだって。そんなところに人が住めるわけないじゃない」

いや、僕がむしろ気になったのは、「月夜は18歳になると月に帰る」という、月夜を中心とした教団の中心的思想を、月夜自身がまったく信じていないという事実だった。

不思議そうな顔を浮かべてしまったのだろう、彼女は僕の顔を咎めた。

「そんな不思議そうな顔しないでよ。でも、きつと、あたしは“月に帰る”ことになる。あたしが信じようと信じまいとね」

意味が分からなかった。月に帰るとい言葉信じていないのに、月に帰ると彼女は言う。その言葉の意味を聞くと、彼女は笑った。

「きつと、あたしは“月に帰る”んじゃない。“月に帰らされる”んだと思う」

この言葉を思い出すとき、僕がいつも思うことがある。彼女のあの言葉は、裏付けのあるものだったのだろうか、と。彼女は不完全とはいえ心を読むことができる。もしかしたら、信徒や己の父親の

腹の内を読んでいたのかもしれないのだ。いや、もしかしたら、空気で察したのかもしれない。とにかく、彼女は己の身に降りかかる結末を予期してたんだろうか、と思うことがある。

僕には、予期していたようにも思える。だって。

あの言葉を言い放った時の彼女の顔が、あまりにも綺麗だったからだ。春部さんの受け売りに、こんな言葉がある。“女の美は二種類ある”。曰く、幸せそうな女の顔と、不幸のさなかをさまよう女の顔は等価値なのだ。『モナリザが美しいのは、モナリザが絶望しているからだ』と春部さんは言っていた。

彼女は幸せだったのだろうか、それとも不幸だったのだろうか。でも、その時の僕はそんなこと思いもよらず、彼女の話に聞き入るばかりだった。

なんだか湿っぽくなっちゃったね、と彼女は言った。それが合図だった。同時に席を立った僕らは喫茶店を後にした。かといってそのあと何をする、という展望もなくて、結局彼女を家に送った。

イヤリングやら喫茶店やらでお金を落として軽くなった財布が、僕のことを笑った気がした。

次の日、バイトに行ってみると、社長の様子がおかしかった。両手に木刀。

なんと、完全武装していたのだった。いわゆるガテン系でものごくガタイのいい社長が両手に木刀を持ってしまつと、それだけで逮捕モノの迫力が出てしまう。その一発逮捕の迫力のままで、社長は僕に言った。「実はな、小林のいるところが分かったんだ。今から救出に行くぞ」。

社長が言うには、小林さんはある宗教団体の道場にいるのだという。ある宗教団体……、その言葉にちよつと引つかかるものがあったけれど、社長が口にした教団名は、僕の想像とは微妙にズレたものだった。「その教団な、“真世界研究会”とか言うらしい」と、社長はゲジゲジの眉を吊り上げながら言った。真世界研究会。かつ

て月夜と宗教おじさんが所属していた宗教団体。そして、月夜が「奴らには気をつけて」と言い放った教団。

でも、なんで小林さんがそんなところに？

僕の心中の疑問に答えるように、社長は言った。「あいつは人がいいぶん、騙されやすいところがあるからな。きつと、悪い奴らに騙されて入信しちまったに違いねえ。それに、金の話だつてそうだ。その真世界研究会とやらが小林を“ナントカコントロール”して、お金を奪わせたに違いねえ。違いねえんだ」。まるで、自分に言い聞かせるようにして、社長は言葉を吐き出していた。

そんな社長に引つ張られるようにしてトラックに乗せられて、しばらく車を走らせたところに真世界研究会の道場があった。

道場と言っても、それはただの古びた雑居ビルだった。一階は全国チェーンのラーメン屋で、二階は古い輸入盤の店だった。三階はタイ式マツサージの店だった。その上に、真世界研究会の道場（どうやら、看板から見ると、真世界研究会側は「研究棟」と呼んでいるらしい）があった。東京のどこにでもありそうなビルの中に、小林さんは如何わしい宗教団体と一緒にいる。

社長と僕は狭い上り階段を上り、4階のドアの前に立った。しばらく息を整えてから、社長はドアを蹴破るようにして盛大に開いた。「うちの小林を返してもらおうか！」とこっちが身震いしそうな怒鳴り声を上げながら。

けれど、その道場に、混乱はなかった。部屋の中には十数人の信者と思しき人たちがいるのだけれど、社長の怒声に驚いたり恐れおののいたりした人はいなかった。皆一様に社長の顔を見つめて、目をぱちくりさせている。社長の姿が見えないのでも、社長の怒号が耳に届かないわけでもなさそうだった。でも、社長の発した肝心の物を、信者の人達は一切受け取っていないようだった。

やがて、奥の部屋のドアが開かれ、すらっとした中年男が姿を現した。紺のスーツを当然のように着こなした男だった。短髪で手足が異様に長い。でも、顔の印象がさっぱりない。目を顔から離れた

瞬間に、その造形を忘れてしまうような顔だった。

その男は島村と名乗った。そして、抑揚も込めずにこちらの要件を聞いてきた。

要件、という言葉が社長の癪に障ったらしい。「要件たあふざけたこと言いやがって！」と叫んで右手の木刀を捨て、島村の襟首を掴んだ。このまま首を絞めるのではないかというほどの剣幕だったけれど、あまり島村は動じていないようだった。島村は社長の腕を優しく撫でてから言った。「暴力はよくないですよ」。まるで、ダッ子をなだめる母親のような言葉は、さらに社長の逆鱗に触れたらしい。襟首を掴む力を強め、島村の顔を睨んだ。

けれど、島村も負けていなかった。襟首を締め上げられているにも関わらず、まるで壊れたお喋り人形のように「ご用件は、ご用件は」と連呼していた。

そんなこう着がしばらく続いたのだけれど、やがて社長の方が根負けした。バツが悪そうにして、まるでゴミでも投げ捨てるように襟首を離れた社長は言った。「ここに、小林はいるんだろ？」と。その言葉に対して、島村は即答した。「ええ、おります」。僕からすれば意外だった。てっきり否定するものと思っていたからだ。それは社長も同様のようだったけれど、社長はすぐにさっきの剣幕に戻った。「小林を返せ!」。社長の怒号は僕を揺らし、窓ガラスを揺らした。けれど、信者の人達や目の前の島村を震わすことはなかった。

島村は妙な顔をした。眉根をひそめ、双眸を社長に向け、そして唇を少し伸ばすという顔に。最初、それがいかなる感情を表すものか分からなかった。

その表情のままで、島村は言葉を発した。「返せ」とは、奇妙なことをおっしゃる」。

そもそも、小林氏はあなたのものではない。かといって、我々研究会のものでもない。小林氏は、小林氏のものである。そもそも持つていないものを“返せ”と言われても困ってしまう。

島村は大体このようなことを言った。

けれど、この言葉に社長は反論した。「ふざけるな！ 拳げ足を取るな！」

その言葉に、今度は島村が叫ぶ番だった。「拳げ足ではありませんせんよ！」。その怒号にも似た大声は、社長の虚をついたようだった。

島村はその大声を引つ込めて続けた。「あなた方がお持ちの、“小林氏を所有するかのような感覚”、それがどんなに小林氏を追いつめていたか、あなたには分かるのですか。そして、小林氏はそんな現実に嫌気がさした。だから、我々に助けを求めに来たのです」。どうということだ、という社長の低い声に、島村は答えた。「あなた方無明の凡夫どもは、人間を所有したつもりになります。そして、その“所有した”人間に過度の期待を与えます。そのくせに、その人間に価値がないと見限ったとたんに捨ててしまふ。まるで壊れたおもちゃのように」。話が見えてこないが、と呟いた社長に、島村はさらにたたみかけた。「……これは、小林氏から聞かせて頂いた話です。本来ならば私の胸に留めておくべき性質のものでしょうか。けれど、小林氏を守るため、言わせて頂きます。……小林氏には、家族がありました。妻と子供です。その二人は無明にも、小林氏を所有した気分になり、過度の期待を与えました。“マイホームが欲しいの”“自分の部屋が欲しい”。そんなわがまま勝手な言葉に従うため、小林氏は働きました。それこそ、一週間に一度しか家に帰れないほどに」。その島村の言葉は本当だった。小林さんはよく、営業所の仮眠室で一夜を過ごしていた。「いや、家に帰るより、ここで寝たほうが楽だから」と笑っていた。島村は続けた。「……けれど、そんな小林氏を、家族は見捨てたのです。“あなたは仕事ばかりで、家を顧みない”“もっと構ってくれる父親の方が良かった”と。そして、小林氏は勝手に家族に見捨てられたのです。だから、小林氏はここに来了。真世界研究会では過度の期待など与えられません。あなた方のように、誰かを身捨てることなどありません」。島村は、一息息を吸い込んでから、僕らを指で指した。「そして、

あなた方だつて共犯も同然です。あなたは小林氏の苦境を理解できる立場にあつた。何せ、職場の仲間なのですから。にもかかわらず、あなた方は小林氏のことを顧みようとせず、“小林さんはすごい人だ”などと神棚に上げて、小林氏のことを何一つ知ろうともしなかつた。過度の期待をかけているくせにね”。

それは、その通りなのかもしれない。アルバイトの僕でもそう感じているということは、社長の方がはるかに強く感じているだろう。

社長はうつむいていた。そして、唇を思いつきり噛みしめていた。唇に刺さつた犬歯から、血がしたたつた。

もう、社長は「小林を返せ」とは言わなかつた。

島村に、「小林に、“金は返さなくていいし、ことを荒立てるつもりもない。退職金だ、くれてやる” って言つておいてくれ」と託を頼み、のろのろと踵を返した。けれど、思い出したように島村の方を振り返り、「あと、“気が向いたら、こつちに戻ってきてくれ” とも託を頼む」と、弱弱しく付け加えた。その言葉に頷きつつも、島村は言つた。「けれど、小林氏がそちらに戻ることはもうないでしょう」。

そうか、と答えた社長は、まるでしぼんだ風船のようにすっかり小さくなつてしまつた背中を揺らしながら、歩き出した。慌てて、僕も社長に続いた。

こうして、小林さんは僕の前から姿を消した。

その夜、僕はデッサンを描いた。

月夜から切り取つたイメージを、ひたすら紙にトレースした。まるで、堤防が決壊したかのような感覚だつた。これまで描けなくてもどかしかつた描線達が僕の目の前で構成されていった。

そうして描かれた彼女の顔は、喫茶店で見せた彼女の顔だつた。似てるような気もしたし、似ていないような気もした。

でも、この絵が似てるか否か、それは永遠に分からなくなつてし

まった。

いつものように彼女の家に顔を出した。

すると、出てきたのは宗教おじさんだった。でも、一目見て普段と様子が違うことに気づいた。

目は真っ赤に充血しているし、僕を見る目には恐れの色があった。しかも、玄関のドアを半分開いて、僕を決して招じ入れようとはしなかった。

宗教おじさんは妙にたどたどしく言った。「申し訳ないが、今回の絵の話は無かったことにしてほしい」。そう言って、彼はドアをボタンと締めてしまった。

ドアの前に立ち尽くす僕の右腕の中には、月夜のデッサンがあった。

第一夜「月はいつでもあなたの元に」【完結】

それから数カ月の中に発覚した、あるカルト宗教団体が引き起こした事件を皆さんもご存じだろうと思う。

ある宗教団体の教祖の娘が、その教祖の自宅兼道場にて、腐乱遺体として発見されたという事件だ。この時期、特にニュースめいたニュースもなくて、丁度“ニュースの谷”になっていた時期だったから、猫も杓子もその事件に興味が向かったようだった。その事件のあらましにとどまらず、その新興宗教団体の“教義”の異様さも話題となった。曰く、「月人は人類を導こうとしている」、「月人と人間との間に生まれたのが、教祖の娘、“御子”なのだ」、「“御子”は死んでいない。体はあくまでかりそめのもの。魂は月に向かわれた」。評論家などはしきりに“異様だ、異様だ”とコメントした。でも、そのカルト教団の主張がどういう意味で異様なのかは僕には分からなかった。

死体遺棄の疑いで逮捕された教祖の言動も話題になった。いろいろな宗教団体を遍歴していたという経歴について彼は「新興宗教を作るための下調べのためだった」と供述したという。どうやら、最初から娘を中心とした宗教団体を作るつもりで他の宗教団体のノウハウを盗んでいたらしかった。そして、彼はこう言い放ったという。「神なぞ信じていない。だが、神を作ることはできるんだ」。そううそぶいた教祖の口から語られたのは、とんでもない言葉だった。

私はね、娘を殺したんだよ。

イエス・キリストは、死んだことで伝説となった。他の宗教団体の教祖もしい。死んだことで伝説になっていった。なぜ伝説となるのか？ それは死んでしまうことで“不可侵”な存在になってしまうからだ。その“不可侵”なものを人工的に作り出せば、神を作ることが出来る。——そう取調室で弁舌をふるった彼は、さらに続けた。

娘には超能力めいた力があつた。こればかりは、信じてもらえないと話が進まないのので信じてほしい。彼女には力があつた。念動力や人の心を読むことができた。もともと、伝説になる素質のある人間だったのだ。だからこそ私は新興宗教を立ち上げようとした。新興宗教っていいのはいいぞ？ その小さなピラミッドの上に立ちさえすれば、まさに神になったような気分なのだからな。……話が逸れた。とにかく、私は娘を中心とした宗教を立ちあげた。そして私の王国を手に入れた。

だが、私の王国を壊そうとする奴らがいた。真世界研究会だ。あいつら、さまざまな手を打って我々の切り崩し工作を図ってきやがった。私の王国の結束が乱れそうだった。だから。

殺したんだよ。

娘を殺すことで、娘を“不可侵なる”ものにしたかった。そうすれば、信徒たちは“不可侵なる”娘を称え続ける。そして、私の王国は安泰だ。……いやあ、殺すのは大変だった。手足をばたつかせて抵抗する娘の頸を締めるのは骨が折れた。腹も蹴られたし、顔も殴られた。でも、思いつきり締めてやったら動かなくなった。で、私は信徒たちに言った。「これで、娘は月に帰った」とな。誰も、疑わなかったよ。そんなわけねーだろ、って腹の中では笑ってたよ。月に人間なんているわけねえだろ。でも、お前らバカのおかげで、私はこうして楽しく暮らしているんだから感謝しないと、って腹の中でゲラゲラ笑ってたよ。

この供述を以て、教祖は再逮捕された。もちろん、殺人罪での再逮捕だ。

この件の取り調べを行ったベテラン刑事の心が病んでしまった、というニュースも駆け巡った。あるコメンテーターは、「刑事という商売は元々凄惨なことを耳にしてナンボの商売ですが、そんな人を病ませてしまうほどのですから、まだまだ我々に知らされない惨たらしい事実があるでしょう」と賢しらにコメントした。

真世界研究会にも取材が殺到した。しかし、真世界研究会側は「

コメントすることは何もない。ただ、一人の人間として、一人の少女が狂信の犠牲になったこと、深くご冥福をご祈念したい」とだけ答え、沈黙してしまった。

こんなに騒がれた事件だったけれど、次第に清纯派アイドルの結婚や“最後の大物昭和芸人”の死や、あるいは異国で起こった戦争や株価の大暴落といった事件によつて、この痛ましい事件は次第に記憶の端っこに追いやられていった。

そうして、事件は風化していった。

風化しそももない、僕の心だけ残して。

月が、輝いていた。

その夜空に浮かぶ黄色い月を見上げながら、僕は河川敷に寝転がっていた。あれから数カ月、僕を取り巻く環境はずいぶんと変わってしまった。

引っ越し屋・白くま屋は、今でも会社としては続いているという。社長はあれでやり手だから、仕事が終わるということはないのだ。

けれど、その業務の縮小は避けられなかった。小林さんという人間の穴は、あまりに大きかった。

そして、その業務の縮小のしわ寄せが僕にやってきた。「すまねえな」。社長の一言目はそれだった。正社員の首を切るのは勇気があるんだ。逆に、アルバイトっていうのはいくらでも切りようがある。それが世の習いなんだ。社長には珍しく、歯の間に何かが挟まったような物言いだった。もちろん、心得てます。と僕は頷いた。すると社長は僕に封筒をよこした。「ほら、今月の給料だ。あと、長く働いてくれたからな、餞別だ」。あとで封筒を開いてみると、かなりまとまったお金が入っていた。このお金だけで3カ月は暮らしていけそうな額だった。つまるところ、社長は僕に退職金をくれたのだ。会社が大変な時に。

けれど、そのお金もそろそろ尽きつつあった。他にバイトを始めれば良かったのだけれど、色々なことがありすぎて、新しいバイト

探しをする気にもなれなかった。

月を眺めながら、僕は思った。田舎に帰ろうか、と。

結局、今回の絵の仕事もフィになってしまった。そして、あの子ももうここにはいない。その二つの事実が、僕の心に押し掛かった。いや、それだけじゃなかった。どうして僕は、彼女に何もできなかったんだろう、という後悔が胸を掠める。あの、最後に会った日。あの時にどうして僕は彼女の手を引いてどこかに連れて行ってあげられなかったのだらう。

ニユースによれば、彼女が父親に殺されたのは、あの外出の日だったという。つまり、僕と別れて何時間もしないうちに、彼女は殺されたのだ。もし僕が。もし僕が。僕が握っていた分岐が、あまりに多すぎる気がした。

僕は、田舎に帰ってしまう方がいいんだろう。そして、狭い世界で生きるのが似合っている。

そう心に決めて、立ち上がろうとした瞬間だった。

突然、背後から声がかかった。

「あなたも、月に帰っちゃうの？」

聞き間違えようがなかった。あの子特有の、不思議な声の響き。懐かしい声。脳裏に残る、鈴の音のような声音。

振り返ると、そこには彼女が立っていた。

別れた時のように、悲しそうな微笑みを湛えて。

とにかく、困惑した。まさか、ここに彼女が現れるはずはない。

だって彼女は、数ヶ月前に父親によって絞め殺されているのだから。けれど、彼女はそこにいた。彼女の耳に、月と太陽モチーフのイヤリングが下がっていた。右が月、左が太陽だった。見慣れた貫頭衣姿じゃなくて、最後に見た、ジーンズとＴシャツ姿だった。

彼女は言った。

「ねえ、答えて。あなたも月に帰っちゃうの？」

どういうこと？ 僕も君も、月は帰る場所じゃないはずだ、と答えると、彼女は薄く微笑みながら続ける。

「月」っていうのはあくまでメタファー。あたしの場合それは字句通りになっちゃったけどね。……「月」っていうのは、運命のこと。あたしにはあたしの運命があった。そして、あなたにはあなたの運命がある。不思議なものだけど、人間、ある程度自分の運命を読みちやうものなの。自分の落ち着く所が見えちやう、とも言えるかも。「月に帰る」っていうのは、結局のところ自分の運命を受け入れちやうつてことなの」

僕は何も言わなかったし、何も言えなかった。

「もしかしたら、あたしは運命を変えることが出来たのかもしれない。でも、私は諦めていた。運命に従ってあたしは死ぬんだ、つて、事実死んじやったわけだし。……あたしが死んだのは、あなたのせいじゃないの。あくまで、あたしのせい」

でも。僕は言った。君は死ぬ直前、父親に抵抗したんだろ、と。

彼女は頷いた。けれど、頷いて僕に向けた目には、深い闇が広がっていた。

「死ぬ直前、父親に首を絞められている丁度その最中に、なんでか分からないけれど、あなたの顔が浮かんだの。『ああ、死ねないナア』つて心から思えた。でも、結局最後は諦めちゃった。……あたし、超能力があつたでしょ？　そういうマイノリティつて、普通の世界じゃ暮らしにくい。やっぱり、世間様の目は厳しいつていふかね。それが分かつてたから、抵抗できなかった。あたしの人生は、父さんの作ってくれた教団にしか存在できなかったの」

自分の首を絞めた父親を、未だに「父さん」と呼んだ。

「きっと、父さんと信徒の人だけだったんだ。あたしのことを認めてくれてたのは。だから、きっとあたしは自分の運命を変えられなかった。あたしが悪いの」

僕はうつむいた。

その僕に、彼女は声をかける。

「でもね、あなたもあたしのことを珍奇の目で見なかったし、尊崇もしなかった。ただ、一人の女の子としてあたしのことを見てくれ

た。本当にうれしかった。今までは、超能力があるせいで気味悪がられたりしてたのに、あなただけはあたしを特別扱いしなかった。……こんなこと言うと語弊あるけど、あなたのHな視線もあたしにとつては嬉しかった。あたしのことを普通の女の子として見てくれたんだもの。きつと、あたしは最後の最後であなたに救われたのよ」

彼女は月を眺めた。まるで、涙をこらえるかのようだった。

「ねえ、あなたにだつて見えてるでしょ、自分の運命」

自分の運命。“運命”などと大上段に振りがぶられた言葉だと分かりづらけれど、人生の落ち着き所ならなんとなく見えている。きつとこの後僕は帰りたくない田舎に帰り、継ぎたくない農家を継いで、そしてそこで適当な相手と結婚し、適当に子供を作つて適当に死ぬのだ。

彼女は僕の瞳を覗き込んだ。

「それがあなたにとつての“月”。“月”はいつでもあなたの背後にいる。そして、帰ってくるように迫ってくる。その月の言葉を振り払わないと、出来なくなっちゃうことって多いの」

あとは、と彼女は言った。

「運命に帰るのか、運命からそっぽを向くのか。その選択だけ」

僕は、淡く頷いた。

すると、彼女は微笑んだ。

「あなたなら、分かってくれると思った」

僕は訊いた。どうして君がここに？ と。すると、彼女は答えた。「このあたしは、あたしであつてあたしじゃないの。あたしの欠片と、あなたの記憶とが混在して出来上がったあたしの残像のようなものでしかないの。……いつぞや、ここであなたに話しかけたのはあたしの欠片なの。あなたがあたしの所にやってくるって予感があったの。そして、あたしの運命を変えてくれるって予感も。だから、話しかけてみたの」

夏の頃に聞いた幻聴。遠い夏の夢のような話。

そんな僕を見つめながら、彼女は右耳のあたりを、まるでボタンでも外すようなしぐさでいじった。そして、右手を僕の前に差し出した。

「これ、あげる。……って、あなたに買ってもらったものだから、
“あげる”って表現は変だけど」

彼女の手の内から、何かがこぼれおちた。まるで、涙のように僕の手に落ちた。

僕の手に落ちたもの、それはイヤリングだった。月のモチーフの方だ。「僕に似合うかな」、とわざとおどけて言ってみた。おどけないと、涙が出そうだった。そんな僕の気分を察しているのか、彼女もおどけて言葉を返してきた。

「最初っから、あなたに似合うなんて思ってたないよ。……でも
でも？」

彼女は声音のトーンを少し落とした。

「絶対に使ってよね。じゃないと、化けて出てやるから」

もう化けて出てるじゃないか、と僕は笑った。涙をこらえながら。思わず、視線をそっぽにやってしまった。涙がこぼれそうだったから。

「さよなら」

彼女の言葉が、河川敷の空気に溶けた。

その言葉に振り返ったときには、彼女は既に河川敷から姿を消していた。

僕は結局、彼女にさよならを言いそびれた。

結局、僕は決めた。

東京に残ろうと。

今までのようにバイトをしながら絵を書いていこうと決めた。
そして僕は今までのように、東京のわざとらしさに辟易しつつバイトをこなし、バイトの鬱屈を酒でも飲んで解消し、その帰りに河川敷を歩き、月を眺める。僕のことをどこまでも追いかけてくる月

を眺めながら、「まあだだよ」と酔って呂律の回らない口で呟く。僕は一生月に帰れないんだ、と心の中で呟きながら。そして、自宅に戻ってから、僕はデッサン帳を開く。彼女の顔が描かれたデッサンを眺めながら、どうやって油絵にしようかと思案する。けれど結局構想が浮かばない。その代わりに、春部さんから斡旋してもらった油絵の仕事に取り掛かる。こっちの方は案外うまく行く。人の手に渡るものだと思ってしまえば、そんなに感傷も思い入れも湧かないものだ。そして春部さんからもらった仕事を片付けたあとで、またデッサン帳を開く。そしてまた、どうやって彼女の絵を描こうものかと悩んでいる。

そうやってうんうんと悩んでいる僕の前途を笑ったのか、あるいは祝福しているのかは分からなかったけれど、右耳につけている月型のイヤリングが少し揺れて、カチンと鳴った。

ストーリーテラーの独り言【2】

第一のお話、いかがでしたでしょうか。

とか取り澄ましてみたはいいけどさー。

なんていうか……「原作破壊？」

しー、そういうご意見はお口にチャックということで（ああ、こんなこと言いたくないのに、矢車が！）。作者本人もひどく反省してますので、なにとぞご寛恕のほどを。

はい皆さん、第一夜のこととはスッパリと忘れてねー！！

さて、気を取り直しまして第二夜は小学生の恋のお話。

同じクラスの「華子ちゃん」に恋をしている「ぼく」。通学路沿いの家で「華子ちゃん」にお似合いの花を見つけた「ぼく」は、その花を摘み取ってしまう。もちろん、その花を育てていたおばあさんに追われることになって、おいかっこを繰り広げる……っという、お話。

モチーフになっているのは、7thアルバム『インディゴ地平線』収録「花泥棒」。

ロックな疾走感あふれた短い曲。でも、その短い中に男の子って生き物の刹那的感情の悲哀が溢れているそうよ。なお、ボーカル・

草野正宗が歌っているバージョンが世に出回っているバージョンだけれど、ギター・三輪テツヤが歌う「テツヤde花泥棒」ってバージョンもある……そうですよ（もう、あたしには何が何だか分からない！）。

では、どうぞ。

ストーリーテラーの独り言【2】（後書き）

どうでもいいけど、あたしの言葉の前後にある「」、あれは投稿文字数の関係でソニーニューしてるんだって。読みにくいかもしれないけど、許してね。byストーリーテラー

第二夜「僕は花泥棒」

頬をかすめる風が気持ち良かった。後ろに流れていく通学路も、なんだか新鮮だった。

花泥棒！ 花泥棒！

ぼくが道を駆け抜けけると、往来の人達は皆ぼくにその声をかけた。うるせー、はなドロボウじゃないやい！ と叫ぼうとして後ろを振り返ると、まだひいひい言いながらおばあさんがぼくを追いかけてきていた。

「まっま、待てええい」

杖を振り上げながら僕を追いかけるおばあさんは、もはや妖怪・ジエツトババアだった。

後ろを振り返るのを止めた僕は、ただただひたすらに走った。ランドセルが重いけど、でもぼくは走った。カタカタとランドセル内の筆箱が鳴っている。その音が、僕の足音と重なって、変なハーモニ―を作り出していた。

たったったったったったった。

走る。ありったけの力で。力尽きるまで。

右手には、とてつもなくキレイな花が一輪。この花を、華子ちゃんにプレゼントするんだ！ と、大きな花びらを眺めながら、ぼくは心の中で決意を新たにす。

僕の足音は、さらに小刻みになってゆく。

たたたたたたたたたた。

ふと後ろを振り返った。後ろでは、おばあさんが地面にへたり込んでいた。杖を頭の上で振り回しながら「まままま、待てええええい」と、まるでコントに出てくるおばあさんのようなしわがれ声を出していた。

すると、そのおばあさんの横に、でぶっちな警察の人が立った。

そして、何か言葉をかけていた。するとあのおばあさんは杖で僕のことを指して、大きく口を動かしていた。杖の指した先、つまりはぼくを見つめた警察官は、僕に向けてその重そうな体を弾ませるようにして近づいてきた。

や、やばい！

おばあさんの次は警官だよ、もう。はなドロボウも楽じゃないや。どうしてこんなことになったのか？　って？　理由はかんたんかつシンプルだ。同じクラスの華子ちゃんのせいだ。華子ちゃんがあまりに可愛すぎるからいけないのだ。クラスの男子の半分は華子ちゃんに恋してる。ぼくももちろん華子ちゃんに恋している一人なわけで、当然他のライバルと差をつけたかったのだ。じゃあ、差をつけるためにどうしたらいい？　決まってる。

プレゼント！

でも、ぼくにはお金がない。一日百円のお小遣いじゃあ、ユビワなんて夢のまた夢。それに、その百円は少年ジャパンと駄菓子のためのお金なのだ。

ジバラを切るのもアレだし、かといっていいプレゼントないかなあ、と、帰り道でうむむむ、と唸っていると、通学路沿いの家の花壇にキレイな花を見つけた。赤くてすらつとしていて、キレイな花だった。

華子ちゃんみたいだ。

そう心の中でつぶやいた瞬間には、その花の茎を折ってしまっていた。そして、彼女にプレゼントするんだ！　と心に決めちゃった。

その瞬間に、突然ぼくの背中に「コラっ！」という声が届いた。それが、その家の家主のおばあさんだったのだ。でも、ぼくは反射的に逃げちゃった。そのせいで、今さっきのような“小学生vsおばあさん”チェイスがカイサイされていたのだ。

そうしてぼくは、花泥棒！　とウシロユビを指されながら走り回っているのだ。

「待て！ 少年！ 花泥棒は立派な犯罪なんだぞう！ 本官としては、君を逮捕したくないんだ！ 今ここで止まるんなら叱つたりもしないから！」

おばあさんとバトンタッチしたでぶつちよ警官は、そんな甘いことを言つてぼくの足を止めようとしているようだった。でも、甘いっつか、そんな言葉、くそつたれだ。

ぼくは走りながら叫んだ。

「この花をあの子にプレゼント出来たら、それがジンサーだ！」

「じ、じんせい……」

ぼくの後ろを走る警官は、呆れたような声を出していた。

必死で足を動かしながら、ぼくは考える。今日は華子ちゃん、掃除当番だったから、きっとこのまま学校に向かえば彼女に会える。それまで警官に捕まらなければ、それでいい。

しばらく走つて、ようやく学校近くまでやってきた頃、ようやく華子ちゃんと出くわした。華子ちゃんはいつものように女の子グループの中心にいて、にこにこ笑顔を振りまいていた。うーん、かわええ。

華子ちゃんの姿を発見した僕は、さらに足を強く踏み出した。もう、自分の足音も聞こえなかった。頬を抜ける風切り音が強すぎて、何も聞こえないのだ。ぼくの目には、華子ちゃんしか見えなかった。他の女の子は良くて背景、運が悪ければ空気でしかない。僕の視界には、彼女の笑顔しかなかった。

ぼくは彼女の前でざざーっと急停止した。華子ちゃんの顔を見るのが恥ずかしかったから、下を向いて両手で花を差し出した。

「受け取って！」

下を向きながら、僕は言った。すると、ぼくの手に暖かい感触が伝わったかと思うと、次の瞬間には両手から花がずっと抜き取られた。

「ありがとう」

まるで、天使のような声が響いた。思わず泣きそうだった。でも、

涙をこらえて華子ちゃんの顔を見つめた……。

はずだったのだけれど、ぼくの前にいたのは、華子ちゃんではなかった。華子ちゃんの友達の一人、“ブル藤田”だった。そんなあだ名がついていることから分かる通り、華子ちゃんとは似ても似つかないガタイと性格を誇る。男子から、あまりのガサツぶりに恐れられている子だ。言うなれば、サ。エさんの。沢さんみたいなポジシヨンか。そのブル藤田の後ろで、華子ちゃんにはにこにここと笑っていた。

ちーん。終わった。しかも、ブル藤田が、ぼくの方に熱視線をくれてるし。夢か何かだと思いたかった。

そんな頃、ようやくでぶっちょ警官がぼくに追いついてきた。ほかにびっしりと脂汗をかいていた。

「はあはあ……。少年、足速いな……。って、あれ」

どうやら、警官もぼくの置かれているジョーキーが分かったらしかった。ぼくと華子ちゃん、ブル藤田の顔を見比べている。華子ちゃんたちがぼくをよけて下校していくのを見送ったあとで、でぶっちょ警官は僕に言った。

「……おばあさんに、謝りに行こうか。少年」
「うん」

力なく、僕は首をコクンと動かした。

ストーリーテラーの独り言【3】

第二夜、いかがでした？

なんていうか、酷いオチよね。読者様を馬鹿にしてるとしか思えない。あとで矢車を叱っておくから、何卒。なにこそ

ああ、そうそう。ラストの一文で、主人公の一人称が「僕」になっているのは誤植じゃないらしいわよ。……って、この蛇足、何たる野暮かしら！

第三夜は、宇宙のお話。

宇宙の果てを飛ぶ、意識ある宇宙船「宇宙虫」。そして、その「宇宙虫」に密航した男のお話。SF的なお話だけど、あんまりSFとしてのセンスオブワンダーはないと思う（ボソッ）。

モチーフになったのは、アルバム『隼』収録「宇宙虫」。

インストウルメンタル曲。題名の通り、宇宙を行く虫のように、混沌としつつもどこかへ流動していく印象を聞き手に与える曲。…

…らしいわよ（最早なげやり）。

では、どうぞ。

第三夜「宇宙の涯まで」【1】

ここには、時間なる概念が存在しない。なぜなら、時間なる概念は、他との関わりの中で意味合いを持つものだからだ。“時間”というのは、異なる意識を持つているもの同士が持ち出す物差しではない。

また、ここには声という概念も存在しない。なぜなら、声という概念もまた、他との関わりの中で意味合いを持つものだからだ。声というのは、結局のところ聞き手を必ず想定する。だが、私は私自身に向けた言葉（人間はそれを独り言と呼ぶ）を放つほど非効率に出来ていない。

それに、私の耳は外に向かっている。

私の耳は、幾万光年向こうから響いてくる紫外線や赤外線を受け取るためにある。それは“目”と言い換えてもいいのだが、私の電脳に情報が入ってくる瞬間には、赤外線や紫外線は“音”として認識される。私のモノアイから見つめられた光景は地球に送られて人間の目に写るため、私の目は可視光線しか認識しない。可視光以外の光線は、映像以外のデータとして送られる。紫外線や赤外線を私が認識する際には“音”として認識される。その音がどういったイメージを紡ぐものなのか、それは私には分からない。丁度、暗号文を飛ばす無線機のようなものだ。一方から受け取った暗号の意味は、無線機には分からない。でも、それらの無意味に見える羅列をどこかに送る。そして、送った先にあるエニグマ暗号機によって、ようやく暗号は解かれる。けれど、その暗号を仲介した無線機は永遠にその暗号の中身を知ることはない。

私のモノアイに、見慣れた惑星の映像が飛び込んできた。

一瞬にて、私の電脳に打ち込まれたデータが飛び出してくる。「火星」。月の次に人類が目指したフロンティア。けれど、月ほどには人々の夢をかき立てなかったらしい。私の電脳に打ち込まれたデ

「タによると、人類は国家的な意思で以て月に到達した。アメリカとソ連。並び立たぬ両雄が、どんぐりの背比べにも似た不毛な戦いを繰り広げた。そしてその不毛なエネルギーが人類を月にまで押し上げた。しかし、そのどんぐりの背比べにも終わりがやってきて、超大国が宇宙に興味を抱く時代は終わった。『歴史にもしもはないが』という言葉は歴史家がかねがね口にしている前口上だが、もしも大国間の緊張が現在まで続いていたら、おそらく人類は海王星にも立っていたことだろう。そして、その栄光を一身に受けた人類は、己の属している国の旗を地表に差し、領有権を暗に主張したのだろう。だが、そういった時代は終わった。」

宇宙に覇権を見出さなくなった人類たちは、次に宇宙を好奇の目で見始めた。いや、宇宙に覇権を見ていた時代ですらも、宇宙に好奇の目を向けていた者は多かったらしい。「覇権主義」という重石が取れてしまったことで、表出してきた傾向なのだろう。……だが、覇権主義を経て人間の間に残ったのは宇宙に対する何とない関心だった。「宇宙って、どうなっているんだろう?」「宇宙にはどういう天体があるのだろう」のような、きわめてあやふやな宇宙へのあこがれが宇宙へ向けられたまなざしだった。確かに宇宙に興味を持つものは多かったらしい。けれど、かつて人類を月に送り出すほどの力は望むべくもなかった。人類を月に送り出したのは結局「興味」とは意を異にする概念だったのだ。

私は、火星をモノアイの端に写しながら、心の中でため息をついた。

人間とは、なんと即物的なものなのだろう。

火星。それは人類が月の次に夢を見出した天体。けれど、その夢が人類の総意とならなかったというただそれだけのために、夢から打ち捨てられた天体。紅く美しいその天体は、私のことを呼んでいるようだった。しかし、私はその天体を素通りする。人間が興味を持たなくなったもの、それは私にとっても興味の対象ではないし、対象としてはいけないものだ。そういう風に私は出来ている。

私は宇宙探査船である。

宇宙探査船、というのは譬えではない。私の知覚は宇宙を行く漆黒の宇宙船にあまなく張り巡らされている。私の知覚はすべて、宇宙船の“外皮”や内部と繋がっている。私にとって宇宙船は体そのものののだ。

人間は私をこう呼んだ。“宇宙虫”と。

人間という生き物は、どこかシステムティックに徹しきれない部分があるようだ。宇宙を飛ぶであろう私を、人間たちは虫にたとえた。その理由は分からない。羽音を立てて飛ぶ虫と、宇宙を粛々と運行する探査船を同列に語ろうとするその思考システムがよく分からない。ただ、何にしろ人間は私のことを“宇宙虫”と呼び、そして私は“宇宙虫”と呼ばれることに慣れてしまっている、ということだ。

電脳に刻み込まれたデータによると、私に課せられた任務は二つ。一つは外惑星の簡単な調査。人間は未だ木星にも達していなかった。そのくせ、人間の興味は太陽系のはるか外に向いていた。そのせいで、惑星に関する情報が欠乏していたのだ。

しかし、ただそれだけの任務だったならば、私は自我を持たされなかったらう。

私が自我を持っているという事実と、もう一つの任務には密接な関係がある。

しかし、もう一つの任務を考えると、私はいつも憂鬱になる。果たして、私にもう一つの任務を果たすことができるのだろうか、と。その任務は、私の能力とは関係のないところで首尾が決まってしまう。人間が信じている超越的な存在（人はそれを神と呼ぶ）を仮定しなければ、おそらく果たせない任務だろう。おそらく人間はその超越的な存在の加護を当て込んだか、あるいは夢を追ったのか、その無謀な任務を私に与えた。そして私は、その無謀な任務を与えられて呆然とするばかりだ。

そうやって火星を抜けたころ、私の意識に変化があった。

宇宙船の外についているモノアイの映像が切り替わった。そして、私の電脳には、別の映像が入り込んできた。

その映像は、無限に続きそうな闇を映しだしていた。もしやと思い、辺りを見渡そうとする。その瞬間、電脳に存在する“擬体用”の回路が活性化したのが分かった。前にある扉のようなもの。その扉を手で開いた（つまり、この時点で私には“腕”が存在したわけだ）。

ようやく辺りに光が差し、私は自分の“体”を観察した。

長い足。五本の指を持つ腕。胸。そして、さっきまでより明らかに可動性のいいモノアイ。間違いない、私の意識が“擬体”に移されたのだ。

“擬体”というのは、私が持っているもう一つの体である。私の本体はあくまで宇宙を行く探査船“宇宙虫”だ。しかし、もう一つの任務のために私はもう一つの体を持っている。人間のように手足を持ち、人間のようなフォルムをして、人間のような上背をした体。これはつまり、私の身にもう一つの任務が発生したことを意味している。しかし、私にあるのは混乱だけだった。……なぜ、こんなところで？

ここはまだ、人類の英知が及ぶ場所だ。ここにおいて、もう一つの任務が発生するとはとても思えなかった。

もしかすると、“本体”の故障なのか。

私がこう推論を立てているころ、私の電脳に信号が走った。その信号は痛みとともに私の電脳に響いた。そして、体の一部を失ってしまったかのような喪失感を共に得た。事実、私は失ってしまった。その信号が伝えていたもの、それは地球との通信に使っていた通信装置がすべて故障してしまった、という事実だった。

そして次に私に届いたのは、“来客用空調が動いている”という事実だった。だが、それは推論において既に予想済みだった。私がこうして“擬体”に意識が移っているということは、すなわち探査船の中に誰かが入ったという証明に他ならないのだから。いや、“

誰かが入った”という表現はあまり正しくない。恐らくのところ、地球から何者かが忍び込んでいたのだろう。それが証拠に、私の脳には“さきほどまでネットワークの一部に偽装があったものと認められる”という信号が通っていた。つまり、何者かが私の電腦の一部に麻酔をかけ、私に忍び込んだのだ。しかし、ここまで考えて、私には疑問が浮かんた。

何のために？

探査船に乗り込むインセンティブなど、あろうはずもない。

だが、次の瞬間に、私は考えるという作業を放擲した。

推論はいくらでも立てることは出来る。だが、あまりに情報が少ない。情報が少なすぎる推論には、常に予測が入り混じる。その予測の幅が広ければ広すぎるほど、事実から大きく離れた推論となってしまう。以前、“宇宙に地球と同じような環境を持つ星はいくつあるのか？”という命題に挑んだ科学者がいたという。その科学者は推論に推論を重ね、それでも科学的に出した結論が、“零乃^{ゼロないし}至数百万”だった。その科学者は、予測の幅を狭めるようなカードを一切持っていなかったのだ。

その科学者のような轍を踏むわけにはいかない。

私は“擬体”を動かして、探査船の中を歩いた。

探査船の中にある居住スペースは、さほど広くはない。それは当然で、探査船としての第一義を果たすために、使つか使われないか分からぬような施設は小さめに作られている。とはいっても、その使用目的上、人が数人暮らせる程度の広さはある。

そのスペースに、彼はいた。

私を驚きの目でなく、かといって喜びの目でなく、もっと別の精神的傾向（人間はそれを感情と呼ぶ）で以て私のことを見つめる男だった。どう見ても、地球人だった。

その地球人は私に向いた。

「ああ、来たか」

恐ろしく伸びのある声だった。しかし、その声帯のゆらぎの中に、

妙な不協和音が混じっているのを私は見逃さなかった。

私のことを知っているのか？ 少々混乱しつつも、鎌をかける意味もあって用意されていたファーストコンタクトの際に使われるはずの言葉を紡ぎ出した。

「私は、探査船・宇宙虫。正確には、その“擬体”」

すると、男は恐れの目を私に向けながら続ける。

「知っている」

この男、明らかに擬体を知っている？ この事実が、私をひどく混乱させた。

この探査船に擬体が搭載されているという事実は、あまり知られていない。私を宇宙の果てに向かって打ちだしたプロジェクトチームに参加していた科学者たちと、その周辺に屯していた上席の技術者たち、あとは少数の政治家たち程度のものだ。なぜかと言えば、擬体が載せられている理由というものが、極めて微妙な理由によるからでもあるし、宇宙開発が世間の耳目をさほど集めていないというのもその理由だった。

第三夜「宇宙の涯まで」【2】

ともかく、今私の目の前にいる男は、そんな少数の人間しか知りえないことを知っている。

なぜ？

私の疑問に答えるかのように、男は言った。

「私は、お前の顔を作った技術者なのだ」

え？ 私は、自分の頭部を指で触った。

「お前の擬体、そのフォルムを設計したのだ。つまり、私はお前の親の一人だな」

親。人間に造られし私には存在しないはずの概念。

自己紹介を受けてもなお、私には分からなかった。

その男の素性は何となくわかった。つまるところ、彼は探査船プロジェクトに参加していた上席の技術者なのだ。私の擬体を設計するくらいなのだから、相当の役職にある技術者だったに違いない。

だが、私には、肝心なことが分からなかった。

なぜ、彼はここにいるのだ？

この探査船の任務には、地球に帰還するという条項は含まれていない。宇宙の果てで朽ち果てようと、私は進まなくてはならない。帰るという選択肢は私に存在しない。

そんな死出の旅に、どうしてこの男は立っているのだ？ と。

どうやら、人間には死を回避する行動シーケンスが刷り込まれているらしい。私には存在しない概念だから共感というものや想像というものが一切できないのだが、それは人間の基本テーゼとして存在しているようだった。その基本テーゼが、この男には欠如しているとも言っただろうか。

男は言った。

「俺は、お前の最後を見届けなくてはならない」
なぜ？ と私は問うた。

すると、男は口の端を少し上げて応じた。

「理由なんてない」

理由もないのになぜ？ と私は問うた。

男は言った。

「いふなれば、恋だ」

恋。私の電腦にない言葉。

悪いが、と男は前置きして、続けた。

「俺は、お前の最後を見届ける。そして、俺は死ぬ」

彼の言わんとすることが、まったく分からなかった。

男は、最初は無言で私の顔を見ているばかりだった。

だが、私がこちらからは何も言わないのを察したのか、口を開くようになった。

俺はNAEDAの研究員、杉山という。専門はロボット工学。今年で42歳になる。NAEDAに入る前には、ある民間企業でロボットの設計を行っていた。だが、たまたまNAEDAに縁あって、最近までで働いていたのだ、と。

NAEDAというのは、私のことを飛ばした組織だ。日本国の宇宙開発に関する技術開発を一手に引き受けている組織。アメリカで言うところのNASAにあたる。つまり、この男・杉山は、相当なエリートということになる。いついかなる時代においても、国家運営に関する任務に従事する人間はエリートということにされている。杉山は、ひどく疲弊していた。メンテナンスをさぼってしまったロボットのよう手足をいびつに曲げ、エネルギー切れ寸前のロボットのよう歩くさまは、杉山の疲弊を如実に感じさせた。

杉山は言った。

「お前は、私の最高傑作なのだ」

彼が言うには、私は彼の最高傑作らしい。

国家的プロジェクト、しかもその中枢にある任務をこなしていた杉山は得意の絶頂だったろう。そして、人間という生き物は、気分

次第でその仕事の質まで変化してしまう。アベレージにものを作れない。それが人間。とにかく、得意の絶頂にあった俺は、己の分を超えた傑作を作り出してしまったのだ、と杉山は言った。

「それがお前なのだ」

杉山は私を指した。

「今まで俺は、さまざまなロボットを設計してきた。掃除ロボット、家庭用ロボット、慰安用ロボットから戦闘用ロボットに至るまで。つまりは、人間が思いつくばかりのロボットを設計してきた。だが、どれも俺の心は震わせなかった。どれも、俺の作り出した作り物に過ぎなかったのだ」

それはそうだろう。私はそう思考した。

どんなものも、製造者と被製造者の二者に分けられる。そういう意味では、杉山といままで杉山が作ってきたロボットたちは、製造者と被製造者の関係でしか語れない。それは当たり前のことだ。それに、人間だってそうだ。親と子。これとて、製造者と被製造者の関係でしかない。

しかし、杉山はこう言った。

「だが、お前だけは違う。お前だけは、俺の分をはるかに超えた傑作なんだ！」

この男、故障している。

私は冷静に男の顔を眺めた。

人間という生き物は、他の生物よりも理を嫌う。他の生物たちは“弱肉強食”“食物連鎖”というテーズの中で、己の立場を定め、その立場に応じたふるまいを常に心がける。捕食者は常に獲物を追い、被捕食者は常に追われる。その生き方に、何の疑問をも差し挟まない。

しかし、人間はその理を嫌う。“弱肉強食”“食物連鎖”のテーズを振り払うために彼らは社会をつくった。そして、その中で己にとって都合のいい系を作り上げた。しかし、その系は人間から“死への恐怖”をも奪ってしまったのではないか。私にはそう思えた。

そして、故障しているならば、話は早い。

私の行動は早かった。

即座に、彼を居住スペースに閉じ込めた。

故障している人間は、手に負えない。故障しているロボットならば修理すれば事足りる。しかし、故障してしまった人間には修理が利かない。しかも、その故障個所が人間にとって一番重要な箇所である“本能”の場合、始末が悪い。話は通じるのにも関わらず、それが行動として表出しないのだから。

余地なし。

そう判断した私は、彼を隔離した。

彼は最初扉を叩いていたが、そのうち静かになった。

だが、困ったことになった。

あの人間をどうすべきか、判断に困ったのだ。今から地球に戻る？ バカな。地球に戻る。そんなことをすれば、地球の重力を振り払うために用いられたエネルギーが徒労と化す。それに、私には戻るべきか否かを決める権限はない。本来ならば、通信機を用いて地球側に意見を伺えばいいのだが、通信機はすべて故障している（いや、正確には杉山によって破壊されていた）。

だが、その件は他ならぬ杉山が解決してくれた。

扉越しに意見を聞くと、杉山はこう言った。

「誰も、俺のことなど覚えていない。覚えている奴がいたとしても、まさかこの船に乗っているなどとは夢にも思っまい。……このまま、宇宙の海に向かうがいい」。

どこか投げ遣りで他人事な彼の言葉だったが、私は訊いた。

「あなたの命令一つで、私は地球に目的地を変更する用意があります」。

その言葉は本当だった。昔のSF作家が考え出した、そして私たちロボットに実装されている行動シーケンスにも、“人間の意志を尊重する”ことがロボットの存在理由だと明言されている。つまり、

いかに相手が故障していても、相手が人間である限り、私はその命令を聞く義務が生じる（正確には、“他の人間を傷つけない限りにおいて”という前提はつくのだが）。

だが、彼は言った。

「言つたろう。俺はお前の最後を見る」。

故障した彼は、はつきりと言いつつ放った。

彼がいくら故障していようと、人間であることに変わりはない。

そして、彼の言葉が仮にひどく論理性を欠くものであったとしても、それが他の人間に危害を加える性質のものでない限り、私はその命令に従う義務が生じる。つまり私は、彼を連れて外宇宙に向かう決心をしたということだった。

そして、これ以上に困ったことがあった。

“擬体”から、意識が“本体”に戻らないのだ。

これは、設計段階の問題らしかった。どうやら、「居住スペースに誰かが入る」という条件で以て、私の意識が“擬体”に移ったらしかった。確かに、本来の目的で言えばそれは正しい。だが、今回の場合は困ったことになった。彼がああ居住スペースにいる以上、私の意識は“本体”の探查船に戻らないらしい。

操縦等に関しては一切の問題はない。だが、むしろ問題となるのは、私の時間の感じ方だ。

“本体”に意識があるときには、時間はものすごく速く流れる。一時間を、一秒程度の体感で以て感じていた。これは、ほとんど永遠とも言える時間に漕ぎ出したロボットに対する恩寵とも取れるし、一方で電腦に負担を掛けないためのきわめて実利的な措置ともいえる。そもそも、時間という概念は、他との接触において感じるものだ。そもそも他と接触していなかった私には、ほとんど“時間”という意識はなかった。

だが、“擬体”に意識がある時は違う。人間とほぼ同じ体感時間なのだ。それは、私に課せられた任務とも無関係ではないのだから仕方がないが。

第三夜「宇宙の涯まで」【完結】

永遠に近いような時間。それを、如何に過ごすべきか。

そして、困ったことに、活性化した私の電腦は、何か刺激を求めていた。仕方がないのだ。私は、そういう風に出て来ているのだ。“擬体”に意識が移ったときには、誰かと話す時なのだから。

結局、私と杉山が言葉を交わすのは、定められたことだったのだ。

何日かぶりに扉を開いてみると、彼は窓の外に視線をやっていた。窓の外には大きい輪を抱えて浮いている土星の姿が見てとれた。その土星の姿を、彼はまるで初めて魚を見た熊のように見やっていた。

「土星が、珍しいのですか」

その私の言葉に、杉山は振り返った。

「開けてくれたのか、ドアを」

「ええ」私は彼の座る卓の差向いに座り、窓を眺めた。「あなたのせいで、暇なのです」

「そうなのか」

「はい」

しばし、無言が滑り込んだ。だが、それを嫌ったのか、杉山は部屋の隅を指した。

「まさか、トイレがあるとは思わなかった」

「トイレ？ ああ、排泄施設ですね、当然です」

「でも、食品に関する施設が一切ない」

その彼の不満に私は応じた。

「当然です。ここは“居住スペース”と名前が付いていますが、居住を目的としたスペースではないからです」

彼は口の端を上げた。この表情をするとき、人間は嬉しい気分であるか、あるいは己の余裕を周りに誇示するときのどちらかだとい

う。

彼は言った。

「知っている。ここは、応接間と言った方が正しいのだろう?」

「なぜ、それを?」

なぜ、と言われても、と彼は前置きしてから続けた。視線はあくまで土星に向かったままだった。「宇宙虫、君のもう一つの目的、俺が知らないとしても?」

そうだった。杉山は私の目的を知っている。

杉山は続けた。

「外宇宙にいるかもしれない、人類以外の知的生物と接触すべく宇宙に飛ばされた、それがお前だ」

そう。

私のような人工知能がこうやって探査船に乗っているのは、もう一つの任務があるからだ。その任務とは、“宇宙のどこかにいるだろう知的生物に、人類の存在を知らしめる”というものだった。昔、同目的の元に人類の姿を書かれた金属板を乗せた探査船が外宇宙に飛び出して行ったらしいが、私はまさにその焼き直しに過ぎないのだ。ただ、その先達の場合、探査船を外宇宙に放り捨てるに等しいような計画だった。それこそ、太平洋に手紙入りの壇びんを浮かべ、それを拾ってもらうような計画だった。だが、今回の計画は全く違う。その探査船に人工知能を積んで、知的生物が存在する可能性が高そうな惑星を選定する。そして、選定された惑星のさらなる情報を集め、知的生物の発見したものを発見する。そうして、知的生物と接触を図る。以前のような「太平洋に云々」ではなく、もう少しは知的生物に出会えそうな計画だった。

「そして」杉山は部屋を見渡した。「この部屋は、お前と知的生物が会談を行うためにしつらえられた部屋なのだろう? 確かに、それならばトイレがあって食品置き場がない訳が分かる」

「ところで」私は切り出した。「食品を、あなたはお持ちなのですか」

「持っている」、と彼は言った。「あと、1カ月分くらいか」

1ヶ月。絶望的だ。この男は馬鹿なのか、と思った。いや、やはり故障しているに違いない、と考え直した。この男は、死ぬ。必ず死ぬ。というのに、まるでその終末を恐れていないようだった。なぜ？

そんな私の思考を読む様子もなく、彼は言った。

「なんとしても、お前の最後を見てやるからな」

私にとっては、理解不能な思考シーケンスだった。

だが、私は毎日のように杉山と話した。

別に理由はない。強いて理由を挙げるならば、暇だったからという一点に過ぎなかった。おそらく、“本体”に意識が在るときだったならば、わずか数日程度にしか感じなかったのだろう道のりに、私はとにかく辟易していた。そしてそれは、杉山がここに居続ける限り続く。ならば、如何に故障した人間と言えど、コミュニケーションを図って暇つぶしとした方が効率的だった。

杉山は、きわめて能弁だった。

「俺は、××大のロボット工学科を首席で卒業した……」

「俺は、権威あるロボット工学の賞、“アシモフ賞”を史上最年少で受賞したのだ」

「俺は、NAEDAの研究者のなかでも……」

彼の言葉は常にこのような性質のものだった。まったく体系的でなくて、「 $A \parallel B$ 」や「 $A \neq B$ 」のような図式で表わすことが出来てしまうような簡単な言葉たちだった。

しかし、彼の言葉を私の中でまとめたところ、こういう人生らしい。

彼は42年前、日本の東京にて生まれた。アップルパイを作るのが趣味の母親と、ラジコンカーを走らせるのが好きな父親の間に生まれたらしい。幼くして学問を修めることに異様な興味を示す子供だったらしい。親は必ずしも教育熱心というわけでもなかったが、

子供が学問の道を望むなら、と先行投資を渋らなかった。その結果、彼は日本でも有数の大学を首席で卒業、その大学院に残った。その後、大学院で研究した事案が画期的だったこともあり、ロボット研究の権威ある賞“アシモフ賞”を受賞した。院を出た後の彼には研究者としての道もあったという。だが、彼はその道に進まず、企業人としての道に進んだ。そして、現在はN A E D Aの技術者になっているのだという。

ここまで彼のことを聞いて、私には疑問が浮かんた。

彼の言葉には、ムラがある。

院を出てからの彼の人生、それを彼はあまり語っていない。そのせいで、私の頭の中で構成された彼のクロニクルはいびつなものになっている。彼がピースを一切私にくれないせいで、彼の社会人としての人生が全く見えてこない。そこには確かに杉山という人間の十数年があるはずなのに、まるで見えてこない。

きっと、杉山にも、語りたくないことがあるのだろう。「人間の望まないことを強いけない」というのも、我々ロボットに刻み込まれている枷なのだ。

そういえば、彼は私の顔をじっと見つめることがあった。

まるで遠い昔を見つめているかのような。あるいは、私の背後にある何かを見極めようとしているかのような。しかし、その視線がどういった性質のものなのかは分からなかった。そもそも、私には理解ということができないように出来ているのかもしれない。

そうして、いとも容易く一カ月が経ってしまった。

「活動を、停止するのですか」

私は訊いた。

「ああ」

彼は頷いた。けれど、その動きはどこまでも虚ろだった。

一か月前と比して、彼は相当に痩せこけてしまっていた。もうきつと、彼は一週間以上何も飲んでいないし食べてもいない。でも、

私にはどうすることもできなかったし、どうにかしようとさえしなかった。どこか、この結末を望んでいたような気さえしていた。

私は言った。

「本来ならば、あなたの命をなんとしてもお救いするべきなのでしょう。でも、私はそのような力を持ち合わせていません。お諦めください」

彼は言った。

「安心しろ。とうの昔に諦めている」

「そうですか」

彼の命の灯は、どんどん小さくなっていた。それは、命を持たない私からあつても分かった。だからこそ、私には不思議だった。この結末は明らかだったのに、なぜ彼はこの結末を回避しようとしなかったのだろうか、と。本来だったら、この質問はしてはいけないものだっただろう。私はロボットだ。ロボットである私が、人間の意図を問い質すなど、僭越以外の何物でもない。

しかし、私は訊いていた。

「なぜ？ あなたは死ぬのですか？ いいえ、どうしてあなたは死を回避しなかったのですか？ もし、あなたがこの船に忍び込まなかったら、もつと長く生きることができたはずですよ。にもかかわらず、なぜあなたは」

彼は、その言葉を手で制した。

「言っただけだ。俺は、お前に恋をしていたのだ」

恋。意味の分からない言葉。

杉山はふうと息を吐いた。

「卓の上に、手紙がある」

「手紙、ですか」

「お前宛の、手紙だ」

「私宛？」

「お前、字は読めるのだろうか？ 確か、全言語を翻訳できるはずだな」

「いいえ。正確には、言語と呼びうるものすべてを翻訳可能です」
杉山は笑った。

「ならば、俺が死んでから、読んでくれ」
「わかりました」

そのやりとりから数日後、彼は死んだ。彼が書いたという手紙は、彼の死を冷酷に見遣っていた。

だが、私はまだ、その手紙を読んでいない。

なぜならば、彼が死んだその瞬間に、私の意識が“本体”に戻ったからだ。つまり、彼が死んで“物”と認識されたことで、“擬体”から“本体”に意識が戻ったのだ。

だが、もし、私の意識が“擬体”にあったとしても、その手紙を読むことがあったろうか、と疑問になることがある。いや、正確には、彼の言葉の意味が理解できたのだろうか、と私は思う。きっと、あの手紙には、彼の言葉で私の疑問への答えが書いてあるに違いない。そして、彼が話さなかった、社会人としての人生が書かれているに違いない。だが、それを私は理解できないはずだ。

彼は、私の脳にない言葉で、己の立ち位置を表現した。

「いふなれば、恋だ」

その、“恋”なる言葉が理解できない以上、私と彼は永遠に分かり合えないのかもしれない。そして、そのままで彼の手紙を読んだところで、私は彼の言葉の上っ面をなぞることしかできないはずだ。

だから、私は永遠に近い時間の中で、考え続ける。

彼が、私に向けていた感情、それがどういう感情だったのか。

私は、宇宙虫。

遠い星から響く音に耳を傾けながら、時折思う。

私の腹の中で朽ちてゆく人間の想いを。そして、その朽ちてゆく人間の横に佇む手紙に書かれているものが何なのかを。

永遠に近いような時間の中で、私は考え続ける。

いつか、私にも分かる時が来るのだろうか。

いつか彼の手紙を読んだときに、私は彼のことを想えるのだろうか。

そして、いつの日かどこまでも続く漆黒の海を抜け、どこかにいるかもしれない知的生物と会談したときに、骸となった彼のことを物語ることが出来るのだろうか。

そんなことをつらつらと考えつつ、私は紺色の海を超えてゆく。

ストーリーテラーの独り言【4】

第三夜、いかがでしたでしょうか。

なんていうか、矢車の書くSFって、「どこがSF!？」よね。
こっぴつを下手の横好きとか言うのよね。自重してほしいもんだわ。

さて、第四夜は……。って、あれ？

どどど、どうなってるのよ、矢車！ え？ なんですって？

しばしお待ちください……

ええとですね……第四話に予定していたお話なんですけどね。作者の事情により、発表しないとのことですよ。

「どういふことだ！」ですって？ ……いや、それが……あたしにも教えてくれないの。どうしたんだろ。普段は失敗作でもきちんと発表する（ハタ迷惑な）作者なのに……？

そんなわけで、第四話は欠番扱いです。なんだか、ウルトラセブンの十二話みたいでかっこいいわね……って、このネタが通じるか大いに疑問だけど。

筋なんかはお話できないので、一応モチーフになった曲だけ紹介しておくわ。

モチーフになったのは3rdアルバム『惑星のかけら』収録「リコ

シエ号」。

サイバーなシンセ音の響きと、どこか懐かしいギターサウンドが見事に融合した（ほぼ）インストウルメンタル曲。表記はないけどサビ部分で歌詞があるので、厳密にはインストウルメンタルとはいえないらしい（何度も言うけど、スピッツに詳しいのは矢車なのよ！）わよ。

ともかく、欠番になった第四夜は放っておいて、第五夜に行きましよう。

第五夜は同棲カップルの話。

深夜、テレビを見ている「僕」。その「僕」に、「彼女」が「暇だ暇だ」と「僕」にすぎる。そこで、二人して「死神の岬」と呼ばれる岬までドライブすることになったのだけれど……。

モチーフになったのは1stアルバム『スピッツ』収録「死神の岬へ」。

明るくて牧歌的な曲調なのに、歌詞がどこか後ろ向き。初期のスピッツが持っていた、「社会に溶け込めない心情」を歌った曲。らしいわ（以下略）。

では、どうぞ。

第五夜「再生世界」【1】

保安官が銃を抜いた。

だが、それよりも一瞬早く銃を引き抜いた我らが「J」が、ホルスターから抜けかかっていた保安官の銃をぶち抜いた。弾き飛ばされた保安官の拳銃は、アメリカ西部の荒涼とした大地に落ちて独楽のように回る。けれど、己の銃が弾き飛ばされたなど夢にも思っていない保安官は、ふと自分の右手を眺めて小首を傾げた。その保安官の顔が怪訝な色から恐怖の色に染まった瞬間に、保安官の眉間から赤いものが飛び出た。何が何だか分からない、といった風に目を泳がせる保安官がフレームから脱落して、大写しになったのは我らがヒーロー、「J」の雄姿だった。

「J」は、テンガロンハットをかぶり直して、ニヒルに笑った。そして、何か言葉を言おうと、口を開いた……。

と、ここでテレビの電源が突然切れた。バチン、と、まるで目の前で扉が閉められるかのように。

「ねえ、こんなの面白い？」

僕の後ろから声が届いた。

その背後からの声に、僕は振り返らなかった。そして、出来るだけ平静を装って答える。

「うん、面白いんだけどな、西部劇」

「でもさあ」その声はつまらなそうに続ける。「音を消して見るなんて、ものすごい変わり者よね」

「そうかな」僕は反論した。「西部劇の銃声って、なんだか嘘臭くないかなあ？　なんだかいやに音が高いし。もっと腹の底に響きそうな音がしそうなもんだけど。……リアル志向なら、音を消す方が楽しいよ」

僕の背後で、彼女が動く気配があった。

まるでカバが歯ぎしりしたときのような、ギリツという軋み音が

響いた。きっと、彼女が座っていたイスが鳴らした音だろう。そして、水気を含んだスポンジを思いつき踏みつけるような音がそれに続く。きっとその音は、畳の上を密やかに歩く音だ。そして、その足音がやがて僕の横で止まった。

「っていうかさ」頭上から、彼女の声が降り注いだ。「やっぱり、アンタって変だよな」

「何が？」

彼女のほうを見ずに、僕は訊く。でも、彼女は特にそんな僕の態度を咎めたりはしなかったし、きっとこれからもしないのだろう。彼女は言った。

「まずさ、どうしてテレビを見る時に電気を消すのよ」

そう言って、彼女は蛍光灯から垂れる糸を引っ張った。瞬間、ぱあつと僕の部屋の輪郭たちが現れた。天使の輪のような蛍光灯。そして、その蛍光灯を守る傘。そんな蛍光灯の下には、わずか六畳一間の僕の部屋があのままの姿で存在した。読みかけの漫画が山のように置かれていて、その横には携帯ゲーム機本体とソフトが乱雑に置かれている。その奥にはベッドと形容した方がいいのか、それとも高床と古風な言い方をした方が適当なのかよく分からないベッドが置かれていて、その脇には意味ありげに目ざまし時計が佇んでいた。真夜中にわざわざ電気で照らすような御大層な部屋でないのは言つまでもない。

僕は手短に答えた。

「だって“夜に電気を消す”のは人間として当然のマナーじゃないの？」

その言葉を、彼女は笑い飛ばした。

「だったら、夜更かしなんかしなければいいんじゃないの？」

彼女は僕の横にどっかりと座った。そして、彼女は僕の顔を覗き込んだ。まるで小さくて白いアクリルのような眼をした彼女の目が、僕のことを捉える。

僕は彼女の目に見とれながら続ける。

「“夜に電気を消す”のは人間として当然のルールだけど、“夜更かしをしちゃいけない”ってルールはないもの」

その言葉に、彼女は「ハッ」と短く笑う。

「変なの」

彼女はまた立ちあがって、蛍光灯の紐を何度か引いた。すると、部屋にまた闇が戻ってきた。見るのも嫌になるような僕の部屋も、闇に沈む。僕の体の輪郭も彼女の黒い瞳も闇に沈む。全てが溶け合っ
つて、真黒だった。

その闇の中で僕の横に座った彼女は、僕に体を摺り寄せてきた。

「でも、大好き」

彼女は僕の腕に、マシユマロのような感触の腕をからめてきた。

「大好きはいいからさ、テレビをつけてくれない？」

僕がそう言うと、彼女は明らかに機嫌が悪そうに言葉を返した。

「はいはい、わかりましたよー。もう、スパゲティ・ウエスタンオタク！」

そう吐き捨てて、彼女はテレビをつけた。僕に腕をからめたままだから、きつとりリモコンで操作したのだろう。実は彼女の言う“スパゲティ・ウエスタン”というのは“マカロニ・ウエスタン”の言い間違いなのだけれど、リモコンを持っている彼女を刺激するのもバカバカしいので、あえて何も言わないことにする。

テレビの中のＪＪは、絶体絶命だった。さっき保安官の脳天をぶち抜いたのがまずかったのか、強面で屈強な保安官に囲まれている長い巻煙草を燻らせながら、ＪＪは苦笑いを浮かべる。

けれど、西部劇におけるアンチヒーロー、“アウトローオブアウトローズ”の異名をひっさげたＪＪが保安官ごときにやられるはずはなく、一瞬の隙をついたＪＪが銃を抜いた。目ですらＪＪの動きを追えない保安官たち。テレビの中で広がる生死の交錯。次の瞬間には、保安官たちが皆土をなめる羽目になっていた。

「うわあ、うっそくさ」

彼女が僕の横でそう呟く。

「あのさあ、文句を言うなら帰ればいいんだ、もう」

でも、彼女は僕のそんな言葉を聞いてはくれなかった。

「そもそも、女の子をこんな時間に帰らせていいと思ってるの？」

「つか、今何時か分かってる？ 午前3時よ？ 人通りが一番ない

時間なのに、一番犯罪に遭いやすい時間なのよ？ そんな時間に“

帰れ”って、ずいぶんとご挨拶じゃない」

ぐうの音も出ない僕。確かに時計を見ると、午前の三時だった。

窓の外に目をやってみた。全然空は白んでいない。冬も近づこう

かというこの時期、夜が長いのだ。

「それに」

と彼女は言った。

「それに？」

鸚鵡返しに訊く僕。すると彼女は、さっきよりも少し声のトーンを落として続ける。

「だって、ここにしかあたしの居場所、ないもん」

彼女は僕の腕をぎゅっと抱きしめた。まるで、震える子猫を抱えるような要領で。

腕に感じる甘い感触に戸惑いながら、彼女に動悸を聞かれないように息をひそめ、僕はテレビの中の「J」に集中する。「J」はそんな僕を笑うかのようにフレーム前で不敵に笑い、テンガロンハットを直した。

彼女は、変な子だ。

いつのことだったろうか、僕が街を歩いていたときのことだった。その時僕は、何も考えずに道を歩いていた。何をしようと街に出たのかもよく覚えていない。そもそも、“街”というものの、——さらに言えば街にある一般には“楽しい”とされること——、に興味のない僕だから、なんであの日街に出たのか分からない。ともかく、理由は忘れたけれど、僕はそのとき街に出ていた。

そんな僕の前に、彼女は現れた。赤と白のしましま模様で、丈の短いワンピースに黒いブーツ姿という、流行に乗っているのかそれ

とも乗っていないのか釈然としかねる格好だった。でも、そんな目に悪そうな服の配色なんか僕の目には入らなかった。僕の目に入ったのは、彼女の目だった。いつだか図鑑で見た、小さなアリのクイのような眼をしていた。黒目がちなんだけど、不気味さよりもむしろかわいらしさを感じさせるような眼。その双眸に見つめられているだけで、妙な高揚感を覚えた。

出し抜けに、彼女は言い放った。

「ねえ、家に泊めてくれない？」

繰り返すけど、出し抜けにこれだった。普通の人だったら、「ハア!？」と首を傾げたり、「あのなあ、年頃の娘が何を言っているんだ!」と叱りつけるかするだろう。でも、人と話すことさえ久しぶりだった僕は、とにかく戸惑うばかりだった。そんな僕のことをあざ笑うように、彼女は言った。

「決まり! 今日からあなたの家に泊まる!」

そう僕に言い渡して、彼女はパンパンに膨らんだ荷物を僕の目の前にかざした。

あまりに独断的な物言いだったけれど、どうやら僕に拒否権はなかったらしかった。それに、僕はこの時点で彼女に魅せられていたのかもしれない。

彼女は答えた。

「ああ、そうね。名前を名乗るのが筋よね。あたしは――」

テレビを見ながらつい追憶の世界に逃げ込んでいたことに気づいた僕は、ふと彼女の顔を眺めた。

「何? 惚れたか?」

彼女は黒い目を僕に向けながらおどけたことを言う。それを手で振って否定する。

「そんなわけない。……本当に帰るところがないの?」

僕のこの言葉は、彼女の手によってにべもなく否定される。

「ない。どこにもない」

そう言って、彼女は下を向いてしまった。

正直、彼女に帰るところがないなんて信じられない。彼女が帰ろうと思えば、帰ることができるようなところがあるのだろう。ただ、彼女がそれを望まないだけで。……と、僕は心の中で咳く。

もし、彼女がこの世のものなら、と心の中で付け加えた。

そんな僕のモノローグなど知る由もない彼女は、下に向けていた視線を突然僕に向けた。その目には、さっきまで彼女が負っていたような影が一切形を潜めてしまった。彼女はいつも、こうやって自分をリセットすることができる。不思議な性格とも言えるし気分屋とも言える。どっちにしろ、図太いと言われる性格には違いない。

第五夜「再生世界」【2】

彼女は言った。

「ねえ、なんだかつまらない」

「そりゃそうさ」僕はあくびをして応じた。「だって、深夜の3時
つていうのは、楽しいことだって眠ってる時間だよ」

「じゃあどうしてあたしたち、起きてるのよ」

僕は言った。

「馬鹿だからじゃない？」

「……はは！」

彼女は本当に心地いい笑い方をする。お腹から響かせる、まるで歌劇のような笑い方。でも、夜中に響かせるにはちよつと不謹慎な笑い方だけど。

彼女は僕の腕を握って、ぶんぶんと振った。

「つままないつままないつままない！」

「……いや、そんなにつまんないよ」

僕はテレビを眺めた。テレビの中では、我らがヒーローJJが縛り首になるところだった。従容と死に臨もうとするJJに、群衆たちが群がる。ある者は飛礫^{ひれき}を投げ、またある者は花束を投げた。またある者は空の薬きょうを、まるでライスシャワーのようにJJに振りかける。厄介払いとも祝祭ともつかないそんなシーンの中で、JJだけはいやに静かだった。今までJJが心ときめかせてきた美女たちにも、覇を競い合ったアウトローたちとも、必至のチェイスを繰り広げてきた保安官たちにも、JJは一瞥をも加えなかった。彼が見ていたのは、己の頸を締める縄の結び目だけだった。

「つままない」

彼女はJJの顔を指さした。

「いや、JJは最高さ」

彼女は頭を振った。

「なんでこう、いつもこうなのかな……」

そんな彼女の姿に、僕は小首を傾げた。
しょうがないな。

僕は膝を立てて立ち上がった。だしぬけに立ち上がったはずだったけれど、彼女は僕が期待したほどには驚かなかったらしい。

「じゃあ、どこか行く？」

「どこに？」

まるで、僕のことを試そうとしているのか、彼女は上目がちにしてい聞いてきた。こういうときの彼女の眼は本当に怖い。何もかも見透かされそうだ。

まるでライオンに見つめられているような気分になれつつも、僕は答えた。

「“死神の岬”に」

その僕の言葉に、彼女はハア、と息を吐いた。そして、恨めしげに言う。

「アンタさ、よく“芋判”って言われない？」

きっと、彼女が言わんとしているのは「僕の提案はいつも代わりに映えない」ということなのだろう。でも、“芋判”なはずの僕の提案にいつも従う彼女がいるからそんな僕が醸造されるわけで、なんて屁理屈をこねたら、きっと彼女に肅清されてしまうだろう。

でも、と彼女は前置きして、頭を振った。

「行こうよ」

意外にも、彼女は笑顔を僕に向けた。

立ち上がった彼女はリモコンでテレビを消した。その時テレビには、後ろ手を縛られて首を吊られた「J」の姿と、“彼は死んだ。だが彼はアウトローの伝説となった。彼は永遠に生き続けるだろう”という、あまりに直訳調のテロップが踊っていた。

僕もまた、立ち上がった。

ガタガタと、車が鳴る。きっとサスペンションが不味いのだろう、

と僕はふと思った。

キュキュッと、タイヤが鳴る。きつと、彼女のドライビングテクニックが不味いのだろう、と僕はふと思った。

「なによ」

僕の視線に気づいたのか、運転席に座る彼女は僕に視線をくれた。

「よそ見運転はよくない」

「はいはい」

僕に指摘されて彼女はようやく前を向きなおし、僕はひそやかなため息をつく。彼女にばれないようにスピードメーターを見ると、警察に見つかったら一発免停のスピードをマークしていた。どうやら、彼女の運転テクニクが不味いのではなく、むしろ彼女の度胸が不味いのだと思い至った。

僕は言った。

「あのさ、一発免停のスピードでエンジンを吹かすのはどうかと思うんだけど……」

すると、ハンドルを片手で回しながら彼女は言った。

「どうして？」

あまりに無垢な問いの言葉だった。いや、そんな無謀な運転をしてると、一発で免停になって免許が取り上げられちゃうよ、とシドロモドロに理由を言うと、彼女は答えた。

「大丈夫。だってあたし、免許持ってないもん」

瞬間、シートベルトを抱える僕。そんな僕を尻目に、彼女は続ける。

「だってさあ、あんな紙切れ一枚取るのに三十万つて、どんなボッタクリ商売よ？ あたし、あれ、国家的なサギだと思っのよねー」

いや、運転免許の発行事業を“国家的なサギ”だと思うのは個人の自由だ。そして、その“国家的なサギ”に乗らないのも、個人の自由だ。でも、運転免許を字面通りに受け取っている人間を車に乗せた上で、そんなアナキーな発言は避けてほしい。

ちよつと気分の悪くなった僕は窓の外に視線を移した。どこを走

っているのか、まったく分からなかった。畑の中を走っているのかと疑いたくなるほど、辺りには何もなかった。点々と立っている街灯だけが僕らの車を照らしていた。どうやら今日は月も出ていないらしい。車がひた走る道から一歩外れたところには、まるで飢えたライオンの群れのように佇む闇が広がっていた。

そんな外の景色にも飽きた僕は、また車中に視線を戻した。

この車は、僕の車だ。

何年前のことかは忘れたけれど、街道脇にあった如何わしげな中古車販売店で買った。一人で乗るものだし、別にいくら古くてもいいやとばかりに買ってしまったのだけれど、あまりのサスペンションの悪さに辟易し、あまりのタイヤの擦り減りぶりに交換を余儀なくされたという困った車だ。最初のころは車の中に何も置きたくはなかったのだけれど、彼女と出会ってから、内装がずいぶんとファンシー寄りに変わった。「うーん、なんていうか、無骨？　つうか、殺風景？」と首をかしげた彼女によって、フリフリフィルのカーテンがつけられたり、どこから買ってきたのかほぼ人間大のテディベアが後部座席に置かれたりして現行に至る。

そんなファンシーな空気に嫌気がさした僕だったけれど、でもこれ以上視線をどこにやるわけにもいかなかったので、前を向くことに決めた。

そんな頃、彼女はガツテム！　と叫んだ。

「ああもう！　ガソリンがないじゃない！」

見ると、ガソリンのメーターの針が【E】に近づいていた。どうでもいいファンシーグッズばかり積んでるから減りが早いんだよ、と言いたかった僕だったけれど、「こんな古い車なんだから、減りが早いのは当たり前でしょ！？」と開き直られるのも面倒なので黙っておいた。

けれど、彼女は一人でイライラしつつも、一人で結論を出した。

「ま、もう少ししたらガソリンスタンドがあるし、まあいいか」

こうやって自己完結するくらいなら、最初から「ガツテム！」な

んて言わなければいいのだ。けれど、それらの言葉を無理矢理に呑みこんだ僕は、また前を向いた。

対向車が、ビュンと走り抜けていった。瞬間、僕らの車がその風圧で揺れた。

しばらく走ると仰々しい明かりが見えてきた。まるで、太平洋の大海原を悠然と進む豪華客船のようだった。見ると、見慣れたガソリンスタンドのマークが掲げられた看板が立っていた。

意外にも、彼女はウインカーを出した。そして、左右を確認してガソリンスタンドの中に滑り込んだ。スタンドの待合室に座っていた店員さんが飛び出してきて、僕らの車を誘導した。

店員さんはレギュラーにするかハイオクにするか、どのくらいガソリンを入れるか、灰皿は掃除するか、という質問を、こちらがイライラするくらい流暢に歯切れよく言った。窓をハンドルで回して開けた（僕の車の窓は、プッシュ式ではなく、ぐるぐると回して開けるタイプなのだ）彼女も負けずに「レギュラー。満タン。灰皿掃除して」と歯切れよく答えた。

彼女は、そんなガソリンスタンドの店員さんを眺めながら、口角を上げていた。

彼女の顔を見ていると、時折思うことがある。

彼女は、本当に存在しているのだろうか、と。

そう疑問に思うのは、出会い方があまりに唐突だったからなのだろうか。それとも、その性格があまりに常識から外れているからだろうか。

そう思いに沈む僕の横の扉を開いて、例の店員さんが車の中に上体をねじ込んできた。その店員さんの目当ては灰皿だったようで、灰皿をまるで大事な宝物のように両手で抱え、持って行ってしまった。

店員さんがいなくなったあと、また僕は今の疑問の続きを心の中で咀嚼する。

第五夜「再生世界」【3】

いや、気のせいじゃない。彼女は平板なのだ。生気がないわけではない。でも、生きていると表現するには、何かが欠けている気がする。

この感覚を口にするのはすごく難しい。

“彼女は存在しているようで、どこにも存在していない”。

一言で言えば、こんな感じだ。目には見えて存在しているのに、いざ彼女に触れてみようとするとうるさく消え去ってしまうような。いや、そもそも“触れてみよう”とも、なぜか思えないのだ。まるでモデルのような眼鼻立ちなのに、その存在感だけが妙に希薄なのだ。まるで、幽霊のように。

だから、僕らの関係も、実は“恋人”なんていう生々しい関係ではない。いうなれば、“同居人”。これがしつくりくる。ワンルームのアパートでひとつ屋根の下で暮らしているにも関わらず“同居人”というのは変な話だけれど、事実そうなのだから仕方あるまい。端的に言ってしまうえば、僕は彼女に欲情しないし、彼女も僕に欲情しない。きつと、お互いに空気のような存在なのだろう。

だから、僕は最近、彼女の正体を幽霊か何かだと思っている。こんなうだつの上がない僕の所に、こんな可愛い子が来るはずない。来るとすれば、死神か幽霊か。ともかく、そういう面倒くさいものが僕に憑いているに違いない。でなくば、人並みに女好きな僕が、彼女にまったく恋愛感情を抱かない理由が分からない！……—。

と、頭の中で考えをまとめていたところ、ようやく店員さんが灰皿を持ってきた。またもや僕の側のドアを開いて上体をねじ込み、ガシャンと灰皿をセットして行った。

店員さんは僕の側のドアを少し乱暴に閉め、彼女の側に回った。そして、これこれ幾らになります、と流暢に言った。彼女は無言で諭吉を出し、幾枚かの野口を受け取った。受け取ったおつりを財布

に入れた後、彼女はすでにかかっているシートベルトを確認して、店員さんにお礼を言った。

また、僕らの車は闇の中に飛び出していった。今度はウインカーも出さずに。

彼女は言った。

「あゝあ、やんなっちゃう！ 最近ガソリン高いなあ！」

けれど、なぜか彼女は嬉しそうだった。なんで嬉しそうな顔をするのさ、と聞くと、彼女は鼻孔を少し広げて続けた。

「だってさ、あの店、灰皿の掃除を頼むと、灰皿に匂い玉を入れてくれるんだもん」

彼女は左手で灰皿を開いた。中には、エメラルドグリーンの小さな粒粒がびっしりと入っていた。見ようによつてはきれいだし、見ようによつては気持ちの悪い図だった。

「この匂い、あたし好きなんだよね。なんていうか、懐かしい？ つていうかさ」

いやに人工的な芳香を放つ、まるで魚卵のような粒粒。この上に煙草の灰が落ちる様を想像して、すこし気分が悪くなった。

でも、彼女はちらつと粒粒を見やって言った。

「この粒粒に煙草の灰が落ちるなんて、サイコーだよネ」

彼女はニヤつと微笑んだ。

でも、なぜかそんな彼女の笑みさえも、どこか嘘臭い笑みだった。彼女は微笑んでいる。それは分かる。でも、本当に彼女は笑いたくて笑っているのだろうか。見る側にそう疑問が頭をもたげさせてしまう類の微笑み方だった。

ガタタン、と車が鳴った。その鳴りに合わせて、後部座席で行儀よく座るデイベアが、その体勢をちよつと崩した。レースのカーテンが少し揺れた。彼女の髪が、ちよつと揺れた。

車の前照灯が、真っ暗な僕らの行く手を照らしていた。朝まではまだ時間がありそうだった。

二時間くらい走っただろうか、外の様子も随分変わってきた。さつきまでは山がちな地形だったのに急に視界が開けてきた。相変わらず真っ暗なものには変わりはないけれど、その違いは一目瞭然だった。

そしてついに、僕らの目の前に海が現れた。

けれど、その海は普段するような海の色ではなかった。普通イメージする海の色は、青か灰色だろう。でも、僕らの前に広がっていたのは、まさに混沌色だった。白くもないし、黒くもない。いや、何色でもない。全ての色が混ざり合って化学反応を起こしたような、^{こわく} 蠱惑の色だった。

彼女は左ウインカーを出した。こんな時間にこんなうらぶれたT字路に往来などあるはずもなく、難なく彼女は左折した。そうして海を右手に走る格好となった僕は運転する彼女越しにしばし海を眺めた。

「海、最高だよな」

ぼそつと僕は言った。けれど彼女は何も言わなかった。右手で頬杖をつきながら、ひたすらに前を向いて運転しているばかりだった。むしろ、彼女が興味を持っていたのは左手に広がる松林のようであり、しばしば松林をちらちらと見やっていた。

「松林がそんなに珍しい？」

僕が水を向けると、彼女は答えた。

「なんだか松林って怖いよね。暗い中で見ると、お化けみたい」
確かに、真っ暗な中海風に揺れる松林はお化けのようだった。

なら、と、僕は言った。

「海を見ればいいんだ」
すると彼女はぶっきらぼうに答えた。

「海を見るくらいなら松林を見た方がまだマシ」
やがて、お化けのような松林が途切れた。後ろを振り返ると、松林が僕らに手を振っているかのようにだった。気を取り直して前を向くと、左手にただっぴろい畑のような土地が広がっていた。けれど、

真つ暗なせいで何も見えない。

そんなころから、道が曲がりくねってきた。さつきまではただまっすぐ道が続いていたのに、次第に海岸線が入り組んできたのか、道もくねりだしてきた。その中でも彼女はスピードを落とさなかった。時折タイヤが鳴った。でも、そんなこと、彼女も僕も余り気にしていなかった。

曲がりくねってきたばかりではない。道にアップダウンが出てきた。坂道を駆け上がるたびにエンジンが低くうめいた。でも、彼女にエンジンを慮るような優しさはないらしい。思いっきりアクセルを踏んでいる。結果、僕の車は低くうめき続けたまま結構なハイスピードで坂道を駆け上がる。そして、そのハイスピードのまま下り坂を走るものだから、軽い絶叫マシン状態だった。

軽い絶叫マシン、と僕が思わず呟くと、彼女は僕に一瞥もくれず、ハンドルを回しながら言った。

「軽い？　じゃあもつと重くする？」

いいえ、と即答して首を振ったのは言うまでもない。

そんなクネクネアップダウンを何度も超えたあと、ようやく僕らに乗せた車はスピードを緩めた。まるで、寿命を迎えたカブトムシのように、音もなく、気配さえ感じさせず、路肩に止まった。

「着いたわよ」

彼女は灰皿をぐつと引き出してから、煙草に火をつけた。煙草の先から白い煙が湧き出て、彼女の頬をかすめて空気に溶けてゆく。その様子をしばし眺めていたような気分だったけれど、それを彼女は許してくれなかった。

「ほら、早く出たら？」

車の外に出てみた。

全体の景色を闇が支配していた。右手、——つまりは海側——、には混沌色が。そして左手——つまりは陸側——、には、胡乱な紺色が控えていた。月もない。ただ、古い星の光だけが僕らを照らしていた。

「寒いわね」

薄着な彼女が、ようやく車から出てきた。しきりにハーハーと、右手に息を吹きかけている。きつと、息が白むのか確認したかったのだらう。でも、彼女の息は白くはならなかった。

「寒いかな」

僕は彼女に訊いた。あまり、僕は寒さを感じない。

すると、彼女は当たり前のことを聞きなさんな、とでも言いたげな顔を浮かべた。

「寒いわよ。もう冬も近づこうなんて時期、しかも朝方にこんな海つぶちに来たら、さ」

さわさわと、陸が鳴いた。海風に、何かが揺れているのだらう。

「ねえ、今何時？」

僕は彼女に訊いた。実は、僕は腕時計を持ち歩かない。

彼女は右手を見やって答えた。

「五時四十分つてとこかな」

「そっか」僕はしばし考えてから、言った。「死神の岬」、行ってみようよ」

「もちろん」と彼女は言った。「だって、そのために来たんじゃない」

さつきから僕ら二人の間で出ている“死神の岬”というのは、この通りにある心霊スポットのことだ。

もともと、この海岸通りは事故が多いという。それは、リアス式海岸に沿って道が作られているからだ。どうしても道はクネクネと蛇行してしまうし、高低差もつきがちになってしまふ。クネクネと蛇行すればそれだけハンドルを取られてしまふという事故も多くなるし、高低差があるということは坂道が多くてスピードの調整がしきれなくなることがあるということだ。

でも、この海岸通りは、ちょっと変な事故の起こり方をしているという。

噂によると、こうだ。“ある岬だけで、海岸通りの事故の九十%

が起こっている”。つまりところ、天気の特異点ならぬ、事故の特異点。

その岬こそが“死神の岬”なのだ。

第五夜「再生世界」【3】（後書き）

【言い訳アワー】

作中で「ガソリンが高くて嫌になる」旨の発言があるけど、実はその記述、このお話が書かれた時期のせいなの。つまりはこの話、あのバカみたいなガソリン価格高騰期、あの頃の遺物ってこと。こういう物語に時事ネタを挟むもんじゃないわよねー。

B Y ストーリーテラー

第五夜「再生世界」【4】

理屈ならいくらでもこねることが出来るだろう。たとえば、ある警察官は“しばらくリアス式海岸が続いて疲れたところに、いきなりまっすぐな道が現れる。“ようやく蛇行も終わりか”と安心してスピードを出したところでいきなりこの通り一番のアールを誇る岬が現れるのだから、その岬で事故が増えるのは当然のことだろう”などと言っている、という。

でも、この説には納得しがたい。だって、この“死神の岬”には、もう一つレコードがあるからだ。

“海岸通りにおける死者は、すべてこの岬に絡んだ事故の被害者である”。

こうなつてくると、皆が気味悪がるのも当然だと思う。いくら理屈でこうだと言われても、納得できないものが残る。そうして、いつしか“死神の岬”と呼ばれるようになった。きっと、多くの死者を呑みこんできた岬に、死神のイメージが重なったのだろう。

僕は、“死神の岬”に歩きだした。

とは言つても、“死神の岬”は、ここからすぐだった。

歩いて数十歩、どんなに多く見積もっても百歩というところだろう。道を横断して、海側を歩いた。カーブに入った辺りから、事故防止のために遊びが多めに取られている。進入禁止のマークがアスファルトに書かれていた。

そして、ついに岬の突端に立った。その突端のアールに寄り添うように街灯が立ち、ガードレールが控えていた。見ると、黄色と黒で構成された矢印のマークが何個も何個も張られていた。このマーク、視線誘導マークとか言うらしいけれど、変な俗説がある。曰く、「マークの矢印に入っている黒い線の数によって、危険度が違う」。黒い線が一つなら“落ちたらまあまあ危ない、それなりに注意しろ”。二つなら“落ちたらかなり危ない、運が悪かったら死ぬ”。三

つならば“落ちたら最後、死を覚悟せよ”という意味だ、と。当然のこのように、そのガードレールには三つ線の入った黄色い矢印マークが張られていた。そんなマークを、街灯が照らし出していた。“落ちたら死ぬ”と太鼓判が押された崖を見下ろしてみた。まるで死神が笑うように、ケタケタと潮騒が響く。

視線を彼女に戻して、僕は訊いた。

「今何時？」

彼女は答えた。

「六時五分钟前」

「そろそろかな」

僕は東の空に目を向けた。もう既に、東の空は白んでいた。

そうやって固唾を飲んで待つ僕に、その横で何の感慨もなさそうに視線を寄り添わせている彼女。

やがて、そんな僕らの視線の先に、太陽が現れた。最初は一筋の光だった。でも次第にその輝きは大きくなってゆき、世界に光を押し売りし始める。

一瞬にして、朝日によって陸の風景が明らかになった。

陸側では、稲穂が揺れていた。さつき風に音を立てていたのはこの稲たちだったのだ。稲穂たちは太陽を浴びて、カラカラと笑うように音を立てた。そして、その稲穂たちの脇にあら家がいくつもあった。何のために使っているのかよく分からないあら家たちが、僕らのことを見ていた。

ふと見ると、道の真ん中に小さな犬がちょこんと座っていた。結構な老犬らしく、目脂がたまっていて、胡乱な足取りだった。とても拾い上げて抱きしめようと思えるような犬ではなかった。

カアカア、という声に、思わず空を眺める。つまらなそうに風をうけたウミネコが、まるで僕らを囃し立てるようにして鳴いていた。朝の来迎を喜んでるようにも思えたし、憎んでいるようにも思えた。でも、そんなことは僕にとってはどうでも良かった。とりあえず、この痩せこけた鳥たちに会えたことだけが嬉しかった。

チカチカと音がした。見ると、頭上でずっと僕らを照らしていた街灯が眠りに就こうとしていた。その下に立ちつくすガードレールには、夜の間には気づかなかった傷がいくつもあった。

太陽に照らされた海は空の色を映して、最初は恋をした女の子のように真赤な顔をしていた。けれど、どんどん太陽が地面と離れて空が元の色を取り戻すうちに、元の青白い顔を取り戻してゆく。

太陽によって、景色たちが作られていった。

「すごい」

僕は呟いていた。

でも、彼女は何も言わなかった。しきりに時計ばかり気にしている。なぜか、僕に憐みのような視線をくれながら。

どうしたのさ、と聞くと、彼女は海にも負けない青白い顔を浮かべて続けた。

「あともう少し、もう少しで分かるから」

「何が？」

「アンタは毎日、朝日が顔を出してから15分後にすべてを思い出す。そして、アンタはいつもあたしのことを置いてゆくの」

「どういうこと……」

その瞬間、僕の頭に変なイメージがガラスの破片のように突き刺さった。

夜。車。運転している僕。隣に座る彼女。アクセル。ハンドルを握る両手。暗い道。影。老犬。ブレーキ。汗ばむ両手。回るハンドル。開くドア。飛び出る僕。黄色いマーク。傷だらけのガードレール。真黒な空。僕の手。崖。海。海。海。海。海……。

動悸。その音だけが、僕を支配した。そして、動悸に誘われるように息も荒くなってゆく。

なんなんだ、このイメージは。これはまるで……。

僕の心の中を見透かしているのか、彼女は言った。

「ようやく、思い出した？」

彼女は、アリのクイのようなきれいな瞳に一片の影だけ差して続け

る。

「アンタは死んだのよ。あたしを残して」

「僕が、死んだ？」

そう訊く僕をよそに、彼女は言う。

「あの日、アンタとあたしは二人で夜のドライブに出た。確か、“暇だから”、とか言ってるね。あの頃アンタは仕事をしてたから、最初首を横に振ったんだけどね、でも、あたしが無理を言ったんだ」

僕の頭の中で、僕の手をつかんでぶんぶんと振る彼女のイメージが浮かんだ。でもそれが、今日のことなのか、それとも以前あったことなのかがまるで思い出せない。

彼女は続ける。

「楽しいドライブだった。アンタは得意の冗談ばかり言ってた。それに、あたしはずっと笑い通しだったのもよく覚えてる。そういえば、あの日、あそこのガソリンスタンドでガソリンを入れたのよ」
彼女は息を吸ってから続ける。

「でも、事故は起こっちゃった。アンタが犬なんか避けるからいけないのよ」

「い、犬？」

「よばよばの犬。きつと、夜の道だったから、とつさの判断が利かなかったんでしょね。轢いちゃっても問題なんて起こりようのないほどヨボヨボで小さな犬だったのに、あなたは避けちゃった。しかも、よりにもよって崖側に避けちゃったのよ」

彼女は僕の顔を覗き込んだ。まるで、僕のことを非難しているようにもあつたし、僕のことを憐れんでいるようにもあつた。

「ふつう、考えられる？」彼女は力なく笑った。「陸側を走ってたのに、崖側にハンドルを切る馬鹿。きつと、岬を回っている感覚のまま、ハンドルを切っちゃったんだろうけど」

「ちょ、ちょっと待って！！」僕は話に無理矢理割り込んだ。「つてことは、君も死んだんじゃないの！？ 僕だけ死ぬなんてそんなこと……」

そんな僕の言葉を、彼女は手で制した。

「話はこれからよ」彼女は言った。「……で、右にハンドルを切った車は、ガードレールを突き破っただけで止まったの。でも、ものすごい衝撃でね、遠心力が右にかかったわけ。どうしたわけか、その瞬間にアンタの側のドアが開いちゃったの。で、運のないことに、その日アンタはシートベルトをしてなかった。結果……」

「海に、投げ出されたってわけか」

この頃には、僕もすべてを思い出していた。まるで、夢から覚醒したときのようにクリアに。

あの日、僕は彼女といっしょに夜のドライブをしていた。異様なくらいに怖がる彼女が面白くって、あのリアス式海岸を猛スピードで走った。白目を剥いて怖がる彼女をギャグでなだめながらリアス式海岸を抜けてゆくうち、やがて比較的まっすぐな道に行きついた。このとき調子に乗ってしまった僕は、さらにアクセルを踏んだ。その瞬間、前照灯の光の中に、一点の影があるのを発見した。なんだろう、と目を凝らして見ると、それが犬であることが分かった。

もう既に、止まることができるような距離ではなかった。だから、とつさにハンドルを切ってしまった。右に。

結果、僕の手は崖側のガードレールに思いつきりぶつかる格好になっちゃった。が、その瞬間に、僕側のドアが思いつきり開いた。きつと、車が古いせいだろう。今にして思えば、前にも道を走っていて突然ドアが開いたことがあった。

しかも、そのときに限って僕はシートベルトをしていなかった。シートベルトをどこかで外すと、つけ直すのを忘れてしまう癖が僕にはあった。たぶん、ガソリンを入れたときにつけ直すのを忘れたのだろう。

そんな不幸な偶然が重なり……。

「僕は、死んだのか」

結論を述べた僕。でも、何の驚きもなかった。むしろ、あるのは疑問ばかりだった。

僕は疑問を口にした。

「じゃあ、僕は誰なんだ？」

じゃあ、僕は誰なんだ。僕が死んだとするのなら、ここにいるのは誰なんだ。

彼女は憐みの目を向けたまま、僕の疑問に答えた。

「きっと、オーソドックスに考えれば幽霊なんでしょうね」

第五夜「再生世界」【完結】

彼女の言葉の選び方に疑問を持った僕は訊いた。

「オーソドックスに」って、どういうこと？」

その言葉に、彼女はよどみなく答えた。

「何を以てオーソドックスな幽霊とするのかは分からないけど、でも、普通の幽霊っていうのは、人間の延長よね。でも、アンタは違う。まるで、フィルムにその姿を固定されたJJみたいに、毎日同じ行動しかないの」

「どういうこと？」

「アンタはいつも、あたしが部屋に戻ったところにはベッドで眠ってる。そして夕方になるとベッドから這い出してきて、あたしの作ったご飯を食べて、つまらないバラエティ番組とかニュース番組を見たあと、必ず深夜にやっているJJの洋画を見る。そしてそのあと、あたしを連れて“死神の岬”にやってくる。そして、ここでこうやって自分が死んでいることを思い出すの。そしてあなたはいつもここで……」。そしてあたしがアンタの部屋に戻ってみると、アンタはベッドでぐっすり眠ってる。……その繰り返しなのよ。だからアンタは幽霊ですらないのかもしれない。アンタっていう人間が持っていた、“記憶”みたいなものなのかもしれない」

「おかしいよ、それ」僕は言った。「僕が今日見たのは民放だよ？」

毎日毎日JJの西部劇を放映してるはずじゃないじゃないか」

こんなの、瑣末な問題にすぎなかった。ただ、彼女の挙げ足を取りただけなのかもしれない。そんなことをしたところで、僕が死んだという事実がひっくり返るはずもないのに。

でも、彼女は首を振った。

「そう、それだけがあたしにもよく分からないの。どうしてなのか」「どういうことだよ」

「アンタの部屋では、いや、アンタの周りでは、毎日同じ番組が流

れ、同じ時が流れるの。そして、JJが保安官たちを撃ち殺して、本人も首を吊られる。アンタはいつも、その光景を初めて見るかのように目を輝かせて見てる。そんなスパイラルを延々と繰り返してるのよ」

「そんなバカな」

でも、彼女はそんな僕のうるたえなど気にしていないようだった。彼女の言うことを信じるなら、きっと昨日も一昨日も、それまた前の日もさらに前の日も、僕は同じようにうるたえたはずだから。

彼女は続けた。

「アンタの葬式が終わったあと、あたしはアンタの部屋に行ったの。だって、その部屋に用がある人間は、この世界のどこにもいないんだもの。アンタの部屋と遺品を整理しようと思って、部屋に入った。そしたら、死んだはずのアンタが寝てるんだもの、驚いたよ。最初はドッキリか、あるいは性質の悪い悪戯かとも思った。でも、アンタと話していると、どうしても本物にしか思えなかった」

「じゃあどうして、もっと早く教えてくれないんだ！ 夜の間とか、JJを見ている時とか」

「試してないとも思った？」彼女は無感動に続ける。「アンタは覚えてないだろうけど、これでも結構試したんだよ？ “アンタはもう死んでるんだ”とか、“アンタは昨日と同じ行動を繰り返しているんだ”って事あることに言っただけ。でも、そう言っていると、アンタはいつもキョトンとした顔をしてた。反論するでもなく、かといって無視するんでもない。ただ、キョトンとするのよ。ただ唯一、こうやって“思い出した”とき以外は」

「なるほど、JJにイラク戦争の話をしたって、キョトンとするよな」

個人的には、結構洒落が利いているように思っただけけれど、彼女は一切笑わなかった。きつと、この冗句は何十回も彼女の耳に届いているのだろうから仕方がないのかもしれない。

押し黙る彼女。彼女の後ろには、僕の命を呑みこんだ海が広がっ

ていた。

「僕は、どうしたらいいんだろうね」

どこか他人事に、僕は言った。

「わかんない」

彼女は答えた。当たり前だ。

太陽だけが、僕らに微笑みかけていた。そして、稲穂だけが僕らの言葉を聞いていた。

「なあ」太陽から視線を外して、僕は言った。「どうして、死んでしまったはずの僕のそばにいるんだ？　だって、今ここにいる僕は、同じ1日を過ごす僕なんだ。この僕は、8mmテープに収められた映像みたいなもののに」

彼女は答えた。

「だって、あたしには、アンタの家くらいしか帰る場所がないんだもの」

「でもそれは」

君が“帰るべき”場所に帰ろうとしないからだろ、と言おうとして、思わず口をつぐんだ僕がいた。それは、彼女があまりに深く沈んだ笑顔を僕に向けているからだろうか。

ふいに彼女は口を開いた。

「これ、毎回アンタに言ってることなんだけどさ。……“帰るべき”ところなんて、いくらでもあるんだよ。アンタの言う通り。でも、“帰るべき”ところが、“帰りたい”場所と一致するとは限らないんじゃないの？　少なくともあたしにとって、“帰るべき”ところは“帰りたい”場所じゃなかった。たとえ8mmテープの世界でも、あたしはアンタの家に帰りたいって望んだの」

きつと、それは彼女の本音なのだろう。

そして、もしかしたら僕も、彼女がいる日常を望んでいるのかもしれない。いつからか、彼女と過ごす日常を代え難いものになっていたのかもしれない。だからこそ、芋ハンのように同じ1日を過ごす僕の傍らには、彼女が矛盾なく存在出来たのかもしれない。

「でも」

僕は言おうとした。しかし、言いたかった言葉は彼女に先に言われてしまった。

「だとしたら、ここは君がいるべきところじゃない。僕の家から出て行け」でしょ？」

彼女は子供っぽく笑った。けれど、彼女は首を振って続ける。

「もう、耳タコだよ」

彼女は真一文字に口を結んで、人差し指で眼尻を払った。でも、それっきり彼女は涙を拭こうとはしなかった。両手を強く握って、僕の前に立ち尽くしている。

「ど、どうする気なんだ？」

僕は訊いた。すると彼女は答えた。

「あたしには何もできない。あんたの一日を、粛々と彩るだけ。一日たりとも老いないアンタのことを、一日ずつ老いてゆくあたしが見届けるだけ。でも、こうやって時折運命に逆らってみるの。もしかしたら、行動を起こせば何かが変わるかもしれないから。でも」

彼女は頭を振った。

「でも駄目。今日も駄目だった。もう、アンタは今日の一日を終えてしまう」

「え？」

その時だった。

僕の足が一人でに動き出した。まるで、最初から踏むステップが決まっているかのように、僕の足はどこか優雅に歩を進めてゆく。その歩の先には、当然死神の岬が控えていた。

歩を進めながら、ようやく僕はすべてを思い出した。僕はもう、何か月も前に死んでいること。そして、何か月も前から同じ1日を繰り返していること。夕方に目が覚めて、彼女の作ったご飯を食べ、つまらないバラエティ番組やニュース番組を情性で見て、ようやくお目当ての西部劇を見る。その終盤頃に彼女に暇だ暇だとせがまれて“死神の岬”にドライブし、そこでようやくすべてを思い出

す。そういう一日を、僕は延々と繰り返していること。そして、崖から落ちると、また夕方に目を覚ますこと。そんなスパイラルを延々と繰り返している。

でも、どうして今際の際にこんなことを思い出すのだろう。

「ワン！」

僕の横に、さっき目に入った老犬が寄り添った。さっきまでのヨボヨボとした足取りとは比べようにならないほど、華麗な歩き方だった。

「なんだ、お前が“死神”だったのか」

僕は呟いた。でも、犬はクーンと鼻を鳴らしながら僕の横を歩くばかりだった。

僕は回り続ける。答えのない無限回廊を。出口のないメビウスの輪を。

きつと、昨日のことを忘れていた僕のように、きつと明日の僕は今日の僕のことを忘れている。そうして、まるで映画のＪＪのように、延々と同じ一日を過ごす。ＪＪが保安官を殺すように僕は彼女のご飯を食べ、ＪＪが首吊りに遭うように僕は“死神の岬”から飛び降りる。きつと彼女は、変わり映えのしないＪＪの笑顔と、それを眺めて快哉を送る僕の顔を並べて見るに違いない。

僕の足は、崖の一步手前に差し掛かった。

下では、死神のようにケタケタ笑う潮騒が僕のことを待っていた。一步、足を踏み出した。

僕の体は地面と切り離された存在となった。

犬も、なぜか僕と同じく落ちてきた。僕と心中してくれるというのだろうか、それとも、死神として、僕の一日の末期を見届けたいのだろうか。

こんな瞬間になって、なぜか恐怖がせり出してきた。

助けて。だれか。

それは、存在が消えてしまうという恐怖ではなかった。むしろ、存在が在り続けるという恐怖だった。

僕は考え続けた。重力にその身を委ねながらも、頭だけはその支配から逃れようと必死だった。

どこかに抜け道はないのか？

どこかに抜け道はないのか？

どこかに抜け道はないのか？

……あつた。

．．．．．World is reproduced．．．

*

保安官が銃を引き抜いた。

でも、まるで弾丸のように素早く銃を引き抜いた我らが「」が、ホルスターから抜けかかっていた保安官の銃をぶち抜いた。ガチャンと音を立てて弾き飛ばされた保安官の拳銃は、アメリカ西部の砂っぽい大地に落ちて独楽のようにくるくると回る。けれど、己の銃が弾き飛ばされた事実を呑みこめていない保安官は、自分の右手を眺めて小首を傾げた。何かに気づいたその保安官の顔が恐怖の色に染まった瞬間に、保安官の眉間から大量の血が飛び出た。俺が負けるなんて、といった風に目を泳がせる保安官がフレームから脱落して、画面に大写しになったのは銃を構えて渋く笑う、我らがヒーロー「」の雄姿だった。

ストーリーテラーの独り言【5】

第五夜、いかがでしたでしょうか。

どうやらこの話、矢車の一押しらしいのよ。でも、なんていうか、アングラ映画か、って突っ込みたくなるわよね。難解難解。こういう独善的なことから、いつまで経っても底辺なのよねー。

さて、いよいよ最終夜となります。

このお話は、ある男の子のお話。

鈴虫を飼っているサラリーマン「一樹」。その一樹が夢うつつの中で回想する、昔出会った不思議な女の子とのお話。

モチーフとなっているのは、2ndアルバム『名前をつけてやる』収録「鈴虫を飼う」。

疲れた主人公像が、哀愁誘うサウンドと切ない歌詞で浮き彫りにされている曲（以下略）。

では、どうぞ。

最終夜「鈴虫と君と」【1】

ひんやりとした空気が、一樹の頬をなでた。

最初、その空気がどういう性質のものなのか、一樹には分かりかねた。それが秋の深まりと共にやってくるごく自然な変化であることに気づくのに、しばらく時間がかかった。まるで、ナイフで切りつけられたような大仰な寒気。ドアを開いた瞬間に部屋からすべり出てくるその寒気が、一樹の頬を刺した。一樹の頬は切り傷をつけられたかのように赤く染まった。

薄く汚れたドアを開け放つと、一樹の目の前にはどっしりとした闇が広がっていた。開け放ったドアから、廊下のうす暗い光が差し込んで、玄関の辺りを照らす。

思わず、一樹はネクタイを緩めた。寒かろうが、家は家なのだ。ネクタイなんてもの、一刻も早く取り去ってしまいたかった。

玄関の電気をつけてはじめて、部屋の様子が多少なりと浮かび上がった。ごく普通のワンルーム。学生が住むには豪勢だが、社会人が住むには少々手狭な一樹の家だった。玄関の明かりだけでは部屋の全体はあまり良くは見えないけれど、部屋そのものの明かりをつける気にはなれなかった。

窓の外は、真っ暗だった。何も見えない。「川が近くに流れていて、窓から覗く景色が綺麗でいいんですよ。彼女さんなんか連れ込むにはサイコーですよね」と見るからに脂ぎった不動産屋に勧められたはいいものの、実際のところその風景を楽しんだことはあまり無かった。いつも、こうして夜に帰るので、昼の川の青さをあまり知らない。そして、その川の岸に広がる青い木々や緑の草たちを知らない。土日はほとんど泥のようにして寝ているからだ。一樹にとって、窓から見える川の色は闇色だった。夜空の紺色とは違う。対岸の白色と赤色が混じったような色とも違う。何もない色。その闇色は、“そこに何物も存在しない”という、どうしようもない事

実を示しているように一樹には思えた。

スーツの上着をハンガーにかけて、ケータイを開く。その待ち受け画像になっているカレンダーに目を通すと、今日は金曜日らしかった。だから、一樹は冷蔵庫からビールの缶を取り出した。キンキンに冷えている。そういえば、“ビールは温いくらいが美味しい”って呟いたのは誰だっけ、とふと思い返す。でも、それが誰だったのかは思い出せない。コンロの横を歩きながらタブを開け、一口飲んでからソファ―ベッドに座る。でも、やっぱりビールは冷たい方がおいしいよなあ、とふと一樹は思う。

外の景色を眺めた。やっぱり、外には空白を示す闇色が広がるばかりだった。

り、りん。

まるで、そんな一樹のことを慮るかのような、ひそやかな鳴き声が部屋に響いた。

「ああ、忘れてた」

窓の前に立っていた一樹はまた冷蔵庫の前に立ち、そのドアを開いた。オレンジ色の光が、一樹の顔と部屋のフローリングを照らした。

冷蔵庫の中から煮干と茄子、あとビーフジャーキーを取り出した。コンロ近くの明かりをつけ、コンロの横に置かれているまな板の上に茄子を置いて、ざくざくと輪切りにした。煮干を一個かじりながら、その茄子を竹ヒゴにグサグサと刺してゆく。ひどく残酷なことのようになぜか一樹には思えたけれど、ちよつと力を込めればうまく刺さった。

竹ヒゴに通された茄子、煮干、ビーフジャーキーを持った一樹は、台所の明かりを消してから部屋の隅に歩いた。部屋の隅には、腰くらいの高さがある棚があつて、その棚の上に、透明な箱が置かれている。大体金魚が10匹くらい暮らすのにちよつと良さそうな水槽だった。とはいっても、その水槽の中に水は全く入っていない。深さ十センチくらいの土に、ちよつと半分に打ち欠いた土色の移植花

瓶、あとはどこで拾ったのかも思いたせないくらいに個性のない石が何個か置かれている。

「今やるぞ」

一樹はそう言うと、水槽の蓋を取って竹ヒゴに刺さった茄子を土に刺した。その瞬間、その水槽で息づくものがぱつと逃げたような気配があった。犬のようにには懷いてくれない。けれど、あまり悲しくはなかった。一樹にとって、水槽の中にいるものは“飼っている”という感覚のものではないからだ。むしろ、同居していると表現した方がしっくりくる存在だった。

新しい茄子を刺した後、一樹は昨日の今頃に刺した茄子を取り出して、煮干をバツと投げ入れた。煮干はいつも4〜5匹しかやらない。以前は10匹くらいやっていたのだが、そうすると食べ残しをすることが分かったからだ。4〜5匹くらいが丁度いい。

ふと、一樹は古い茄子を眺めてみた。皮は見事に残されているのに、中身の方はすっかり食べられている。おいおい、皮の方がおいしいのに、と一樹は非難を込めて水槽を眺めた。でも、水槽の中にいるものは、リン、と一声鳴いただけだった。

手の中にあるビーフジャーキーを一口で食べてから、開けたばかりのビール缶を持って一樹はその水槽の前に立った。水槽の中では黒い色をした虫が、てんでバラバラの方を向いていた。気の早い奴などは、さっきばらまいた煮干に群がっていた。

その黒い虫の一匹が、リン、と鳴いた。

その一匹に呼応するかのように、他の一匹が、リン、と鳴いた。

「リンリン、うるさいな」

リンリン、と楽しそうに虫たちは歌う。

「なんでそんなに楽しそうなんだ？」

リンリン、と楽しそうに虫たちは笑う。

いつの間にか大合唱になっている水槽を見てため息をひとつついた一樹は、窓の方を眺めた。さっきまでは曇っていたのだろうか、さっきまではどこにも影も形もなかった月光が降り注ぎ、一樹の部

屋に侵入してきていた。それはまるで、何かの階のようだった。そこから、人の心を無駄に揺さぶる妖精が忍び込んでくるような。そんな不思議さを醸す光だった。

一樹はビールをすすった。

苦いビールが喉を通ったころ、その光の階は雲にさえぎられたのか、ふっと消えた。一樹の部屋はふっと暗くなった。まるで、闇という名の母親に抱かれた子供のようだった。

闇に沈む部屋。その中でも水槽の中にいるオーケストラ、——鈴虫たち——、はリンリンと鳴いていた。ある者は旋律を歌い、ある者はアルトパートを歌う。ある者は旋律の装飾となる音程を歌い、またある者はそんなオーケストラとは関係ないよ、と言わんばかりにてんで自分のペースで鳴いていた。でも、離れて聞けば、それはそれで一つの調和だった。

確か、10匹いるはずだ。

一樹はふと虫の数を数えてみようと思い立った。でも、既にアルコールが回っているのか、それとも鈴虫があまり一つどころに居ついてくれないからかは分からないが、何度数えても数が一定しなかった。1、2、3、4、5、6、7、8……くらいまではいい。だが、9あたりから怪しくなる。“9”で止まってしまうこともあれば、“13”まで行ってしまうこともあった。土瓶の上や石の上、あるいは茄子の上でリンリンと鳴きながら、鈴虫たちが僕のことを見ていた。その視線が僕のことを嗤っているものなのか、それとも憐れんでいるのかは釈然としなかった。

一樹はソファアーベッドに腰かけて、既にぐるぐると回っている目で部屋を眺めた。いつもの部屋が、まるで蜃気楼のようにフワッと揺れた。でも、次第に眼でものを見るのを諦め、いつそのこと、と閉じてしまった。リーン、リーンという音が、瞼の裏に残るぐるぐる感と混ざり合う。

その独りよがりな合唱の中で、一樹は呟いた。

「彼女は、受け取りに戻って来るんだろっか」

一樹は思い浮かべた。あのとき、あの瞬間の、真面目顔。あの、張り詰めた風船のような感情を目に宿した、あの真面目顔。きつと二度とあんな真に迫った真面目顔にお目にかかれることはないだろう、と無責任に一樹は思う。瞼の裏にいくつもの真面目顔が浮かんだものの、アルコールのせいで歪んだ像しか結ばなかった。もしかすると、素面であつたとしても結局は思い出せないのではないかと苦笑する。

リンリンという声は、一樹を感傷に引きずり込む。過去に立つたはずの分岐点に向き合わせる。そして、一樹の胸をひどく刺す。

一樹が春菜と出会つたのは、中学の2年の夏頃だつた。

あの頃、一樹は人並みな少年だつた。人並み、と書いたが、この言葉には少し説明を要する。一度社会に出てしまうと、“人並み”という言葉は範囲が狭い言葉になってしまう。一度社会に出てしまうと、案外“人並み”が難しいことに気づくはずだ。誰しも何らかに優れるか、あるいは劣るかして、本当の意味で人並みを保持できる人間は少ないのだ。だが、若い頃の“人並み”は違う。恐ろしく秀才か、あるいは恐ろしく不良か、あるいは恐ろしく運動が出来る人間、つまりは「目立つ」人間以外のことを「人並み」と呼ぶ。だから、一樹はそういう意味で「人並み」だつた。とはいつても、学校の成績もそこに良かったし、運動神経も悪くはなかった。そういう意味で彼は人並み以上だつたのだが、当時彼の周りにあつた物差しからすれば、それは“人並み”に含まれる程度だつたということだ。

その日、一樹は部室の掃除をしていた。

一樹は当時、バスケ部に所属していた。バスケ部というと、一般には女子からキャイキャイと黄色い悲鳴が飛ぶ部活動として他の部から見なされている風のある部だが、一樹のバスケ部にはそんな風

は全くなかった。何しろ弱いのだ。地元の対外試合で、連続50連敗の記録を持っていた。これは、大会史上類を見ない大記録だと他の学校によく馬鹿にされていた

そんな部活だったから女子からも人気がなくて、普通だったらしく手あまたのマネージャーもやっては来なかった。だから、一樹が部室を掃除する羽目になっている。

「はあ、どうして俺が」

最終夜「鈴虫と君と」【2】

と、箒を持ちながら呟く一樹。だが、生来の生真面目が頭をもたげ、荒れ放題になっている部室が気になってしょうがなくなってしまう。その旨を部員達に話してみても、「はあ？ 部室なんてあんなもんだろ？」とか、「あの部屋は汚くて当然、そういう伝統なんだ」とか、後輩にまで「そんな几帳面にならなくていいんじゃないですか？」と、からかいにも似た言葉を投げ掛けられてしまった。

仕方なく、バスケ部の顧問をしている小森先生に話をしてみた。相変わらず、白っぽいのか黄色っぽいのか分からない白衣にしか、全体的な印象がない先生だ。つまるところ、先生としても、一人の男の人としても風采の上がない人なのだけれど（40歳近くだと言うのに、まだ結婚できていなかったあたりも、“風采の上がない”という評の裏付けになると思う）、その小森先生に掃除の旨を話すと、小森先生はつまらなそうに「だったら目についたお前が掃除すればいいだろう」と当たり前のように言った。そして、「明日の実験の用意があるから、済まないがこれくらいにしてくれないか」と付け加えた。理科準備室を出たとき、ふと3年の澤田先輩とすれ違った。可愛くない、というほどではないけど、かといって美人というほどではない。でも、大人っぽいことでは定評のある人だった。そして、その先輩は理科準備室に入っていた。

それはともかく、部室は本当に汚かった。

いつだかの対外試合で使ったユニフォームが床いっばいに落ちていた。誰かが履いていたのだろう、汚れた靴下が丸められて床に転がっていた。そのほか、空気が抜けてしまったボールとか、なぜか置いてある竹刀、誰が持ち込んだのかわからない大量の工口本。そういうものたちが狭い部室の中でしきりに存在感をアピールしていた。その暑苦しいアピールが、男臭い汗のにおいに混じりあい、妙な閉塞感を与えていた。

そんな部屋を一通り眺めた一樹は、まずはため息をついた。

そして、掃除に取り掛かった。

持っている箒でとりあえず床に転がるものを部屋の一方に寄せ、分別に取り掛かる。部で使う洗濯物はこっち、個人の洗濯物はこっち、ボールは処分、竹刀は剣道部に返却、エ口本は××先輩の持ち物だろう、と適当に分類してゆく。途中、見たくもない虫を見てしまった気もしたけれど、気のせいだと割り切りながら、その作業は続いた。

そうやって何時間か作業をしてみると、案外うまく片付いた。

そもそも、部室というところには私物が多い。その私物を本人に押しつけてしまいさえすれば、案外早く片付くものなのだ。……と一樹は床の白い色がすっかり見えるようになった部室の真ん中でうんうんと頷く。

でも、問題があつた。

ユニフォームだ。山のように積み上げられたユニフォームが、まるで一樹のことを急かすかのように佇んでいた。その様を横目に、一樹はため息をつく。

ユニフォームはあくまで部の持ち物だった。でも、異臭を放つくらゐに汚れている。体育館倉庫にぶち込んでおけばいいか、と一樹の頭に考えがよぎったが、かといってそれは根本的な解決になっていないことくらい、一樹には分かっていた。つまり、洗わなくてはならない。

でも、誰が？

部室を見渡しても、もちろん誰がいるはずもなかった。当然、洗濯が出来るのは、——つまりは部室にいるのは——、一樹だけだったわけだ。

「貧乏くじつてわけか」

一樹はそう呟いて、ユニフォームを洗うのも自分の仕事なのだということをようやく理解した。そして、のろのろではあるけれど、ユニフォームを水飲み場まで運んだ。しかし、さすがに廊下にある

水飲み場で洗濯するのは気がひけたので（その水飲み場では皆普通に水を飲むから気がひけた）、体育館の玄関横にある水飲み場まで汚れものを運んだ。

その水飲み場はいやに静かだった。体育館の中からキュッキュと靴が鳴ったりパシン、と何かが鳴ったり、ワーワーという人の声が漏れ聞こえてくる。そんなに体育館と距離がないにも関わらず、それでも水飲み場は本当に静かだった。遠くから、蝉のけたたましい声が聞こえるけれど、それでもこの水飲み場は静かだった。まるで水を吸い込む砂地のように、静寂がその場を支配していた。その水飲み場の横に、10mくらいはあるうかという木が、まるで陽光から水飲み場を守るかのように立っていたが、夏の鋭い太陽光がその木越しに降り注ぎ、水飲み場の水気を奪っていた。ふと振り返るとさつき小森先生と話した理科室（3階にある）の窓が白く光っていた。

汗で臭いユニフォームをばさばさと水飲み場の水槽に入れて蛇口をひねった。一瞬遅れてまずは暖かい水が、そして少し待つと冷たい水が蛇口から漏れ落ちた。まるで真冬の砂場のようなだったタイルに、一瞬にして水気が戻った。

その冷たい水に手を浸しながら、最初一樹は一息ついた。冷たいなあ。そう心の中で呟いてから、水に浸って重々しくなったユニフォームをこしこしと洗う。汚れが落ちたのかは分からなかった。でも、やらないよりはマシそうだった。でも、“やらないよりはマシな”作業が山のように残っているという状況はあまりいい気分のものではない。そうやって水と戯れる一樹は、ふとため息をついた。そのため息は、誰に聞かせる性質のものではなかった。ただ単に気分のやり場を他に持っていくためのため息だった。

けれど、そのため息に、返答があった。

「ため息かあ、良くないな、少年」

一樹は振り返った。でも、誰もいない。聞き間違いかと思ってまたユニフォームを洗う作業に気持ちに戻した。しかし、また辺りに

声が響いた。

「上だよ、上」

上？

一樹は手を止めて上を眺めた。低いようでいて高い音程の水の音だけが辺りに響く。

視線の先には逆光になった枝葉があつた。葉の隙間から、暴力的に強い光が目飛び込んでくる。そのせいで、木の輪郭しか見えなかった。

「見えないの？」

その声は確かに上から、――つまりは木の上から――聞こえた。しかし、一樹の目には黒い輪郭しか目に入らない。目を思いつきり細めてみても、木漏れ日の自己主張は止まなかつた。

そんな一樹に気づいたのか、その声は言つた。

「しょうがないなあ。……えい！」

その声が一樹の耳に届いた一瞬後に、木から落ちる影があつた。いや、落ちたのではない。きっと、降りてきたのだ。

木から落ちてきたもの、それは女の子だつた。

ポニーテールの茶髪。セーラー服。一樹の学校はブレザー校だから、他の学校の制服だろう。まるでリスのように黒目がちな目をランランと輝かせて、一樹のことを見ている。でも、この女の子、とても“可愛い”と形容できるような女の子ではなかつた。それは、きつとあまりに自信たつぷりに吊りあがつた目のせいだろうし、ペチャッと潰れた鼻のせいだろう。愛嬌、という言葉で語ってしまうにはちよつとキツイ顔をしているし、かといって美しい、という言葉で語るには少し造形が不味い。そんな感じ。いふなれば普通の顔だつた。

しかし、女の子が木から下りてくる、という状況に、一樹は戸惑つた。その女の子の制服が自分の学校のものではない、という事実にも少し戸惑っていたし、その女の子が茶髪だつたというのもまだまだ子供だつた一樹をたじろかせるには十分だつたのだが。

その女の子は水飲み場に身を乗り出して、うげえ、と呟いた。

「洗濯物？ きつたないなあ。こんなところで洗濯？」

しどろもどろに一樹は答えた。

「ああ、そうだけど……」

「けど？」

その女の子は、一樹の前に立った。立ったというよりは、滑り込んだという方が状況に近いかもしれない。一樹が普段意識している“自分だけの空間”に、彼女はふっと忍び込むように入り込んだ。その事实に、ちよつと一樹はたじろきつつも胸の鼓動を早くする。その胸の鼓動がどういう類のものなのか分からなかった一樹は、とりあえず答えた。

「……そういう君は誰？」

「ああ、私？」

「そうそう」

一樹はしどろもどろに頷いた。しばらく、何かどうでもいいことでも考えているような表情を浮かべつつ、けれどその女の子は答えた。

「私は、工藤春菜」

工藤、春菜。

名前は分かった。工藤春菜。でも、彼女は肝心なことを何も話していない。いや、この際名前なんてどうでもいいのだ。むしろこの時一樹が知りたかったことは、他の所にあるのだから。

「ええと、工藤さん、だっけ」

「呼び捨てでいいよ」

“呼び捨て”というものにあまり慣れていない一樹は最初戸惑った。でも、さん付けをするのも変だし、かといってちゃん付けはもつとおかしい……。と頭の中で思案してから、ようやく一樹は本題に入った。

「ええと、春菜はどうして木の上に？」

「土の上に立っていると、暑くて暑くてしょうがないから」

カラカラと、彼女は笑った。

「いや、聞きたいのはそういうことじゃなくて」と一樹は言ったが、実は木に春菜がわざわざ登った理由もまた訊いてみたい気がした。でも、話の綾で、結局聞けないままになってしまった。「どうして他の学校の人が、うちの学校の、しかも木の上にいるんだ？」

春菜は自分の格好を眺めて苦笑した。

最終夜「鈴虫と君と」【3】

「だって、この格好じゃ目立つじゃない」

目立つ。確かに目立つ。でも、それじゃあ木の上にいる理由にはならない。学校というところは、いくらでも隠れられる場所がある。わざわざ木の上に隠れているなんて、ちょっと不自然だ。……と、当時の一樹はいぶかしんだが、今にすれば、それは極めて彼女らしいのではないか、と一樹は思う。「土の上に立っていると、暑くて暑くてしょうがないから」という彼女の言葉が、今にして思えば彼女の本音だったのではないか、とも思えないこともない。……実は、彼女が木の上に登るのは別に理由があつたのだが。

でも、一番聞きたいことは、そんな瑣末な問題ではなかった。

思わず、一樹は訊いた。

「どうして、春菜はここにいるのさ？」

その問いに春菜は最初何も答えなかった。まるで一樹のことを焦らすかのように、むむむ、と顔をしかめて見せた。けれど、何かを思いついたかのように口を開いた。

「理由なんて、あつてないようなものよ」

ハア！？ 頓狂な声を上げる一樹に促されるような格好となつて、春菜は続けた。

「いや、よその学校つてすごく綺麗じゃない？ だからこうやって忍び込んでるの」

その言葉を、一樹は最初いぶかしんだ。何せ、一樹の学校はその時創立50年を誇る歴史ある学校、裏を返せばとてつもなくボロツチい学校だったのだ。彼女の、“綺麗”という言葉尻が妙に残った。でも、傍から見ればそういう風に見えるものなのか、と考えるのを止めた。

でも、それは彼女一流の嘘だったということを、あとで一樹は知ることになる。

その詮索をさせる前に、彼女は話の方向を変えた。

「ねえ、その洗濯物、一人で洗うには多くない？」

すっと彼女は洗濯物の山に身を乗り出してから、一樹の顔を覗き込んだ。確かに、一人で洗うには明らかに多い洗濯物だ。ランニングとハーフパンツが20揃い。つまり、40もの洗濯物が水飲み場の脇にうず高く盛られている。その図は確かに、人を絶望的にさせるには十分すぎる量だった。

一樹は、春菜の言葉に同意した。「その通りだね」

「じゃあさ」

彼女は指を一本立てた。

「ん？ 手伝ってくれるの？」

僕の軽口に、彼女は応じた。

「うん、手伝ってあげる」

「え！？ 冗談で言っただつもりだったんだけど」

「冗談だったの？」彼女は顔を崩して笑った。それはまるで、三歳児のように遠慮のない、——言い換えれば、あまり色気を感じない——、笑い方だった。「ま、いいか。手伝うよ。だって、一人でやるには量が多いでしょ？」

その言葉を皮切りに、春菜はユニフォームの一つを手にとって、蛇口をひねった。きつと大きく回し過ぎたのだろう、バシャー！と水が弾ける音がした。そして、彼女の弾ける声がした。

「はは！」

彼女はユニフォームを洗いたいわけではなかったのだろう。ただ、水と戯れたいだけのことだったのだろう。とめどなく蛇口から流れ落ちる冷たい水が、彼女の太くもなく、さりとて細くもない腕に絡まるようにまとわりつく。

一樹も、蛇口をひねった。

でも蛇口をひねり過ぎたようだった。あるいは自分の意思で強くひねったのか。どちらだったのか、一樹は覚えていない。でも、結果として一樹のひねった蛇口からはまるで滝のような水が音を立て

てタイルに落ちて、一樹を濡らした。春菜を濡らした。

「なんだかさ」春菜は言った。「水かけっこしてるみたいね、これじゃあ」

「まあ、事実そうなんじゃない？」

きつと、春菜も一樹もあんまりユニフォームを洗う気なんてなかったのだろう。どうしようもない位にうだるような暑さ。そして、どうしようもない位に救いのないだらけた空気。そんなどうしようもない状況に、きつと水がどうしても必要だったのだろう。

つまるところ、二人とも水を欲していたのだ。

きやははは、と春菜は笑った。

「でもさ、こんなこといつまでもやってると、日が暮れても終わらなくなっちゃうよ」

「確かにね」

山のようなユニフォームをほぼ同時に眺めた二人は、さつきまでの騒ぎはどこへやら、ぴたっと黙り込んで、ユニフォームの洗濯を始めた。

意外にも、手で洗うだけで汚れは落ちた。そもそも、バスケットボールというスポーツはあまり服が汚れるようなスポーツではない。野球部やサッカー部のように外で活動するような部活ではないし、そもそもインナーをしっかりと着るから、汗もほとんど染み込んでいない。それにしても臭い気がするユニフォームのだけれど、水を通せばその匂いも水に溶けだして行ってしまった。

そんな様子だったから、二人で手分けしてやってみれば、案外すぐに洗濯を終えてしまった。

「案外早く終わっちゃった」

「うん、そうだね」

しんしんと蝉の音が降り注ぐ。しんしんと周囲の音が滑り落ちてくる。そして、ジンジンと背中を焼く感覚が襲ってくる。

まるで、そんな状況に飽きたかのように、水飲み場に腰をかけていた春菜は伸びをした。

「あゝあ。もう行かなくちゃ」

「やっぱり、用があつたんだ」

一樹が茶化し気味に言うつ、春菜は笑った。

「へへへ。そうだね」

「どういう用事なの？」

「内緒」

困ったように微笑んだ春菜は、まるでこのやりとりをごまかすかのようにわざとらしく「いよっ！」と呟いて身を翻した。まるで舞っているかのように足を動かして陽光の溢れる校庭の方に向かってゆく。その様を、目で追う一樹。

でもね、と、数メートル離れたところから、春菜は言った。

「素敵な用事」

きつと、春菜が“素敵”と言うからには素敵な用事なのだろう、とぼんやりと一樹は思った。そんな一樹を横目に、春菜は続けた。

「じゃね」

春菜は踵を返した。一樹はいつまでも彼女のセーラー服を目で追っていた。

彼女の姿が見えなくなつてから、一樹はふと辺りを見渡した。大きな木に水飲み場。そして山のような洗濯物。遠くから聞こえる喧噪。さらに遠くから聞こえる蝉の声。そして陽炎の舞う校庭。全てが足りているはずなのに、何かが足りない気がした。でも、その足りないものが何なのか、一樹にはまったく分からなかった。

熱風を孕んだ風が校庭から吹き込んできた。

その風は砂を巻き上げてこちらにやってきた。思わず一樹は目を閉じた。肌にピリピリと鈍い痛みが走った。その痛みが治まって目を開いてみると、辺りの風景はすこし砂っぽくなっていた。

「しまった」

一樹は呟いた。

ふと後ろを見ると、水飲み場の横に盛られていた洗濯済のユニフォームが砂で汚れていた。なまじ水を含んでいたせいでびったりと

砂がくつついている。パンパンと叩いたくらいでは取れそうもない。結局その後、もう一度洗濯をやり直したのだった。

実は、春菜は結構な有名人だったことが後で分かった。

ある生徒曰く、“突然木の上から空っぽの缶を投げつけられた”。またある生徒曰く、“木の上から、3年3組の授業がいつ終わるのか訊かれた”。またまたある生徒曰く、“制服を貸してくれ、って木の上から頼まれた”。

とにかく、木の上にいるセーラー服姿の女の子はまるでどこかの都市伝説のように知らない者がいない話だった。

「なんだよ、お前も見たのか」

と、掃除中に友達に言われた。

「でもさ」一樹はその友達に聞いた。「どうして、その女の子はウチの学校なんかに来るんだろうな？」

最初、その友達はふうむと唸った。野球部の部長をやっていたその友達は、頭をイガグリにしていた。そのイガグリを捏ね回すように撫でてしばらく思索していたその友達は突然呟いた。

「さあ？」

まあ、実際に会って話した一樹に分からないということとは、会ったこともないだろう友達に分かるうはずもない。聞くだけバカバカしい。

結局、彼女は何者なんだろう？

彼女は工藤春菜。でも、一樹は肝心なことを何一つ知らない。名前も確かに重要な情報なのだけれど、でも、それだけでは肝心な情報とはなりえない。名前を与えられた人間がどう行動したか、それが一番大事なのだ。

でも、しばらく一樹は、“彼女が学校で何をしているのか”を知ることとはなかった。気になって、流れ聞こえてくる彼女に関する噂を集めてみた。けれど、“彼女が木の上で何をしているのか”という問いに答えるような噂は流れていなかった。まるで、誰しも彼女

が木の上にいることを疑問にも思っていないようだった。

最終夜「鈴虫と君と」【4】

というより、彼女という存在を皆あまり気に留めていないようだった。皆、彼女について噂はするし彼女を奇異な目で見ている。でも、どうしたわけか彼女の存在をいぶかしむような人はいないようだった。さも当然のように、それこそ鳥が枝に止まっているかのような言われようだった。

結局、彼女は何者なのだろう。

それは、自分で知るしかないのだろう、と一樹はぼんやりと思った。

しばらく、彼女と語らう日々が続いた。

いつも彼女は放課後になると、うちの学校の木に登っているらしかった。きつと、自分の学校が終わってから、すぐにこの学校に向かっているのだろう。

そして、一樹は何かの折につけて、彼女に話しかけた。たとえば、部の外練習の合間に。たとえば、体育館練習の休憩時間に。

「やあ」

たいてい一樹はそう声をかけた。日の光が強すぎて、木の上に彼女がいるのかいないのかまでは見えない。でも、いるだろうとあたりをつけて声をかける。すると、

「あれ？　今日は早いね」

と彼女が木の上から声をかけてくる。その声に、一樹はいつも適当に答える。“ああ、今日は外練習なんだ”とか“体育館練習なんだ”とか、適当に理由をつける。

でも、会話はいつもそれだけだった。

しばらく無言で一樹は校庭の方を眺める。そして春菜は木の上で押し黙っている。そんな座りの悪い沈黙に嫌気が差した頃、

「んじゃ」

と切り出すのはいつも一樹だった。

「うん」

春菜は、何とも表現しづらい声で一樹に応じる。

そもそも、春菜はいつも体育館脇の木の上にいた。そして、いつまでもここにいた。だから、さよならを言うのはいつも一樹なのだ。そういえば、春菜はある日、双眼鏡を落とした。

いつものように「やあ」と声をかけると、春菜が返事の代わりに双眼鏡を落としてきたのだ。

ああもう、と春菜は言った。

「驚いたじゃない！」

いつものことだろう、と思ったけれど、あえてあまり反論しなかった。その双眼鏡を取り上げた一樹は、これどうする？ と春菜に訊いた。すると、春菜は答えた。

「木の上に向かって投げ上げてくれない？」

返事と共に、双眼鏡を木の上に投げ遣った。ふわっと放物線運動を描く双眼鏡は、やがて木の端から飛び出た細い腕に捕らえられた。がしっ、と音がしそうなくらいにしっかりとした手の動きだった。

「ありがとね」

木の中から、まるで羽毛のような声が響いた。柔らかいけれど、夏の時期には暑苦しい類の声だった。

そう言えば、彼女はある日、こんなことを呟いた。

「そういえばさ、私、秋が好きだな」

突然何？ と訊くと、彼女は苦笑いして応じた。

「秋には鈴虫の声が聞こえるから。夏に響く蝉の声なんてゲロが出そう。やっぱり、秋はサイコーよ」

きつとこの言葉は、彼女にしか分からない類の理屈なのだろう、とぼんやりと思った一樹は、それ以上の質問を止めた。

そんな日々はしばらく続いたのだけれど、彼女はある日、何の前触れもなく消えてしまった。

ある日、いつものように一樹が木の上に声をかけた。けれど、返

事がない。どうしたんだろう？　と木漏れ日に目を細める。でも、そこには何者の姿もなかった。

こんな日もあるだろう、とその日は諦めた。でも、その諦めの言葉が通算30回も心の中で踊るようになったころ、さすがに一樹も気づいた。

もう、彼女はここにやってこない。

それに気づいた頃には、既に夏の頃は終わっていた。

そして、その夏が終わったころ、バスケット部は廃部となった。突然顧問の小森先生が学校を辞めたからだ。顧問の居なくなった弱小不人気部なんて、誰も顧問をやってくれる人なんていなかった。

なぜ小森先生が学校を辞めたのか、その理由については諸説流れた。公式には、「一身上の都合により」とのことだったらしいが、噂程度にはいろいろな説が流れた。給食費の使い込みがばれた、教え子との爛れた関係、校長のヅラを取ってしまった、変な薬を理科室で作ってしまった……などなど。でも、そのどれもが小森先生らしくなかった。だから、どの噂も立ち消えになってしまった。正直生徒たちは皆“小森先生”という人間がどういう類の人間なのか、よく分かっていなかったのかもしれない。

とにかく、春菜との別れと共に、一樹の青春のページもまた終わった。

春菜に再会したのは、一樹が大学に通っている頃だった。

一樹は他の級友たちと受験というふるいを受けて公立の高校に進み、特に優れた頭を持たない人間さながらに私立の単科大学へと進んだ。こうやって言葉にしてみればたった一行で済まされてしまうような道程だが、それなりに楽しい時期だったといえる。人並みに恋をしたし、人並みには勉強した。人並みには楽しい思いをしたし、人並みにはつまらない経験もした。そんな“人並み”に押しつぶされ、一樹は中学校の頃に出会った少女のことをすっかり忘れてしま

っていた。

だが、春菜はまた、現れた。

「ねえ」

一樹の背後から、甘ったるい声が届く。

時折、一樹は変な心持になる。その甘ったるい声にぞくぞくとした魅力を感じることがあるのに、どうしてこんなに反吐が出そうになることがあるのだろう、と。しかし、それを口にするのはさすがに気が引けて、一樹は結局何も言わなかった。

背後の声は続ける。

「今日の特別講義、なんだっけ」

脱ぎ捨ててあったシャツを拾い上げて着直してから、一樹は答える。

「ああ、“民法2”と“日本国憲法総論1”、“日本法制史”だな」

一樹の後ろの声が、げげげ、と芝居がかった声を上げる。

「“日本国憲法総論”かあ。あれ、めんどいんだよね」

“日本国憲法総論”の講義は、まったく人気がなかった。それは、このご時世に「法律は暗記してナンボだ！」と言い放って憚らない化石のような教授がこの講義を受け持っているせいだ。おかげで、大学を卒業するころには日本国憲法を1条から最後まで暗唱できるほどになっている。だが、日本国憲法をそらんじることが出来る意味がどこにもないなんてこと、世間を知らない学生にも分かるというものだ。

一樹は床に転がっていた細身のパンツを履きなおしつつ、聞いた。

「じゃあ、今日は休むのか？ 俺は行くけど」

「え？ 一樹、行くの？」

「行くよ、そりゃ。だって、特別講義だぞ？」

特別講義、というのは、一樹の大学に認められた制度で、夏休みの間に集中的に開催される講義を受けることで、通年単位一コマ分を取得できるシステムである。先生方にとっては大変らしいが、学

生にとつてはかなり有用な制度だった。

「ええ！？ もっと寝てようよ」

ベッドの方から聞こえる声を振り払うように、一樹はきっぱりと「行く」と宣言した。するとその声は一瞬すねたような声を上げ、けれど次の瞬間にはしぶしぶと言った。

「じゃあ、私も行く」

その言葉の一瞬後に、一樹の頸に柔らかい腕が絡まりついた。これは、いつも彼女が一樹にやるハグだ。後ろから、まるで首を絞める要領で抱きついてくる。当然、苦しくないはずはない。それに、首から肩にかけて凄く重い。

「なあ、いつも言ってるだろう、桜」一樹は後ろに視線を向けながら言う。「それ、重いんだ。やめてくれないかな」

「いいの」桜はそのハグを辞めずに続ける。「これは私の愛情表現なんだから」

桜とは、大学の講義で出会った。

二人が知り合ったきっかけは本当に些細だったことだった。それこそ、大教室の講義のときに隣り合わせて、たまたま筆記用具を忘れた一樹が隣に座っていた桜に筆記用具を借りた、みたいな。むしろ、一樹と桜がドラマティックだったのは、知りあつたきっかけではなくて過程でのことだった。

知りあつた二人はいろいろとお互いを探った。初対面の人間同士というのは、互いに互い、自分との共通点を見出そうとする。その過程で、二人は相手に自分と同じバックボーンがあることが分かった。

そのバックボーンにお互いが気づいた頃、桜はにっこりと微笑んだ。

「ああ！ 一樹君も“バイバイ検事”に憧れて法律学科に入ったんだ！」

“バイバイ検事”というのは、ある有名作家さんの手による推理小説だ。昭和モダンの空気を残したかのような古びた事務所に所属

する若き検事、通称“バイバイ検事”が名推理で以て事件の真実の形を明らかにする、といった筋書きの話だ。でも、そんな筋書きの本、きつと日本には佃煮にするくらい発刊されている。そんな“佃煮にするくらい発刊されている”本に一樹が魅了されたのは、その作者特有の妙にかつこいいせりふ回しが大きく寄与している。くどくない程度に前時代的で、“作り物さ”を感じないくらいにリズミカル。そんな絶妙なせりふ回しに、主人公“バイバイ検事”の洒脱なキャラがひどくマツチしていてある種の読み応えがある。

でも、一般に“バイバイ検事”、あまり知られた本ではない。有名作家の手によるものなのだけれど、どうしたわけかさほど読者の人気を得ていないようだった。その有名作家はもつと有名なシリーズを抱えていることもあって、“バイバイ検事”はその陰に隠れてしまっている。むしろ、“バイバイ検事”はかの作家の失敗作とみなされていた風さえあった。

今まで、“バイバイ検事”を話題に出しても、どんな読書家を相手にしたところで「？」な顔をされた。だから、“バイバイ検事”は自分一人の楽しみにしようとして心に決めていたのだ。そんな自分の横に、“バイバイ検事”の話が出来そうな人間が座っている。

マニアックな話題が結ぶ縁。

結局、その日、“バイバイ検事”の話題だけで二人は意気投合した。二人が異性同士だったという事情も手伝って、やがて二人は付き合い出した。付き合いだしてみると、二人が二人一人暮らしをしているという状況もあってお互いの家に入り浸るようになった。ちなみにこの日は、桜の家に一樹が泊っていた。

一樹も桜も、ともに相手に恋をしていた。この頃の男女にありがちな、ものすごく視野が狭い恋愛をしていた。

ともかく、一樹は言った。

「早く学校に行く気にならないと」

「うん」

一樹にからめていた手を緩め、つまらなそうに桜は頷く。

「よし、じゃあ服着て」

「うん」

のろのろと、桜は服を着出す。学生時代にしか出来ないような、Ｔシャツ一枚とタイトなジーンズ、というテキトーな姿に。

一樹はそんな桜を眺めながら、ふいに“幸せ”という言葉を噛み締める。まあ、この頃の男女が思い描く“幸せ”なんて、ほとんど紙屑同然の薄っぺらいものなのだけれど。でも、一樹は夢見ていた、桜という女の子とこれからずっとこうやって過ごせるんだろうな、という狭くてどこまでも独りよがりな青写真を。

「何？」

一樹の視線に気づいたのだろう、怪訝な顔を浮かべて桜が訊く。

「いや、別に」

一樹は、狭い世界の中で、幸せだった。

「なあなあ、知ってるか？」

学校に行って一限の“民法２”の講義を受けた後で、桜と二人で、学生がごった返すキャンパスを歩いていると、いきなりこんな言葉で後ろから呼び止められた。挨拶やらなんやらをすべて取っ払っていきなり本題に入るのは、奴しかない。そう当て推量した一樹は振り返りつつ言葉を発した。

最終夜「鈴虫と君と」【5】

「なんだよ、シゲル」

振り向いた先には、案の定シゲルが立っていた。

シゲルは、一樹と同じ学科の友達だった。同じ学科だと、どうしても似たような講義を受ける。そうすると顔を合わせる機会も多くなり、結果一言二言と会話を交わすようになる。そうして気づけはつるんで遊ぶような突っ込んだ関係の友達になった。

とはいっても、ずいぶんシゲルは一樹とタイプが違う。きっと、高校までだったら友達になるようなタイプの奴ではない、と一樹はいつもシゲルの顔を眺めては思う。一樹とは違って服や身なりに気を払うタイプ。一樹とは違ってすごく社交的。ピアス穴は開けていないけれど、きつといつか開けるだろう、と一樹は彼の派手な格好を眺めて漠然と考える。それに、あまりシゲルは勉強に熱心なタイプではなかった。テスト前に一樹に泣きついてくるのはもはや定番となっていた。一樹も一樹で面倒見がいいので、“よくこんな問題にまごついててこの大学に入れたな”と顔をしかめながらもシゲルの勉強に付き合っていたりしていた。

不思議な顔を浮かべる一樹をおいてけぼりにして、シゲルは言葉を継ぐ。

「それがさ、芸能人の××がウチの学校に入学するらしいぜ」

「ふゝん」

一樹があまり大仰な反応をしてくれないことに若干嫌な顔をしてから、シゲルは一樹の横にいる桜にも同じことを言った。けれど、桜も「ふゝん」とつれない返事をした。

その状況にシゲルは声を上げた。

「なんで二人とも、反応が薄いんだよ！」

まあ、興味無いからね、と桜は言った。ちなみに、一樹も同意見だった。

そんな会話をキャンパスの真ん中で繰り返していると、怒声が響いた。

「おい！ 待て！」

最初、キャンパスの真ん中でぺちゃくちゃと会話しているのを誰かに咎められたのかと思つて首をしかめた一樹だったが、人違いであることがすぐに分かった。

キャンパスの向こうから、まるで百メートルランナーのように全力疾走する女の子と、その女の子を追う男の人がこちらに向かつてくるのが見えたのだ。まるで陸上部員のように見事な女の子のモモ上げと、見えそうで見えない短いデニム地のスカートが一樹の目に入る。黒いＴシャツには「ＬＩＥ」と大きく書かれていた。そんなどうでもいい光景ばかりが、一樹の目に入ってきた。

「待て、つて言われたつて待てないわよ！」

そう後ろに向かつてタン力を切りながら駆け抜けてこちらに向かつてくる女の子。どうやら、一樹たちの姿に気づいている様子はなかった。だが、どうしたわけか一樹は避けようと思わなかった。ばおっと、自分に向つて近づいてくる女の子の姿を眺めていた。

やがて。

強烈な衝撃が一樹の肩にかかった。前から走ってくる女の子の肩と、一樹の肩がモロにぶつかったのだ。

「いった！」

ぶつかった一樹の肩をすり抜けてから、その女の子はようやく一樹の姿を見据えた。一樹もようやく、女の子のほうを振り返る。そうしてようやく女の子の顔を見た一樹だったが、その女の子の顔に見覚えがなかった。

でも、女の子は少し目を丸くした。

「あれ」

その困惑の声は、一瞬にしてかき消された。

「おい、待てつて言つてるだろう！」

後ろから女の子を追つてきた男がそう叫んだ。その声に、一瞬だ

け絡み合った一樹と女の子の視線がぶいっと離れた。女の子は前を向いて、また走り出してしまった。

「おい、待てたら！」

一樹の脇をすり抜け、女の子を追いかけて回している男も駆け抜けていく。後ろを向いたままの一樹には、どんどん小さくなって、大学構内の人波の中に消える女の子の後姿しか目に入らなかった。

「なんだ、あれ？」

女の子たちを避けていたシゲルが、ひょい和一樹のそばに寄った。

「だよ、なんだろう、あれ？」

同じく、女の子たちを避けていた桜もひょい和一樹のそばに寄って、さりげなく腕を抱きしめる。

「痴話げんか、かねえ」

「かねえ？」

シゲルと桜は一樹を挟んで首を傾げあう。

前を向いて、そのしぐさを何も言わないで見ている一樹。いや、もしかすると、一樹は何も見えていなかったのかもしれない。ただ、どんどん小さくなってゆく女の子の後姿を壊れたレコードのように頭の中で繰り返していたから、目から入った光景に気を払っている暇はなかったのかもしれない。

「どしたの、一樹」

「おい、一樹」

二人の声に、ようやく自分が想像の世界に溺れていることに気づいた一樹ははっと目を前に向けた。心配そうに一樹の顔を覗き込む二人の顔があった。

一樹は頭を振った。

「あ、ああ。なんでもない」

でも、と一樹はまた後ろを向いた。

どこかで、見たことのある女の子だな。

しかし、一樹の記憶には、どこにも彼女の姿は残されていなかった。

「早く行こうよ」

「あ、うん」

後ろ髪を引かれるような思いに襲われつつ、一樹は学生でござった返すキャンパス内を歩きだした。

真夏の太陽が降り注いで、すべての景色を白ませていた。

その後、三人はだらだらと講義を受けた。

その日の講義を終えた一樹は、家に帰る、と言った。

横に座っていた桜は、「珍しいじゃん。今日も私ん家に泊まればいいのに」とちよつと唇を伸ばして言った。でも、なぜかあんまり桜の家に泊まる気もしなかった（というより、週に三回は桜のマンションにお世話になっているのが心苦しい）から、一樹は桜の申し出を断った。すると、「まあ、一樹がそう言うなら……」と、少し不承不承ながら桜は頷いた。もしかすると、桜のマンションがあまり豪華過ぎて（都会の一等地に建っているマンション、しかもその20階の建物、しかも分譲。これらの情報を書き連ねれば、どれほどの豪華さは想像できるだろう）、それに食傷したのかもしれないとふと思った一樹だったが、そういうわけでもなさそうだった。

当時の一樹の家は、学校から少し離れた所にあった。

少し離れた、と言っても、歩いて何分とかいった距離ではない。

電車を乗り継ぐこと1時間。ある裏淋しい駅を降りて十分のところに一樹が借りているアパートがある。きつと、桜が「じゃあ、私が泊まりに行つていい？」と軽々しく言わないのは、その立地のせいだ。事実、桜が「一樹の家に行つていい？」と聞いてくるのは週末だけだったりする。普段はそういう桜の打算的なところにちよつとしたしこりを感じる。

だが、そのとき、一樹はなぜかほつとしていた。

なぜかは分からなかったが、一樹はあまり桜と一緒にいたくなかった。いや、あまり誰とも一緒にいたくなかった。一人で、そして自分の部屋で眠りたかった。

だから、一週間ぶりくらいに電車を乗り継ぐことになった。

久しぶりに乗る列車。そしてその外から見える風景。空いている列車の窓からは、暴力的な日の光が降り注ぐ。だが、ガンガンに効いているクーラーのおかげであまり暑くはなかった。横を見ても、まばらにしか人はいなかった。うるんな空気が車内を包んでいた。

やがて、一樹の乗っていた電車はあるターミナル駅で止まった。

その駅で乗り継ぐことになっている一樹は座っていた座席から腰を上げ、電車から降りた。その電車を見送った後、乗り換えホームに移動した。

そのホームは無人だった。

元々利用者が多いような路線ではなかったし、しかもこのお昼時では利用者など暇な学生くらいしかないのだ。灰色になったホームに、まるで約束をすっぽかされた恋人のようにふてくされたガムが、べちゃっと広がって落ちていた。そのガムを見つめながら電車を待つうち、やがてそのホームに赤い縁取りがされた電車が滑り込むようにして進入してきた。そうしてドアが一齐に開いても降りてくる人の気配がなかったから、一樹はふっと車内に入った。

狭い電車の中には、白くくすんだシートが横たわっていて、とても座る気にならなかった。かといって、ただ立っているのも億劫に思えたので、しかたなく固いシートに腰かけた。

そうしてしばらく沈黙の時を待っていても、まるで人は入ってこなかった。時計をふと見ると午後の2時だった。こんな時間に下り電車に乗るのは学生だけなのだ。

だが、そんな電車に、人が入ってきた。

一樹は思わずシートからずり落ちそうになった。

何せ、入ってきたのが、見覚えのある顔だったからだ。

ポニーテールを後ろで結び、短いデニム地のスカートと黒いTシャツを着ている女の子。「LEE」と大きく書かれているTシャツに、中身が見えそうで見えない短いデニム地のスカート。

間違いなかった。さっきキャンパスでぶつかった女の子だ。

その女の子は、（空席はいっぱいあるにも関わらず）僕の横に座った。拳二個分の距離感に、じりじりとした陽光が滑り込んだ。

だが、その女の子は最初何も言わなかった。それこそ、一樹の姿など見えないかのように、未だに動かない窓の外の景色をただ眺めていた。ちらちらと横目でうかがいつつ、彼女は俺のことを覚えていないんだろつか、とふと疑問に思っ一樹だったが、ただキャンパスで肩をぶつただけで顔なんて覚えてないか、と考え直した。それから、話しかけようかどうか少し悩んだのだが、“やあ、今日肩を君にぶつけちゃったんだけどさ”なんて口上、ナンパっぽいので言うのが憚られて、結果沈黙しているしかなかった。

そんな気まずいのかどうなのかさえ定かでない空気が車内にふわふわと貯まってきたころ、ようやく電車のドアがプシューという音を立てて閉じた。そして、少し感じる振動ののち、ようやく電車は動き出す。

そうして、ようやく外の景色が流れ始めたころ、突然一樹の横にいる女の子は口を開いた。

「……あのさ」

最初、これが自分に向けられた言葉だと一樹は思っていなかった。その時ちようど一樹は外の景色を眺めていてぼーっとしていたのもあるし、それに彼女の言葉は車内で電話か何かをしているのだろう、と適当に当たりをつけて黙っていた。

だが、その一樹の予想を裏切つて、女の子は続ける。

「……寝てるわけじゃないでしょ？」

さっきより少し声色が大きい。だから、ようやく自分にその声が向けられている可能性に思い当たった一樹は女の子の方を向いた。

「俺？」

一樹の視線の先で、女の子はうんうんと頷いた。

女の子は続けた。

「あのさ、もし人違いだったら悪いんだけどさ」

今日、。。大学で肩ぶつつけちゃったんだけど、と彼女は言った。

「ああ、君が肩をぶつけたのは、俺」

「やつぱり！」その女の子は頭を下げた。「ようやくあいつを巻いて、家に帰るかってときに肩をぶつけちゃった人と乗り合わせるんだもん。いくら偶然にしても出来過ぎてるよね、とは思っただけだ、そんな偶然もあるんだね」

ガタタン、と電車が鳴った。

一樹は答える。

「俺も気づかなかったわけじゃないんだ。電車に君が乗ってきたとき、君のことは気づいたんだ。でも、“今日、肩をぶつけたよね”なんて話しかけたら変だろうって思ってた」

「なるほどねえ」女の子はカラカラと笑った。「それじゃあ安いナンパだよな」

一樹たちの間に座りの悪い沈黙が滑り込んできた。たがいに、言いたいことがもう浮かばないとも言いたげな顔を浮かべている。きつと、話の種を探しているのだらう、その女の子は一樹のことをなめまわすようにして眺める。けれど、やがて「あ」と短く嘆息した。

どうした？ と訊くと、彼女は口を開いた。

「あのさ、もう一つ、聞いていいかな」

「なに？」

「あのさ、中学校の時、私と会ってない？ あなた」

「中学校？」

一樹は自分の頭の中にある、“中学校の友人・クラスメイト”メモリーをさらってみたが、その女の子の顔は記録されていなかった。そのうち、よく遊んだような親しい女の子の中はもちろんその女の子の顔は記録されていなかった。

一樹は正直に言った。

「ごめん、覚えてない。クラスメイトの顔ならしっかり覚えているはずなんだけど」

けれど、意外と女の子は傷ついている様子もなかった。むしろ、

当たり前、とでも言いたげな涼しい顔を浮かべていた。

「ああ、だよな。……そもそも、私、あなたの学校の生徒じゃなかったし」

「え？」

どういうこと？ と訊く前に、彼女は種明かしをしてくれた。

「ほら、あなたの学校、理科室と体育館の脇に木が立ってたじゃない？ 私、そこに一夏の間中、通い詰めたんだ。そのころよく話したじゃない、覚えてない？」

その彼女の言葉に、一樹の頭の中で中学校のひと夏の記憶が蘇った。木の上に座るセーラー服姿の女の子。そしてその木の脇に佇む一樹。眩しい木漏れ日、そしてそれ以上に眩しい彼女の笑顔。

そっだ。この子は。

一樹は半信半疑ながら、いつからか記憶の棚にしまいこんでしまった名前を口にした。

「……はるな？」

「ああ、思い出してくれたんだ？」そう、春菜は笑った。「まあ、一夏だけしか縁がなかったわけだし、覚えてくれているなんて思わなかったから、思い出してくれただけでもうれしいけどね」

そう言われてみれば、今一樹の目の前にいる少女には、中学校の頃に出会った女の子の面影が確かにあった。いや、むしろ、中学校のときのまま、彼女は大人になっていた。やっぱり、相変わらず綺麗ではなかったし、可愛いと思えるような顔ではなかった。ただ、一樹にとっては懐かしい、ただそれだけの顔だった。

「元気してた？」

その一樹の質問に、春菜は応じた。

「うん、元気してた。……その様子だと、一樹も元気そうだったみたいだね」

「どうして分かるの？」

「当然の帰結」と春菜は前置きした。「中学から高校までの間に元気じゃない奴は、大学になんか行けないし、こうやって一夏の旧交

を深めようなんて気分にはならない」

「なるほど、違いない」

心から、一樹は笑った。つられて、春菜もケラケラと笑う。相変わらず、軽い笑い方をする子だった。

二人の笑い声がこだまする、乗客わずか二名の電車。降りる駅までまだずいぶん距離がありそうだった。カラカラ、と吊革が体を揺らして笑った。

最終夜「鈴虫と君と」【6】

笑いを潜めてから、一樹は訊いた。

「なあ、ひとつ、聞いていいかな」

できるだけ、平静を取り繕ったつもりだった。それが果たして功を奏しているのかは一樹には分からなかった。だが、少しだけ春菜の顔が怪訝に歪んだ。

「何？」

その声には、こわばりが見え隠れしていた。どうやら、一樹の声色に彼女を緊張させるだけの声色があっただろう。しまった、と一樹は思ったけれど、まあいいかと本題を切り出した。

「なんで、今日、男の人に追いかけて回されてたんだ？ しかも、大学キャンパスのただなかで」

その質問に、最初春菜は何も応じなかった。まるで壊れたマリオネットのような顔をして窓の外を眺めるばかりだった。窓の外に答えがあるのかと彼女の視線に自分の視線を重ねてみた一樹だったが、その視線の先にはただの住宅街が広がるばかりだった。

しかし、まるで何かを思い出したかのように顔に生氣を取り戻してから、彼女は一樹の方を向いた。そして、無垢な声色を一樹に向けた。

「え？ ああ！ 大したことじゃないよ」

「大したことじゃない、か。……ま、一夏の旧友だからな、俺もあんまり強いことは言えないけど」と一樹は前置きした。「一般論として、あんまり異性に追われるようなことはしないほうがいい。……同性にもだけどね。きつと面倒なことになる」

「そだね、気をつける」

まるで言い訳のように、彼女はやっぱり口元だけでハハハ、と笑った。

その言葉を機会に、しばらく二人の間に沈黙が滑り込んだ。

元々一樹はあまり言葉を重ねるのが得意ではないし、彼女は彼女で何かを思案しているようだった。そんな二人の利害が妙に一致してしまい、結局沈黙が二人の間に入り込んでしまった。

眠かったこともあって、しばらく電車のガタタンという音を聞いていた一樹の耳に、突然春菜の声が届いた。

「……でもさ、許せないんだよね」

「許せない？」

一樹はただ春菜の言葉を鸚鵡返しにした。それを促しと取ったのか、春菜は続ける。

「きつとさ、世の中って理不尽なことばかりなんじゃないかな、って思うことがある。で、なんでこの世の中が理不尽かって言うと、ルールがあるのにそのルールを破っても何とも思わない人がかなりたくさん居るからなんじゃないかな。……私は、そういう人が許せない」

「えつと……」

一樹は言葉に詰まってしまった。

いったい、この話がどういう文脈の言葉なのか分からなかった。

だから、うんともすんとも言葉を発することができなかった。

継ぐべき言葉が見つからない一樹を横目に、春菜は続ける。

「で、私がやっているのは、“ルールを破っているにも関わらず何とも思わない人間”へのささやかな復讐みたいなものなんだと思う」
復讐。

彼女は復讐と言った。

でも、その言葉がどういう文脈につながる言葉なのか、一樹には釈然としなかった。

その頃、少しずつ電車のスピードが緩んできた。

「ああ、俺はこの駅で降りるんだ」

「そうなの？」

彼女はつまらなそうに言った。でも、一樹ってこの先の駅が最寄り駅なんじゃないの？ と疑問をぶつけてきたので、一樹は最近一

人暮らしを始めた旨を話した。ふうん、と興味無さそうに春菜は相槌を打った。

ようやく電車が灰色のホームに滑り込み、ドアが開いた。

「さて、と」

一樹は立ち上がった。

「またね」

春菜は二カツと笑って、顔の前で手を小刻みに振った。

「ああ、また。今度はゆっくりと話せるといいね」

一樹は電車の降り際にそう声をかけた。一樹が降りた瞬間に、ドアは閉まった。

春菜を乗せた電車を見送ったあと、一樹はふとため息をついた。何か動き出しそうな、そんな予感がした。

アパートに帰ってから、一樹のケータイが鳴った。

着信音に使っている、スピッツ「渚」のメロディアスな音が部屋中にこだまする。

そのとき一樹は台所に立って野菜を切っているところだったが、思わず包丁を取り落としそうになった。

なんで、ケータイが鳴るんだ？ と、包丁を持ちながら、一樹は首をかしげる。

普段、一樹はケータイをマナーモードに設定している。大学の講義では大抵“講義中、ケータイはマナーモードに設定するか電源を切るように”と指導される。電源を切るほどではないから、とマナーモードにしているのだが、マナーモードにするのが習慣になるうち、そのまま固定されてしまった。

だから、一樹にとって、ケータイが“鳴る”というのは少し奇異な出来事なのだ。

もしかして、無意識のうちにマナーモードを解除してたのか、と包丁片手にケータイが乗っている机の前に立ち、いぶかしげにケータイを開き（いわゆるパカパカタイプのケータイなのだ）、液晶を

眺める。その液晶には見たことのない番号が踊っていた。

昨今流行ったワン切り詐欺ではなさそうだ。それが証拠に、すでに着信音の「渚」は二回り目に突入していた。少々緊張しながらも、一樹は電話に出てみた。

「もしもし」

すると、電話の向こうから、さっきまで聞いていた声が届いた。

「やあ、一樹？ 私、私」

「私、私」じゃオレオレ詐欺だよ」

と、一声聞いて電話口の向こうにいる人物が誰なのか見当のついた一樹は、あえて軽口を叩いてみた。すると、電話口の向こうの人物はカラカラと笑った。

「はいはい。分かったよ。春菜です」

「でなんだけど」電話を握りながら、一樹は言った。「どうして、この番号を知ってるのかな？」

その質問に、遠まわしに春菜は答えた。

「いやあ、最近のケータイって便利だねえ。紫外線だか赤外線だ通信できるんだもん。一発でピコピコつとやれば、相手の情報を手に入れ放題。いやあ、素敵素敵」

「素敵素敵」じゃないだろ」と一樹はちよつと声に棘を込めた。

「ケータイの番号が知りたいなら、普通に教えたのに。そういう泥棒まがいなやり方するなよ」

「ゴメン」と、彼女は言った。「断られると面倒だったから

”

「面倒？」

一樹の言葉に、春菜はあたふたと答える。

「ああいや、こつちのこと」

「まあ、いいけどさ」

一樹は包丁を机に置いた。

「あのさ」少し、電話口の向こうで春菜は声を潜めた。「折り入って、ちよつとしたお願いがあるんだけど」

「折り入って、ちょっとしたお願い？」

話を先に促された格好になった春菜は言った。

「一樹の大学についてなんだけど、大学で流れてる噂を集めてほしいの。」

「噂？」

「そう、噂」まるで大事な言葉のように、“噂”という言葉の口にする春菜。「どんな噂でもいいんだ。どんな荒唐無稽な話でも。どんなバカバカしい話でも。どんな噂話でもいいの。とにかく、噂を集めて。ただし、自分から探そうとしなくてもいいよ。一樹の耳に入った噂話を、私に話してくればそれでいい」

「ふうん」と僕はケータイを持つ手を変えてから言った。「つまり、うちの商学部が核爆弾を密かに作ってる」とか、“うちの商学部長は実は超がつくMだ”とか、“法学部の教授が裏口入学のあつせんをしてる”とか、そういうどう見ても荒唐無稽なバカバカしい話であっても、春菜に伝えればいいわけだ。……いいよ、OK、引き受けた」

実は、一樹の頭の中にはこの話を断るという選択肢もあった。どうやら、春菜はヤバいことに足を突っ込んでいるか、あるいは本人がヤバいのか。ともかく、春菜の周囲にはある種の危険が垣間見える。でも、“流れてくる噂を集める”だけだ、という侮りが一樹の胸中にはあつたし、好奇心のようなものがうずくのも事実だった。そんなこんな紆余曲折を含んだ“OK”だった。

「その噂、ホント？」とケラケラとバカ笑いしながら、彼女は続けた。「でも、そういうバカバカしい話であっても逐一私に伝えてくれればそれでOK。話が早いね」

「お褒めにあずかり、恐悦至極」と前置きした一樹は付け加えた。「ちなみに、“うちの理事長”云々は今思いついただけの小噺。でも、“商学部の学生”云々と“法学部の教授”云々は噂としてはあるよ。……ま、どちらも嘘だろうけど」

「ああ、うん、分かった」

それじゃ、と言って、彼女は電話を切った。

半ば一方的に切られた電話。ケータイを机に置いて、また包丁を握り直した。そして台所に立ってまた野菜を切り始めた。

噂を集める、か。

一樹は野菜を切りながら、ふと春菜から頼まれた頼まれごとについて思いを馳せてみた。でも、その春菜の頼まれごとが何を意味するのか、一樹には分からなかった。

ザクザク、という包丁と人參が奏でる音だけが、部屋中に響いていた。

一樹は目を見張った。

噂というのは、ここまでいろいろあるものなのか、と。

今の今まで、噂というものを意識して生きてこなかった一樹からすれば、それは情報の氾濫だった。

そもそも、“噂”というものの自体、“事実か否か分からない情報”とでも定義できるものだから、そんなものは巷にたくさん溢れているのだ。それこそ、「あの子とあいつ、付き合ってるらしいぜ」というのだって、本人たちが認めるかあるいは決定的な証拠を掴まない限り、その情報は“噂”なのだ。一樹の見たところ、その手の“「事実」への格上げを待っている噂」というのが相当数あることが分かった。

そしてその一方で、どうしようもないくらい荒唐無稽でバカバカしい噂もあった。たとえば、「旧日本軍の軍人さんが、うちの大学のキャンパスに隠れている」という噂を耳にした。あるいは、「うちの大学は秘密裏にパンダを飼っている」という噂があった。正直これはデマだろう、としか言いようがなかった。きつと、この手の噂こそが“都市伝説”という奴なのだろう、と一樹はなんとなく思った。

また、嘘か真か判断しかねるような噂も多かった。たとえば、「うちの学生が大麻草を栽培している」とか、「。。。部の一部部員が

婦女暴行に手を染めているらしい」とか、「うちの学生が、新たなＩＴビジネスを立ち上げた」とか。確かに一樹の目から見れば奇異な噂なのだが、世間一般ではさほど奇異と言い切れなさそうな噂だった。もちろん、大麻草を栽培している学生も、婦女暴行に手を染めている学生も、ＩＴビジネスを立ち上げた学生も、一樹は実際には見知らない存在だ。だが、ニュースなどで流れる情報からすると、確かにそういう人間が一部にいるらしい。そういう意味で、荒唐無稽とは言い難い。

しかし、一樹はその噂の全てを春菜に報告した。

“どんなに荒唐無稽であろうが” “どんなにバカバカしい話であろうが” という約束である以上、その全てを伝えた。

どの話に対しても、春菜は同じような反応をした。“誰と誰が付き合っているらしい” という類の噂も、“旧日本軍の軍人さん” 云々の話も、“大麻草” 云々の話に対しても、春菜は冷静であり続けた。“ふうん、なるほどね” と一歩間違うと無関心にも取られかねない薄い相槌を打つばかりだった。

でも、不思議と彼女の相槌は、すんでのところで無関心なものとは取られない何かがあった。

だから、あのころの一樹はどこか嬉々として大学の噂を集め、そしていちいち春菜に報告していたような気がする。

そうやって過ごすうち、この年の一樹の夏は、半分くらい過ぎ去ろうとしていた。

「ねえねえ、一樹」

桜のマンションに泊まっていたある夜、一樹は桜から声をかけられた。その時一樹は自分の部屋に置かれているものと比べて何倍も大きいテレビでバラエティ番組を見ているところだった。画面に大写しになっている新人芸人から、視線を桜に移した。

一目で、桜の様子がおかしいことに気づいた。

桜はいつも、にこにここと笑っている子だった。でも、その時の彼

女はひどく落ち込んでいるように見えた。さつきから、部屋にこもって誰かと電話をしていたようだったから、誰かと喧嘩したのだろうか、と一樹は漠然と考えた。新人芸人のギャグが後ろでうるさかったが、一樹は構わずに訊いた。

「どうした？」

最初桜は何も言わなかった。頭を振って、ぼうつと一樹の顔を眺めていた。

一樹はさらに訊いた。

「どうした？　だれかと喧嘩でもした？」

「……いや、そうじゃないんだけどさ」

彼女はビッチリと革張りされた椅子に座りこんだ。それでも、一樹から視線を外さなかった。

「どうしたの？」

さらに一樹は重ねて聞いた。すると桜は、意を決したように表情を明るく変え、声色まで明るくして言葉を投げかけてきた。

「あのさ、“バイバイ検事”の話をしたいなあ、って思って」

「突然だなあ」

「いいの！」

桜はどこか強引なところがあつた。それは、ある貿易会社の社長の娘という生活環境のせいなのかもしれない。

そんな桜は“自分勝手に”続けた。

「でもさ、ただ“バイバイ検事”の話をするのもつまらないから、

“IF”の話をしましょう」

「“IF”？」

「だって」桜は言った。「“バイバイ検事”は単行本1刊しか出てないんだもん。二人の間で“バイバイ検事”の話は出尽くしちゃった気もするから、“こんなシチュエーションだったら、バイバイ検事はどうする……”っていう私のお題に、一樹が答えてほしいの」「大喜利みたいだな」

「いいの！」　またもや桜は強引に乗り切って、強引にその“大喜利

”を切り出した。「もし、“バイバイ検事”が熱い緑茶を飲んだらどうなるかしら」

“バイバイ検事”の主人公、バイバイ検事は「ティーの類は受け付けないものでね」というフレーズをよく使う。作中で、その志向は好き嫌いのみに根ざしたものでないということは作品の表に裏に叙述されていた。ネットなどで“バイバイ検事”の感想を検索してみると、大体のレビューがバイバイ検事の“茶を飲まない”というキャラクターに対してなにがしかの感想を述べている。

一樹は答えた。

最終夜「鈴虫と君と」【7】

「別に、どうにもならないと思う」

「なんで？」

「そもそも、“バイバイ検事”が茶を飲まない、っていうのは、ただのキャラつけだと思っただよな」

「キャラつけ？」

「うん。あれだけ何か伏線を張っておいて、“実はただのキャラつけでした”ってオチだったら面白いと思っただよな、俺的には」

その言葉に、桜は笑った。その笑い方が誰かに似ていたような気がした一樹だったが、それが誰だったのか思い出せなかった。

「……なんでだろう。一樹がそう言う、そういう風にも思えてくる。確かに、ただのキャラ付けなのかもしれないよね」

「そうだな」

しばし二人で微笑みあったあと、彼女は次のお題を出してきた。

「もしも、バイバイ検事に兄弟がいたとして、その兄弟が悪いことをしたら、バイバイ検事はどうすると思う？」

その質問に、即座に一樹は答えた。

「それでも、きっとバイバイ検事はその兄弟を法廷に立たせてその罪を糾弾すると思う」

作中でバイバイ検事は正義感の強い検事としてキャラクター付けがされている。それに、作中に一切親兄弟は出てこないものの、家庭に事情を抱えた犯人に心を動かされたり、あるいは仲間に対して熱い思いを持つキャラクターとして描写されている。

つまり、桜のこの質問は、その二つの性質の間を衝く質問なわけだ。しかし、一樹は即座に答えた。それは、犯人に心を動かしながらもその罪を許さないというバイバイ検事の行動の裏打ちがあったからだ。

その言葉に、桜は淡く頷いた。

「……ああ、そうだよ。バイバイ検事なら、そうするよね。きつと」

「うん、あくまで俺は、そう思う」

その時、一樹は桜の一切合財を見逃していた。「きつと」と口にした時の、桜の声音の震えも。「そう思う」と一樹が力強く答えたその瞬間に、桜の目にこもった黒い光も。そして、明るく振舞っている彼女の心の隅から広がる、深い闇にも。

一樹は、気付けなかった。

ある日、一樹は春菜に電話で呼び出された。

「悪いんだけどさ、今すぐ。○駅前に来てくれない？」

そう指定された駅は、一樹の実家の最寄駅だった。その電話を受けたときは特別講義の合間の休み時間だった。きつと、向こうはそういう時間を見計らって電話をしてきてくれているようだった。

わかった、行くよ、ただし一時間くらいかかるけれど、と答えて電話を切ると、横にいるシゲルが一樹に声をかけた。

「なんだあ？　桜ちゃんから電話か？」

「いや、友達」

わざと相手の情報をばかして、一樹は答えた。

一方、ふうんと相槌を打ってから煙草に火をつけたシゲルは空を眺めた。シゲルの視線の先には、とてつもなく強く輝く太陽と、まっ白な巨体を誇る入道雲があった。

「なあ、最近、桜ちゃん来ないな」

「ああ」

一樹も頷いた。

こここのところ、桜が学校に来なくなってしまった。マンションに行つて、エントランスで部屋を呼び出しても（オートロック式なのだ）、反応がない。メールや電話もしてみているのだが、一切反応がない。あの、バイバイ検事の話をした夜以来、一樹は桜に会っていない。

「……事情を知らないのか、お前は」

「ああ」

一樹は頷いた。そして、電話で友達から呼び出しがあったから、このあとの講義は全部フケるよ、と言った。するとシゲルは「おう」とだけ答えた。

座っていたベンチから立ち上がる時、シゲルは口を開いた。

「そろそろ、夏も終わるな」

「そうだな」

相槌を打って、一樹はその場を後にした。

そのあと、電車を乗り継いで一時間と少しで、ようやく指定された駅に着いた。久し振りに踏んだ実家近くの最寄駅。何も変わっていないかった。

その駅を出てすぐのところにはオーソドックスな噴水があつて、この駅を使う人たちの憩いの場になっている。前に来たときには冷たそうな水を天に向かって放り投げていたのだが、そのときには噴水は動いておらず、ただの池のようだった。その噴水のほとりに、春菜は立っていた。相変わらず、短いデニムスカートにＴシャツ姿だった。

「や」

彼女は軽く手を上げた。

「おう」

一樹も手を上げた。

逆光になつて見えない彼女の顔を見るのを諦めた一樹は、静かな池のようになつていている噴水に目をやった。

「噴水が珍しい？」

きつと、アホ面でも浮かべていたのだろう、春菜に訊かれた。

「珍しいわけじゃないさ。高校時代までは毎日見てたよ」と一樹は言い訳をする。「でも、噴水を止めちゃったんだ、ここ。維持費が掛かるのかな」

「何言つてるのよ」と、春菜は顔をしかめる。「今、全国的に水不

足なの、知らないの？」

「ああ、水不足」

水を天に放たない噴水。それは、ただの淀んだ池だった。たぶん、一年に一度も掃除をしないのだろう、底にはヘドロのような藻のような、それとも腐葉土の類なのか、とにかく何なのか分かりかねる沈殿物が全体に沈んでいた。流れを失った池の中に、生き物の姿は認められなかった。

噴水を眺める一樹の脇で、春菜は呟いた。

「……実はさ、今日呼び出したのには理由があるんだ」
「理由？」

噴水から目を離さずに、一樹は訊いた。

しばらくの沈黙ののち、彼女は口を開いた。

「そう、理由。実はさ、ちょっと種明かしがしたくなつてさ」

種明かし。隠していた事実を明らかにすること。あるいは、ペテンを明らかにすること。つまり、“種明かし”という言葉には常に“隠されている事実”が存在する。

でも、彼女は……と、一樹は思った。彼女は何を隠しているというのだろうか。

そう訊こうとした一樹だったが、その問いを発する前に、彼女は言った。

「ま、こんなところで立ち話も何だから」

駅から踵を返し、住宅街を進むこと20分。前を歩く春菜が足を止めたのは、住宅街の一角にある、個性の欠片もない一軒家だった。強いて特徴を上げるとすれば、屋根が赤くて外壁が白い。バンダグラフが都会の方を向いていた。植わっている木は、あまり手入れされていない様子はなかった。だが、こうやって挙げた特徴も、きっとこの住宅街には何十軒の家にも該当する特徴なのだろう。

そんな無個性な家の前で、彼女は一樹の方に振り返った。

「ここ、私の家なんだ」

「春菜の？」

あんまり、意外な気分にもなれなかった。たとえば、この家に住んでいるのがモデル級の美人だったら驚くのだろうし、桜みたいなお金持ちの娘が住んでいたとしても驚く。だが、春菜の家と言うのなら、そんなに違和感のある家ではなかった。

「私の身の丈に合った家よね」

さすがに同意するわけにもいかず、一樹は黙り込んだ。

一樹の答えを期待していたわけではなかったようで、まるで一樹のことなど意に介さないように玄関先のステンレス製の扉を開け、デニムスカートのポケットから鍵を取り出して、玄関のドアを開けた。そして、一樹の方に振り返って、

「あがつていつてよ」

と無感動に言った。

もちろんあがらないわけにもいかず、一樹は春菜の後に続いた。

家の中は、がらんとしていた。

一言で言えば、生活感がなかった。玄関を見渡して、一樹は少しうすら寒い気分になった。恐ろしく綺麗なのだが、一方で綺麗すぎて足の踏み場に困るようだった。あまりに綺麗すぎて、完璧すぎて腰をかける時に手すりに手をかけていいのかさえも悩んでしまうような体たらくだった。リビングに通された。でも、そのリビングもソファアの配置やカーペットの間隔、そしてクッションの配置までが完璧すぎて、身の置き場に困った。どこに身をおいていいのか、一樹には分かりかねた。

「あれ、なんで立ってるの？ そのソファアに座ってもいいのに」と、コーヒーを運んできた春菜に笑われた。

とりあえずソファアに座った一樹は、コーヒーを受け取った。そして一口飲んでみる。とにかく苦かった。カラカラと笑った彼女は一樹の横に座る。

「で」一樹は訊いた。「種明かし」って、何？」

最初、春菜は一樹の顔を見つめるばかりだった。いやに陰しい顔

をのぞかせながら。でも、その表情をお面でも外すかのようにコロツと変え、彼女は明るい口調で話し始めた。

「実はさ、一樹に頼んでたことなんだけどさ」

「頼んでたこと？ ああ、“噂を集めろ”って奴？」

彼女は頷いてから続ける。

「うん、あれ、もういいんだ」

「もういい？ つまりは、俺はお払い箱？」

「まあ、そんな所」

春菜はあいまいに笑った。彼女らしからぬ笑い方だった。

でも、と前置きして、彼女は続ける。

「でも、助かったんだ。正味な話」

「まあ、ならいいけど……」

一樹はマグカップに入っているコーヒーをすすった。いやに粉っぽくて、いやに苦かった。

彼女もコーヒーを一口すすり、その苦みに顔をしかめてから続ける。

「でね、一樹に言わなきゃならないことがあるんだ」

「言わなきゃならないこと？」

「初めて会ったとき、私が何をしていたのか。つまり、一樹の中学の木の上で、私が何をしていたのか」

「え？」

正直、まったく想像していない言葉だった。普通、この話の展開だったら、“噂を一樹に集めさせた理由”とかを話してくれるものとはかり思っていた。しかし、彼女の口から出た言葉は、一樹の想像の斜め下をいった。

そんな戸惑いがちの一樹を尻目に、彼女は語り始めた。

「私はね、あそこで調査をしたの」

「調査？」

「うん。素行調査」

「探偵みたいだな」

「まあ、やっていたことは探偵みたいなことだから。……いや、正確にはデバガメみたいな真似かな」と自嘲してから、彼女は続ける。「では問題です、あの木の上からは、何が見えたでしょう」

「何が、って？ ……位置的に、体育館が見えて運動場が見えて…

…」

「あと、理科室、正確には理科準備室もよく見える」

「どういうことだよ」

彼女は続けた。

「私はあそこで、小森先生、だっけ？ 理科の先生の素行を調査してたわけ。正確には覗き見だけど」

「なんで、そんなことを？」

「うーん、最初は噂だった」と春菜は言った。「。。。中学校の理科の先生と生徒が、よろしからぬ関係にある”””っていう噂。まあ、そんな噂自体はどこにでもある噂だけど、一応調べてみた。そしてらクロだった、ってことなんだけど」

「え、クロ？ あの小森先生が？」

一樹は思わず聞いていた。あの風采の上がない小森先生が？ 中学生と？ 小森先生の顔と、俗に言う“爛れた関係”という言葉がいま一つ結びつかなかった。

だが、彼女は頷いた。

「うん、三年生の澤田さんが相手だったの」

澤田さん。脳裏にふと、理科準備室に入ってゆく澤田先輩の後姿が蘇る。

で、と彼女は続けた。

「その二人のカンケーを、教育委員会に垂れこんで万事解決、ってわけ。もちろん写真付きで、ね」

なるほどな。ようやく、中学校の頃に、宙ぶらりんのままで“終結”してしまった出来事の糸が、すべて解けたような気がした。どうしてあんな突然に小森先生は学校を辞めたのか。そして、どうして春菜が学校に現れなくなったのか。理科室に消えた澤田先輩の後

姿。その全てが意味を持って一樹の中に落ち着いてゆく。

「なあ、分からないんだけど」

一樹は言った。

何が？ という春菜の問いに、一樹は続けた。

「どうして春菜は、そんな昔の話をするんだ？」

その質問に、彼女ははにかむように微笑んだ。

「それはね、ヒントだから」

「ヒント？」

「ちよつとあんまり具体的なことは言えないんだけど」と彼女は言う。「これから、大きな事が起こる。きっと、一樹の周囲がかなり荒れることになると思う。その“大きな事”が何なのかは、まだ一樹には教えられない。本来なら、協力者である一樹には出来れば私が知りうることを全てを教えてしまいたいんだけどね。でも、それはちよつとキケンなんだ。何事にも、時機つてものがあるから。でも、その事が起こってしまったてからだと、きっと私は一樹に事情を話すことが出来ない。だから……」

「“ヒント”だけでこれから起こることを理解しろ、ってこと？」

「そういうこと」

あんまり自信がないな、と呟くと、彼女は笑った。そんな、難しいことじゃないわよ、と。

「なあ」

一樹は声を発した。その声に、最初春菜は戸惑ったようだった。きつと、彼女はすべて語りつくして、これ以上の言葉を用意していなかったのだろう。だが、一瞬でその戸惑いをどこかに捨て去ってから、話を先に促した。促されるがまま、一樹は口を開いた。

「まだ春菜は、肝心なことを喋っていない気がするんだけど」

最終夜「鈴虫と君と」【完結】

「肝心なこと？」

春菜の疑問に、一樹は答えた。

「動機さ」

動機？ と鸚鵡返しにする春菜に、一樹は続ける。

「だって、小森先生も澤田先輩も、別に春菜と特段の知り合いってわけでもないんだろ？　なのにどうして、二人の仲を引き裂いたりしたんだ？」

その質問に対し、彼女は最初その質問を咀嚼するような表情を見せた。それは、どこまで喋ればいいのかを思案しているようでもあったし、ただ質問の意味が取れなかったようにも見えた。けれど、結局最後には意を決したように意志の強そうな眼をこちらに向けた。「仲を引き裂こうとしたわけじゃない。ただ、不自然なものを自然に戻しただけ」

一樹は何も言わなかった。話を先に促すポーズだった。

彼女は続けた。

「だって、教え子と先生の恋愛なんておかしいでしょ？　それは、ルールとしてやっちゃまずいことのはずなのに、小森先生はそれを犯した。だから、私が罰を与えたの」

「だから、どうして？」

「言っただでしょ？　ルール違反だから。ただそれだけ。ルールを逸脱しておいて、幸せに生きようなんて発想自体がおかしいのよ」

「うん、その気持ちはわかる、と思う。けど」と一樹は言った。「なんでそんなに春菜が“ルール”に執着するのかがさっぱり分らない。だって、小森先生と澤田先輩は確かに“爛れた関係”にあつたのかもしれない。いや、実際にそういう関係だったんだろ。でも、そんなの、当事者にしか関係ないじゃないか。別に、小森先生たちがどんな関係にあらうと、別に俺は困らないし、春菜だって困

らないはずだ」

「困らないけど、許せない。それだけの話よ」

それだけの話。そう言い切られてしまったのは、諦めるしかなかった。

その間、春菜は真面目な顔を一樹に向けていた。真面目、というよりは、悲壮な顔だった。いや、悲壮とも違った。強いて言うなら、それはやはり真面目顔だった。しかし、その真面目顔には、誰も入り込めない壁のようなものが見え隠れしていた。

「分かった」

コーヒーを飲み下して、乱暴にマグカップを机に置いてから、一樹は立ち上がった。

「ねえ」

春菜は一樹を呼び止めた。既に足を踏み出していた一樹は後ろを振り返った。

「どうして皆、私のことを理解してくれないのかな？ “ルールを破ったら罰を”なんて、幼稚園児にでも分かる理屈なのに」

その言葉に、一樹は答えた。

「理解はできるけど、納得はできない。それだけの話だよ」

「ああ、なるほどね」

か細い声で、彼女はそう呟いた。

そうして、一樹は春菜の家を後にした。

それから数日後、一樹のアパートに小包が届いた。

“天地無用”・“生もの注意”・“この面を上”・“割れ物注意”……と、思いつくばかりの注意を喚起する赤いシールが貼られまくっていて、もはやその中身が何なのか、想像もつかなかった。大体中型のタッパー位の大きさの包みだった。なお、差出人欄には名前が書いてなかった。

けれど、その小包の受取人欄には確かに一樹の名前と住所が踊っていて、受け取らないわけにもいかないようだった。

まさか、爆弾の類じゃあるまいな、と疑りつつ、小包の包装を破つてみた。破つてから、身に覚えのないものを送りつけて後で料金を請求する詐欺がある、ということに気づいて、ああ、しくった、と包装を解いたことを後悔し始めたころ、その中身が明らかになった。

包装の中には、虫かごがあつた。四角いタイプで、上に空気穴が空いていて……というオーソドックスなタイプのものだった。

その中には、薄く土が敷き詰められていて、その中に黒っぽい虫が何匹か入っていた。大きな丸い羽根を持った、パツと見た感じだとハエか何かのような虫だった。けれど、その虫は丸い羽根を少し広げ震わせて、ようやくその虫が何なのか分かった。

りん。

羽根の震えに呼応するように、鈴の音が鳴り響いた。

「鈴虫……」

季節はずれの鈴虫。気の早い鈴虫。思わず一樹はそう呟いていた。鈴虫の様子をじっくり見ようと考えた一樹は、両手で虫かごを取り上げた。そうして両手で取り上げようとしたときに、一樹はあることに気づいた。

「あれ、これ何だ？」

その虫かごの下に、なにやら紙切れがある。埼玉の不動産屋さんが配っているメモ用紙らしく、下の方にその不動産屋さんの名前と住所、連絡先が印刷されていた。そして、上部にはこう書かれていた。

“いくら思い返しても、一樹しか渡す相手が思い浮かばなかった。預かって。私、鈴虫に生まれたかった。だって、鈴虫は誰も恨まないから。

春”

ひどく乱れた文字だった。きつと、どこかで走り書きでもしたのだろう。コンビニか運送屋の店先でさつと書いたような、ひどく乱

暴な印象の字だった。

その字は、一樹のことを罵倒しているようにも、一樹に助けを求めているようにも見えた。ただ、見ていて心苦しい類の字であることだけは確かだった。

妙な居心地の悪さに襲われた一樹はその走り書きを包装紙といっしょに丸め、ゴミ箱に突っ込んだ。でも、さすがに鈴虫を丸めてしまうわけにはいかないようだった。つまるところ、面倒を見るしかなさそうだった。虫かごを机の上に置いてから、パソコンをインターネットに接続して、“鈴虫の飼い方”を検索した。

検索してみて分かったことだが、どうやら割と大きな水槽やら打ち欠いた素焼きの花瓶やらが必要そうだった。かといって、一樹のアパートには絶対に存在しないものなので、仕方なく一樹はホームセンターに足を向けた。

そうやって鈴虫の“家作り”に精を出していたころ、大学の方で動きがあった。

うちの法学部の教授が突然罷免された。

そして、法学部の学生百名ほどが、何の前触れもなく除名処分となった。しかも、大学側は一切を説明しないまま、“諸般の事情により”の一点張りで押し切ろうとした。

一樹の大学には自治会という組織があつて、つまるところ大学生の労働組合みたいなことをしている組織なのだが、「学生が何の説明もなく除名処分を受けてしまうとなると、大学に対して不信感を抱かざるを得ない」と突っかった。それは当然の反応だろう。

その自治会の突き上げに屈服したのか、大学側は法学部学生の大量除名の理由を文書にて回答した。

その回答が、波紋を呼んだ。

大学側の言うところによれば、その除名となった約百名は裏口入学だった、ということだった。そして、その裏口入学のあつせんをしていたのが、先に罷免された大学教授なのだという。

ことがここに至って、この件にマスコミが飛びついた。

割と高学歴で知られる一樹の大学の法学部は、かなりの難関校だった。そこに、年二十人単位の裏口入学があったというのだから、かなりショッキングな事件には違いなかった。だが、マスコミの騒ぎ方は異様だった。ヒステリックな文言が新聞紙上に踊り、裏口入学のあっせんをしていた元教授宅には連日マスコミが押しかけた。さらには、裏口入学をしていた学生に、某有力政治家の孫がいたことが判明し、その件で国会まで巻き込んだ大騒ぎになった。

そんなまるでお祭りのような状況で、ついに死者が出た。

あっせんをしていた元大学教授。彼が、首をくくってしまった。遺書には、“教育者にあるまじきことをしてしまった”という反省の言葉が並んでいたという。だが、彼の死を悼む言葉はどこからも出てこなかった。

そして、某有力政治家の秘書も、首をくくった。その政治家の孫の裏口入学を推し進めたのが、その秘書だとのことだった。そして、その責任を取る、と書き残してその秘書はテルテル坊主のように容易く首をくくった。この秘書の死について、評論家は“まあ、トカゲのしっぽ切りですね”と、能面面を下げてコメントしていた。

この事件は、ネット上でも話題になった。

“社会悪は許すまじ！”という書き込みの元、公には明かされていなかった除名処分を受けた学生の名前や顔写真が流出した。中にはその学生の友人がネタ元としか思えないほどに純度の高い情報がネット上にアップされた。

そして、そのアップされた名前の中に、一樹は見慣れた名前を二つも発見してしまった。

桜と、シゲルの名前だった。

それを発見してから、一樹は二人に連絡を取った。だが、いつ電話をかけても話しか電源を切っているようだった。どうやら、シゲルはネット上で名前と共にケータイの番号までアップされてしまったらしい。そのうち、シゲルはケータイの番号を替えたらしく、

電話そのものがつがなくなってしまった。

一回、桜の住んでいたマンションに行ってみた。だが、桜が住んでいるはずの部屋番号の上に、桜の上の名前は書かれていなかった。ただ、白い札が掛かっているばかりだった。念のためエントランスで呼び出してみても、反応がなかった。

反応がない桜の部屋番号をダイヤルしながら、一樹は“すべて、春菜の仕業なのか”とため息をついた。いや、目に見える事象すべてが彼女の力によるものではないだろう。正確には、彼女が曲がりなりにも立っていた石垣の均衡を、小さな石一個を引き抜くことで奪ったのだ。バランスを失った石垣は、どんどん微細ながらバランスを崩す。そして、そのバランスの微妙な崩れが積み重なって、末端では大きなズレとなった。そして、そのズレが石垣を崩す原動力となった。そういうことなのだろう、と一樹はぼんやりと思った。

そして、実は自分も、その石垣の小さな石を引き抜く協力をしていたという事実気づいて、自分に嫌気がさした。この結末を呼んだのは、あるいは自分だった。その事実は今更ながら一樹は気づいた。

誰もいない部屋を呼び出しながら、一樹は涙を流した。けれど、オートロックの扉が、一樹に同情する気はなさそうだった。

春菜の行方も探してみた。ダメ元でケータイに電話してみた。だが、彼女もまたケータイの番号を変えていた。彼女の家にも行ってみた。だが、その家があったところは既に更地になっていた。

こうして、この年の一樹の夏は終わった。この夏以来、一樹は桜と会えていない。シゲルとも会えていない。

そしてその夏以来、一樹は春菜と会っていない。

りーんりーんと鳴く鈴虫。

暗い部屋の中、一樹は長い追憶から目覚めた。

そして、まだまだ冷たいビールをすする。緩めていたネクタイを

ぐいつと乱暴に外す。窓の外に目をやっても、何も見えなかった。そして、ため息をついた。

あれから、一樹は一人で大学の講義に出続けた。一番仲の良かった友達と恋人が両方とも裏口入学だったことで、一樹にも疑惑の目が向いた。とはいっても、（マスコミで流された情報が正しければ）十点百万円なんて金額、一樹の家の経済状況で払えるはずもなかった。だが、周りの目が怖くて結局孤立するしかなかった。

そして曲がりなりにも大学を卒業し、どうにか商社に入社できた。その入社面接でも、裏口入学の話は尾を引いた。“○○大学法学部”という言葉を見つけるや、面接官たちは一様に嫌な顔をした。

社会人になって初めて、“○○大学法学部”の呪縛が解けた。その記念のつもりで引越した。引越した際に、春菜が俺の居場所を知らないのはまずいのではないか、と一通り心配してから、大丈夫かと考え直した。きっと、彼女が俺を見つけてるのは別に造作もないだろう、と。

ようやく社会に出て三年になって、あの事件のことを忘れつつある。だが、それと同時に桜やシゲルの顔もまた、どんどん忘却の彼方に押しやられていく。それが怖かった。

もしかすると、春菜から届いた鈴虫を飼っているのは、あの事件のことを忘れたくないからなのかもしれない。

鈴虫が春菜にとってどういう意味があるものなのかは分からない。でも、一樹にとって鈴虫は“あの事件”と密接につながった存在なのだ。

元々凝り性だったこともあった。それに、“預かってて”という文面も気になった。いつかは返さなくてはならない、つまり、死に絶えさせてはならないということだった。だが、もともと鈴虫は一年程度しか生きない。だから、鈴虫の繁殖を試みた。深く土を入れ、そして出来るだけ生殖出来るような環境を整えた。その結果、それこそウジャウジャと鈴虫が沸いた。どうやら、あまり心配しなくても死に絶えることはなかったらしい。増えすぎた鈴虫は河川敷に放

してやった。そんなことを大学時代に数年、社会人になってから三年続けるうち、一樹の住んでいたアパートの近辺や現在住んでいるマンション近辺は鈴虫の音が鳴りやまない、風情のある土地へと変貌していた。

鈴虫といえば、ある噂を聞いた。

あの事件の後、一樹は中学校の同窓会に出た。その同窓会、きわめて内輪で行われたもので、気心知れた連中しか来ないような性質のものだったのだが、そこに、なぜか見慣れない奴がいた。誰？と聞くと、俺の親友で、隣の中学生に通っていたんだ、と隣に座っていた友人が紹介してくれた。

その新顔——便宜的にA君と呼ぼう——は、よくしゃべる奴だった。隣の中学に通っていたにも関わらず、まるで一樹の中学に通っていたかのように会話に加わる。本当に隣の中学生だったのか、といぶかしく思うところに、思い出したかのように自分の中学について話す。そんな奴だった。

A君の話の中で、“鈴虫”という単語が急に飛び出たときには驚いた。A君は突然、ある話を始めた。

A君が小学生の頃、同じクラスにいつも鈴虫のかごを持ち歩く女の子がいたという。いつも、虫かごの中の黒い虫を眺めながら、目を細めていた。もちろん、あんまり虫を好まない女の子の輪からは外されてしまったし、かといって男の子の輪に加わるにはその女の子は活発でないようだった。いじめられているとかではなくて、ただ孤立していただけだった、とA君は言う。

ある日、ある男子がそのかごをいたずら半分に取り上げようとしたことがあった。その時、普段はぼけっとしていた例の女の子が、“キレた”。いたずら気分で取り上げようとした男子は本当に面喰っていたらしい。そして、戸惑いのまま、男子にするように乱暴に殴りつけてしまった、という。もちろん、男子と比べて体の小さかった女の子は男子の拳骨に吹っ飛ばされて泣いた。でも、泣きながら必死で抵抗した。その男の子に食ってかかり、爪で顔を引っ掻い

た。

「その件で、皆、あいつの鈴虫かごには触っちゃ駄目だ、って言い合ったよ。そして、あれはどういう意味合いのものなんだろう、って皆噂しあったよ」と、A君はその時の状況を語る。

でも、その答えはすぐに分かった。

ある日、その子は突然学校を休んだ。

実は、突然ではなかったらしい。だが、毎日学校に来る子なりに、生徒にとっては“突然”に映った。

担任の先生は、突然一時間目の算数の時間を潰してホームルームをする、と言いだした。なんだろうなんだろう、と皆がざわめく中、担任の先生は言った。

「——さんは、今日、三回忌に行かれました」

サンカイキ？ 子どもたちは口々にその言葉を発した。担任の先生は続けた。

「人が死んで、二年目にやるお葬式のことです」

その先生の言葉に、生徒の一人が手を上げた。誰が死んだんですか？ と。

まず先生は「死んだんですか」ではなくて、「お亡くなりになられたんですか」と言った方がいいわ」と生徒の言葉を訂正してから続けた。

「——さんの、お母様、そして妹さんね」

先生はさらに続けた。

「轢き逃げに遭われたの。そして、未だに犯人も捕まっていないの」
轢き逃げってなあに？ という言葉に、先生は答えたという。

「車で人をはねたにも関わらず、助けもせずに逃げてしまうこと」
なんで悪い人が捕まらないの？ 悪い人なんですよ？ どうして！？ 生徒達が口々にそう言ったのだという。その言葉に、先生は答えた。

「悪いことをしてもね、捕まらない人はいるの。悪いことをしても、捕まらないことはあるの。……でもね、先生はそれでも言いたいのに。

皆、悪いことをしてしまったら、きつちりと謝る強さを持つて」

生徒たちは、みんな下を向いた。

その次の日、学校にやってきた例の女の子に、この前大ゲンカをやらかした男の子が頭を下げた。「ごめん」と。すると、その女の子は顔をしかめた。顔をしかめた、というより、軽蔑を込めて睨みつけた、という感じだったらしい。

「絶対に許さない」

その女の子はその男の子のスポーツ刈りを睨みつけた。

「この鈴虫は、妹が遺してくれた、大事な鈴虫なの。……絶対に許さない」

本当に、その女の子はその男の子を許さなかったという。それから口を利いてくれることはなかったし、明らかに避けられてしまった。

そんな、同窓会らしからぬ話を延々と述べた上で、「ま、その男の子、その女の子のことが好きだったらいいんだけどな」とA君はこの話を締めた。

その話は、あくまで噂半分のようなものだ。だから、一樹が持ち合わせているストーリーが、A君の持っていたストーリーとリンクするとは限らない。でも、もしその二つのストーリーがリンクするのだとしたら。

その話を聞いてしまったから、一樹は一層鈴虫を大事にするしかなくなつた。

いつか鈴虫を取りに戻るだろう春菜のために。

だから、一樹は鈴虫を育て続ける。家に帰って茄子を切って串に刺し、煮干を数個水槽に落とす。

そうして餌の来迎を喜ぶかのように鳴く鈴虫を眺めながら、心の中にいる春菜に話しかける。

「春菜、君は、本当に鈴虫に生まれるべきだったんだ」と。

人を恨むことなく鳴き続ける、鈴虫だったら良かったんだ、と。

鈴虫が、一樹の部屋いつぱいに広がる声で泣き続ける。そして一樹はその横でビールをすする。そしてちよつと身を震わせて、
「だいぶ寒くなってきたな」
と力なく呟く。

窓の外では、もう既に虫は鳴いていなかった。河川敷に流れる風は、そろそろ冬色を纏い始めていた。

ストーリーテラーの独り言【完結】

最終話、いかがでした？

なんていうか、矢車の書く推理チックなものって、底が知れてるのよね。ぶっちゃけ、陳腐。

はあ、これで、すべて終わっちゃいました。

いかがでした？ 楽しんで頂けたのなら幸いです。……ってストーリーテラーに喋らせながら、作者、戦慄めいた苦笑いを浮かべてるけども。

でもね。

あたしには、もう一仕事あるの。ストーリーテラーとして。矢車の代弁者として、語らなくてはならないこと。それこそ、あたしの存在理由にも関わるような、重大な使命が。

あたしに課せられた一番の使命。それは、「矢車が“この短編集を書いた意図”を読者様にお伝えすること」なの。

本来、それはやってはならないことなの。だって、文章の“意味”なんて、読者様が決めるなり感じるなりしてくれればいいものなんだもの。作者が「これこれこういう意図で書いたお話なので、これこれこういう風に読んでくれ」なんて読者様にレクチャーしてしまつたら、それは小説じゃなくって、宗教書になっちゃうの。そして、「押しつけがましい」「説教臭い」話が大嫌いで、己の書いているものを宗教書だとはこれっぽっちも思っていない矢車からすれば、「宗教書」的な 作者―読者様 のありようは、“野暮”に映るらしいの。

それでも、どうしても自分の意図を書き募りたかったらしいのよ。自分で課した枷をかなぐり捨ててまで。

ただ、矢車つてば優柔不断だから、ストーリーテラーっていうクツシオンを置いて話すことで、免罪符を得ようとしたみたいよ。なんていうか、バカよねー。

語らなくちゃならないので、語るわ。だって、それがあたしの仕事だもの。

実はね、矢車がこの短編集をしたためたのは、スピッツのギター・三輪テツヤ氏へのエールのためなの。

二〇〇八年九月、スピッツのファンクラブ会報にて、三輪テツヤ氏がある発表をしたの。記事の引用なんかは出来ないけど、そのファンクラブ会報にて、自分が肺ガンであることを発表したの。幸い、初期のガンだったらしいので、これからもスピッツの一員として活動していく、ってファンに約束してくれたけど。

矢車にとって、この報道はショックだったみたいね。

何がショック？ 自分が尊敬しているクリエイターもいつかはいなくなってしまう、っていう事実に気づいたみたいだし、作り手の端くれとして今までスピッツと正面切って向き合ってた、って事実にも気づいたみたい。それ以上に、「スピッツが終わってしまうかもしれない」恐怖にも駆られたらしいの。

だから、矢車はスピッツの曲をモチーフに短編を書いたの。三輪テツヤ氏に、これからも変わらず頑張つて欲しくて。

ちなみにね。モチーフになった曲なんだけど、「月に帰る」も「花泥棒」も、「宇宙虫」も「リコシエ号」も、「死神の岬へ」も「鈴虫を飼う」も、すべて三輪テツヤ氏が作曲したの（ちなみに、スピッツは草野正宗がほとんどの曲の作詞作曲をしているらしいわ）。

「ロビンソン」に目が覚めるような衝撃を受けて、「空も飛べるはず」のリバイバルに目を見張つて、「チェリー」の可愛らしい世界にメロメロになって過去作品や新作を聞きかじっていくうちに、

気付けばスピッツが体の一部になっていた矢車による、スピッツへのひねくれたラブレター。それが「矢車特殊短編集」なのよ。

さて、これで、あたしの仕事はおしまい。

そして、この閉じられた世界もおしまい。

ストーリーテラーってね、特殊なキャラクターなのよ。そして、ストーリーテラーの存在する世界っていうのも、特殊な世界なの。

普通の小説世界っていうのは、「続き」が暗示されているでしょ？ 小説っていうのは、架空の人物の人生の一部を切り取ったものだから、話が終わってもなお「続き」が存在するはずなの。たとえば主人公が死んだとしてもそれは同じ。大抵の小説世界なら、主人公が死んでも、主人公が存在した世界は変わらずに存続するのよ。

でもね。ストーリーテラーの世界っていうのは、「続き」が想定されていないの。

ストーリーテラーの世界っていうのは、「ストーリーを紹介するため」だけに存在する世界。つまり、紹介するストーリーが枯れてしまった瞬間に、この世界の役割が果たされてしまう。ストーリーテラーが立っている世界っていうのは、最初の一言から最終頁までしか広がりが無い。最後のピリオドが打たれた瞬間に、この世界は一切の可能性が閉じられてしまうの。奥行きのない、平板な過去に変貌してしまうの。

あたしはこれから、無に帰る。

そしてあたしの世界も、無に帰る。

矢車のエゴによって生まれたあたしは、無に帰る。

ああ、あたしも普通の小説のキャラクターでありたかった。小説のキャラクターは、今これを読まれている読者様と同じく、悩んだり、くじけたり、笑ったり泣いたりして今を生きている。そして、作者が設定したピリオドの先を歩んでゆく。でも、あたしにはピリオドの先がない。そのくせ、作者と同じ視点を持っているがゆえに自分が作り物であることも重々分かっている。そして、読者様の

ことを感知できるから、こうやって読者様に言葉を投げかけることが出来る。でも、だから何だと言うの？ 読者様に言葉を投げかけたところで、何の意味が？

結局、あたしは何もできない。

ねえ。ちよつと、言わせて。

たまには、「矢車特殊短編集」の小説世界に生きている人達のことを思い出してあげてください。作者の拙い手によって紡がれた、短編集に出てきた人たちのことを、時折思い出してあげてください。そして、本当にたまにでもいいから、作者のエゴによって閉じられた世界に創造されてしまった、どこにも存在しないストーリーテラーのことを思い出してくれると嬉しい、かな。

なんだか、長ったらしくなっちゃった。

もう、時間もないみたいだから、言いそびれちゃう前に、言っちゃうね。

「矢車特殊短編集をお読みいただいて、ありがとうございました」。そして。

「さよなら」。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4234g/>

矢車特殊短編集

2011年8月6日03時25分発行